

令和2年度

「子どものこころの研究センターから展開
する国際研究拠点の形成と社会実装」
事業活動報告書

令和3年5月

大阪大学大学院

大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学

連合小児発達学研究科

子どものこころの研究センター

弘前大学子どものこころの発達研究センター

令和2年度 「子どものこころの研究センター」から展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業活動報告書

はじめに

令和2年度 拠点形成・推進委員会

委員長 佐藤 真

大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所（以下、連合小児発達学研究所）は、5つの国立大学法人の、臨床医学・生命科学・心理学・教育支援学など異なった背景を持つ研究者が集い、既存の領域を超えた新しい学際領域を創設して、「子どものこころの問題」に対して科学的な視点で対処できる人材を育成することを理念として開設された大学院です。各大学には、「子どものこころの研究センター*」が設置され、上記の学際領域の中で「子どものこころ」に関する基礎研究、治療法・介入法の開発を行い、さらに、教育現場への展開など、研究成果の社会実装を進めています。

欧米では多施設共同コンソーシアム型の研究が、発達障がいへの理解、支援の上で大きな力となっております。ところが、「子どものこころの問題」の表象には遺伝的・文化的な背景が大きく影響するため、欧米の先端的な研究をそのまま移植してもうまく適合しないことがしばしばあります。連合小児発達学研究所・子どものこころの研究センターに参画する上記5大学に、同じく「子どものこころの発達研究センター」を擁する弘前大学を加えた6大学は、蓄積してきた研究拠点としての活動実績を協働して発展させ、アジアの研究ハブとなるアジアコンソーシアムを形成することが必要であるとのコンセンサスに至りました。その活動の中核となるものの一つに、アジアの文化的背景にも焦点をあてた診断・介入法の開発があります。本「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業ではこの目的に沿った共同研究を推進いたします。

この事業は3年間を予定しており、本書は事業2年目（令和2年度）の成果をまとめたものです。事業2年目を迎え、初年度の国際交流を一層活性化するべく計画を立て、実行につとめてきました。一方で、不測のCOVID-19の拡がりがあり、対面での国際交流が大きく制限される事態にも直面いたしました。そのなかで、Zoomなどの遠隔会議システムをできるだけ活用し交流を進めると同時に、新たな心の危機にも直結するCOVID-19に対し、日本のグループと東南アジアの連携校と積極的に手を取り合い、研究を行っても参りました。

なお、本書では、事業の内容などの概要を各章の冒頭にまとめることで、まず全体を俯瞰的に説明し、次いで令和2年度の詳細な活動、成果、関連する資料などを配置し、個々の活動について詳細にお示しする形をとっております。

我々連合小児発達学研究所および弘前大学を含む関連する子どものこころの研究センター教職員一同は、少しでも高い水準での研究実施とより良き社会還元を実施することを目指しております。本活動に対する忌憚のないご意見およびご指導、ご鞭撻を頂けますと幸いです。

*本事業での通称。詳細は次々頁を参照とされたい。

目次

1. 事業について	1頁
2. 活動報告	
(1) 活動実績の概要	9頁
(2) 成果一覧（原著論文，総説，著書，受賞）	12頁
(3) 委員会の活動実績	
① 拠点形成・推進委員会	29頁
② 実行委員会	30頁
部会（実行委員会に設置）の活動実績	
共同研究推進・国際ハブ化推進部会，拠点化基盤推進部会	31頁
社会実装支援部会	102頁
若手人材育成部会	104頁
③ 広報委員会	118頁
④ アドバイザリーボード	122頁
⑤ 外部評価委員会	122頁
(4) 各校を拠点とする活動実績・KPI	123頁
3. 資料	
(1) 委員会等構成員一覧	137頁
(2) 関連規程	140頁
(3) 委員会議事要旨	
① 拠点形成・推進委員会議事要旨	148頁
② 実行委員会議事要旨	154頁
部会（実行委員会に設置）議事要旨	
共同研究推進・国際ハブ化推進部会，拠点化基盤推進部会	168頁
社会実装支援部会	177頁
若手人材育成部会議事要旨	182頁
③ 広報委員会議事要旨	186頁
4. その他	188頁

令和2年度

【 事業について 】

本事業並びに本報告書では、参加各校に設置された子どものこころの諸問題を研究するセンターを「子どものこころの研究センター」として一括して呼称している。

正式な組織名は、大阪大学では、連合小児発達学研究所附属「子どものこころの分子統御機構研究センター」、金沢大学、浜松医科大学、福井大学では、それぞれ「子どものこころの発達研究センター」、千葉大学では「子どものこころの発達教育研究センター」、弘前大学では医学研究科附属「子どものこころの発達研究センター」である。

<事業について>

事業名：子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装

本事業は、文部科学省共通政策課題分（全国共同利用・共同実施分）「新たな共同利用・共同研究体制の充実」の枠組で実施する事業であり、大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所が事業実施主体となり、連合小児発達学研究所を構成する5大学（以下、5大学）に弘前大学が加わった6大学が参加し、実施するものである。

本事業では、共同研究推進・国際展開促進を担う担当組織を設け、連合小児発達学研究所・子どものこころの研究センター*が協働し、「子どものこころの問題」に対する診断・介入法を開発すべく多施設共同研究を推進し、若手人材を育成し、共同利用・共同研究拠点認定を目指す。同時に、拠点化を見据え、拠点となりうる現存の研究基盤を強化する。そして、欧米に比肩しうるアジアコンソーシアムを形成してアジアのハブ拠点となり、アジアの特性を鑑みた介入法や研究成果を世界に発信する。

*医学、生命科学、心理学、教育学、看護学等からなる学際領域において、子どものこころの問題を取り扱う組織としての「子どものこころの研究センター」では、子どものこころについて科学的多様な視点から問題の原因の解析を行い、解決を目指す。連合小児発達学研究所では、「子どものこころの研究センター」で得た知見をもって、共通のプラットフォームを用いて専門家の養成をすすめる。「子どものこころの研究センター」は、研究成果を利用した教育・保健・福祉・医療への展開をもミッションとしている。なお、この名称は6大学の関連組織を統一的に表記する呼称として本報告書で使用する。正式な組織名は、大阪大学では、連合小児発達学研究所附属「子どものこころの分子統御機構研究センター」、金沢大学、浜松医科大学、福井大学では、それぞれ「子どものこころの発達研究センター」、千葉大学では「子どものこころの発達教育研究センター」、弘前大学では医学研究科附属の「子どものこころの発達研究センター」がそれに相当する。また、本報告書では、各大学の「子どものこころの研究センター」をそれぞれ、大学名+センター（例、大阪大学であれば 大阪センター）と称する。また、連合小児発達学研究所に参画している5大学をそれぞれ、連合小児発達学研究所の構成大学として、大阪校（大阪大学）、金沢校（金沢大学）、浜松校（浜松医科大学）、千葉校（千葉大学）、福井校（福井大学）と呼称している。

【背景】

発達障がい、摂食障害や、虐待に関連する「こころの問題」を抱える子どもたちが増えており、少子化日本の大きな課題となっている。社会の喫緊の課題である「子どものこころに関する諸問題」における脳科学的基盤の解明、治療・介入法の開発に対しては、いまだ根本的な解決にはいたっていないものの、世界規模で活発に取り組みまれており、欧米ではコンソーシアム形成が急速に進んでおり、大規模共同研究が進んでいる。しかしながら、「こころの問題」に関しては、遺伝・文化・社会等多様な因子が関わるため、その解決についてはグローバルな視点とともに、ドメスティックな視点も必要である。特に経済状況、福祉教育システムなどの社会的背景への考慮なしに、地域に適合した介入法は開発できない。この意味

で、日本をはじめとしたアジアにおける有効な介入法の開発は緊喫の課題である*。このように、人種、文化の影響の大きい子どものこころの諸問題に対し、アジアの特性に留意した研究は欠かせない。

*論文数や、多施設共同研究ではアジアは取り残されている。例えば、今までの自閉スペクトラム症関連論文数は、日本 979 本(0.8 本/10 万人) や中国 1045(0.1)に対し、アメリカ 4416(1.4)、英国 1371(2.1)、オランダ 620(3.6)、ドイツ 923(1.1)、スウェーデン 463(4.7)。注意欠如多動症は、日本 487(0.4)、中国 707 (0.1)に対し、アメリカ 8184(2.5)、英国 2125(3.2)、オランダ 1459(8.6)、ドイツ 1709(2.1)、スウェーデン 871(8.8) (Pubmed より作成、2018 年 5 月までの発表論文の総計) となっており、アジア発信の研究は欧米に大きく遅れている。

一方、子どものこころの解決には、広く専門家を配置し知見を全国で共有する活動が必要であるが、専門家の数が圧倒的に不足している。連合小児発達学研究科および関連する子どものこころの研究センターは、日本で唯一の子どものこころに特化した組織であり、その活動のより活性化、広がりに対する社会的ニーズは大きい*。

*本事業開始に際し、多くの首長から子どものこころの研究センター強化の要望をいただいた (大阪府池田市長、同堺市長、千葉県千葉市長、同柏市長、福井県知事、同永平寺町長、青森県弘前市長)。

【本事業開始前までの取組実績】

連合小児発達学研究科構成 5 大学に弘前大学を加えた各大学の「子どものこころの研究センター」では、積極的に先端的脳研究・医学研究に取り組んできた。これは、発達障がい診断が成育歴の聴取と行動評価によってのみ行われており、生物学的なデータが反映されない現状への「科学」の導入の必要性を強く感じる故である。代表的な発達障がいである自閉スペクトラム症をとっても、個々の子どもの特性は多様であることが知られており、注意欠如多動症、学習症など他の発達障がいの合併も多い。NIH の RDoC (Research Domain Criteria) プロジェクトは、精神疾患は複雑な遺伝・環境要因と発達の段階によって理解される脳の神経回路の異常によって起こるとする仮説に基づいて、精神疾患を診断カテゴリーにとらわれることなく、生物学的でありかつ横断的な視点を取り入れられたディメンショナルな評価基準による枠組み (フレームワーク) にて構築したものであるが、発達障がいにおいても、病態に基づく診断や支援を実現していくためには、RDoC も考慮したアプローチが必要である。そこで我々は、発達障がいとその関連疾患における病態研究と特性に応じた治療法の開発研究を遂行してきた。特筆すべき成果としては、乳幼児自閉スペクトラム症の脳磁図研究 (金沢センター)、愛着障害にかかる脳画像研究 (福井センター)、ヒト細胞を用いた病態研究 (大阪センター)、自閉スペクトラム症診断補助装置の開発 (浜松センター、福井センター、大阪センター、弘前センターの共同研究)、発達コホート研究 (浜松センター)、オキシトシンを用いた自閉スペクトラム症治療研究 (浜松センター、金沢センター、福井センター、大阪センターの共同研究)、日本の風土に適した認知行動療法 (千葉センター) や自閉スペクトラム症に特化したペアレントトレーニング開発 (大阪センター) などの介入研究、などが挙げられる。得られた成果は積極的に

発信しており、高い評価を得てきた。上記の共同研究を含めて、国内 11 大学、少なくとも 25 の国外大学・研究所と共同研究を実施してきた。

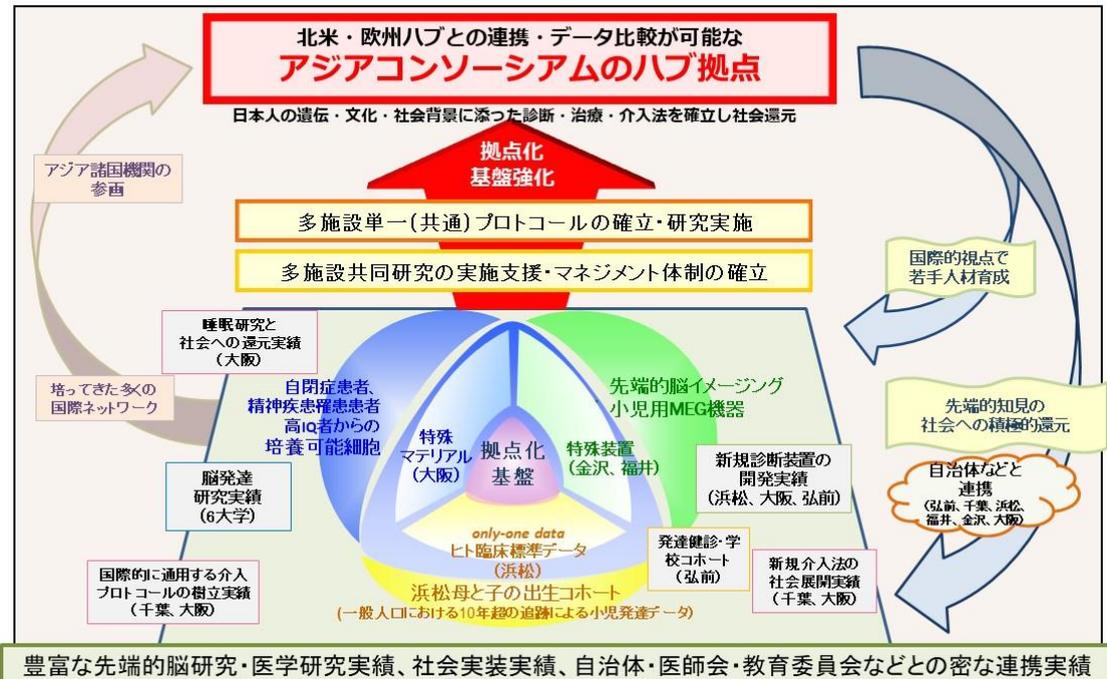
先端的脳研究のみならず、成果の社会実装にも取り組んでおり、地元自治体・医師会・教育委員会などとの連携実績も豊富である。例えば、大阪大学では、平成 19 年度から堺市と発達障がい支援体制についての研究を行い、早期発見・療育、養育者支援の堺市モデルを構築してきた。平成 22 年度から池田市との受託研究にてライフステージ縦断・部署横断型ツールの作成、新規注視点検出装置の導入などを行い、同様の取り組みを平成 27 年度から西宮市でも開始している。金沢大学は、石川県内にて、小中高等学校、特別支援学校、病院間等、県市ネットワークを構築し、県や市の教育委員会と共同で学校教育現場への導入が望ましいプログラムの研修教育を開始している。浜松医科大学は、浜松市において発達障がい児者支援体制のデザイン・維持・運営に関与し、とりわけ、医師、保健師のコーディネートに指導的な役割を果たしている。静岡県磐田市公立小・中学校においては、いじめの実態や環境について詳細な調査を行い、教育委員会と学校、教員が取り組むべき総合的いじめ対策を提示した。千葉大学は、平成 27 年度から千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、平成 29 年からはさらに鳥取県教育委員会と連携し、「不安への対処力を養う認知行動療法プログラムの授業実践」の研修会を小・中学校の教諭、養護教諭、スクールカウンセラーを対象に実施し、平成 29 年度末の時点で約 413 名の指導者を養成した。一方で、平成 24 年度より柏市の委託事業として、認知行動療法を活用した自殺対策の人材養成事業を行っている。弘前大学は、弘前市において 5 歳児発達健診を行い就学前に発達障がい未診断・未支援児が多数いることを見出し、診断ツールを開発した。そして、小・中学校で学校コホート研究を行っている。

【事業内容】

拠点となるべく、オンリーワンの研究基盤である、独自の特殊材料（患者細胞）、特殊機器（脳イメージング機器、小児用脳磁図装置）、永年にわたる浜松出生コホートデータの蓄積を、さらに強化する。そして、これら拠点化基盤の国内外との共有を積極的にすすめる。同時に、国際共同研究をすすめるにあたり、エビデンスを持った研究成果を出すには必須である多施設共同研究のマネジメント体制を確立し、多施設単一プロトコルにて共同研究を実施できる体制を築く。その上で、欧米との国際比較を可能とするアジアコンソーシアムのハブ拠点となり、アジアの特性を鑑みた診断・介入法を開発して、研究成果を世界に発信する。合わせて、これらの先端的成果を積極的に社会へ還元する仕組みを樹立する。さらに、積極的に若手人材の育成を進めるために、若手海外研究・海外招聘プログラムなどを実施する。

事業内容

子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装



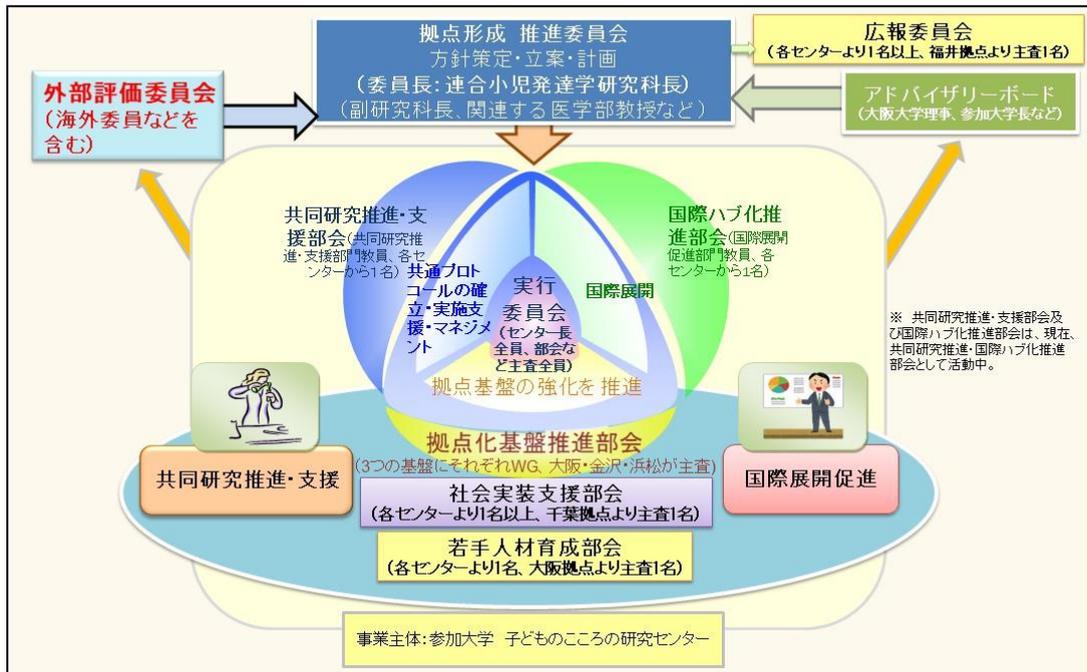
以上の事業を可能とするべく、5大学および弘前大学は大学間共同研究も含め、積極的に活動を重ねている。同時に、事業全体として活動を行うため、次項に記す委員会や部会を設置し、協働して事業の推進にあたっている。

【実施体制】

研究科長のもと、拠点形成・推進委員会を設置し、方針策定、立案、計画をおこなう。アドバイザーボードおよび外部評価委員会を設置する。各校の子どものこころの研究センター長を委員とする実行委員会のもとに、共同研究推進支援部会、国際ハブ化推進部会、並びに拠点基盤の強化を担う拠点化基盤推進部会を置く。さらに社会実装支援部会、若手人材育成部会を設置し、社会実装と若手の育成を図る体制としている(次頁)。事業初年度は、共同研究推進・支援部会は国際ハブ化推進部会と一体化し事業実施にあたった。さらに令和2年度は、関連する事項を扱う部会において、連携して事業実施に当たること、より効率的かつ実効性の高い活動が実施できると考え、拠点化基盤推進部会は共同研究推進・支援・国際ハブ化推進部会とともに活動を行った。

実施体制

子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装



【事業実施当初における実施計画】

本事業では、10年をかけ、拠点化に取り組む予定としており、文部科学省にも説明済みである。但し、本予算枠は、いわゆる大学の中期目標・中期計画によるものであり、文部科学省からの「共通政策課題分（全国共同利用・共同実施分）「新たな共同利用・共同研究体制の充実」による支援は、現在の第3期中期目標・中期計画の実施期間における支援となる。

事業内容でもふれたが、そのため当初の3年間では、アジアとの共同研究の基盤となる「多施設共同研究支援・マネジメント体制」、あわせて「多施設単一（共通）プロトコルの確立」を目指し、そのうえで、国際ネットワークのハブとしての活動を行うこととした。特に、本事業では、臨床研究が重要な柱であるため、患者情報などの倫理面にも国を超えて配慮し、活用できる体制の確立が基本となる。その詳細をまとめた図を次頁に示す。

事業内容

子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装

多施設共同研究実施支援体制の確立 【～2020年度】

これまでの準備状況

- ❖ 大阪大学サーバー運営とVPN接続ネットワークの確立
- ❖ DB検討委員会の設置と利用の推進

障壁

ルールの厳格化

機関ごとのルールの差異

医学系研究倫理指針改定(平成29年2月)、臨床研究法(平成30年4月)の施行により、機関外でのデータ共同利用は個々の研究者の力量を超える。

既存データ活用の困難

若手研究者の連携困難

すでに集めたデータが、相応の工夫や追加同意がなければ、今後の利用が不可能になる恐れがある。一方、多施設共同研究の経験が少ない若手研究者が優れたアイデアを持っていても共同研究の実現が難しい。

なぜ新たな実施支援組織が必要なのか？

現組織の実績と情報の蓄積を活かした拠点化は、研究倫理に連入、機関間調整に専従する、高い遂行力を持つ人材が必要

**6機関間の
統一ルール**

⇄

**機関外
共同利用ルール**

若手研究者による
共同研究支援

多施設単一(共通)プロトコルの確立 研究実施

これまでの準備状況

- ❖ 大学院連合小児発達学研究所における異種臨床データ連結試験
- ❖ 神経画像プロトコルをすり合わせる検討小委員会の設立
- ❖ 出生コホートデータの6連合体外機関との共同利用の検討

Birth Cohort Consortium in Asia(右図)では、低出生体重と肥満の関連についての共通仮説が設定され、共同研究が始まっている。

出生コホート研究
連携ワークショップ
慶応コホート(国立成育医療研究センター)
C-MACH(千葉大)
早稲プロジェクト(山梨大)
東北メディカル・メガバンク(東北大)
など

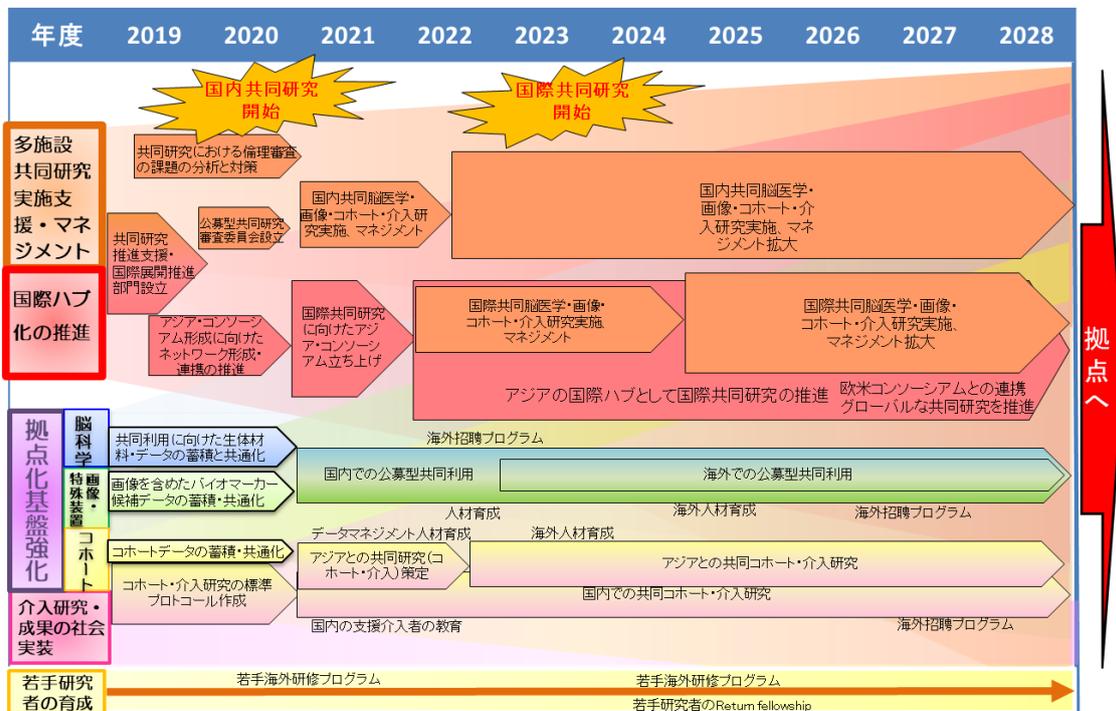
第1段階

- ❖ 国内外のさまざまな機関と「子どもの発達」をテーマにした共通仮説を設定
- ❖ 現有の多施設データを加工して「共通プロトコル」を作成

第2段階

- ❖ 共通仮説を設定し、方法論をそろえた「共通プロトコル」を作成して研究実施

さらに、2019年事業開始当初の事業計画(10年間)を以下に示す。



拠点化を目的とする本事業では、アジア地区のハブとなるべく実施する研究の基盤として、高い研究実績が求められる。前頁の図には、その点も含め記載している。

【評価指標】

評価にあたっては、前項の事業計画の達成度が重要な指標となる。あわせて、研究拠点として、以下を評価指標として設定している。

- ・ 5大学および弘前大学間での共同研究（数）、人材交流実績
- ・ 国際共同論文の数、質、およびその増加
- ・ 日本人の特性に適した、診断・治療・介入法の提唱
- ・ 先端的知見の地域還元実績（市民公開シンポジウム、報道数、専門家研修など）
- ・ 若手研究者育成実績
- ・ アジアのハブとしての活動実績（シンポジウム、共同研究、政策への反映など）

同時に

- ・ 国内・国際共同研究マネジメント数

も重要な指標としている。

さらに、事業の当初の2年間では、前頁にも掲載したが、

・ 既存リソースの共通化・国際共通臨床データベースの構築が重要と考えている（達成度の詳細は123頁~125頁に記載）。

令和2年度のこれら項目の達成度については11頁に図示した。詳細は9頁以降にまとめた。

【期待される効果等】

本事業では、以下の成果が期待できる。

- 新たな治療や介入手法の開発、関連する脳機能の基盤解明を国際的にもリードでき、関わる大学の教育・研究の向上に大きく寄与できる。
- 先端的研究成果を積極的に、日本広く、もしくは国際的に活用できる体制が構築され、広く最新の診断・治療・介入法に関する成果に浴すことができる。
- アジアコンソーシアムのハブ拠点として、欧米との国際比較のもと、日本人やアジア人の特性を配慮した、実質的な治療・介入法が開発できる。
- 急増し、かつ対応できる人員が限定的である「子どものこころ」の問題に、専門的見地から取り組める人員の増加が実現でき、社会的に大きな意義がある。

令和2年度

【 活動報告 】

<活動実績の概要>

事業2年目の令和2年度は、初年度の活動を受け、その実体化を目指し活動を進めた。一方で、COVID-19の蔓延があり、COVID-19への取り組みが課題として浮き上がってきた。

そのうえで今までの先端的研究のさらなる実施、アジア諸国との共同研究の基盤形成を行った。以下に、その概要を記す。

なお、本事業のホームページにおいてもその活動内容を紹介している。

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/>

1. 事業実施体制 (1頁～7頁, 29頁～122頁, 137頁～147頁)

事業初年度に確立した実施体制のもと、令和2年度は事業を進めた。詳細な体制については、昨年度の報告書をご参照されたい。

2. 拠点化基盤の強化、多施設共同研究の推進 (31頁～101頁)

令和2年度は、事業主体外研究者と6大学内研究者との共同研究4件に対し、共同研究支援として本事業部会より、研究支援を行った(60頁～63頁)。また、研究科全体としては、令和2年度の国内多施設共同研究は20件を数えた(125頁)。

連合小児発達学研究所構成5大学ならびに弘前大学においては、いわゆる高インパクトファクター雑誌も含め、活発に研究が実施され(123頁～135頁)、論文発表が行われた(12頁～28頁)。

3. アジアコンソーシアム形成に向けたネットワーク形成、国際共同研究の推進 (30頁～101頁)

令和2年度は、令和元年度に連携を開始したマラヤ大学医学部(マレーシア)、フィリピン小児医療センター(フィリピン)、マヒドン大学医学部(タイ)、インドネシア国立大学医学部(インドネシア)の研究者と引き続き連携して活動を行った。令和2年度より、事業参加6大学と上記東南アジア4施設と共同で国際発達障がい患者レジストリ Asian Neurodevelopmental Disorders Registry (ANDy)を共同で立ち上げ、大阪大学での国内一括倫理審査、各国での倫理審査を経て稼働させた。これに伴い、Data Sharing Policyについての同意文書を作成し海外各施設と交わした。また、COVID-19禍における発達障がい児とその家族が必要とするサポート及び養育者が抱えるストレスについて、マレーシア・マラヤ大学と大阪大学・金沢大学、マラヤ大学と福井大学とで共同研究を行ない、このマネジメントを行った。さらに令和元年度より継続して、大阪大学

が開発した小児睡眠質問票の東南アジア版の作成を 4 か国との共同研究で進め、マレーシアではマレーシア語版及び英語版の妥当性の検証が終了し、タイではタイ語版の検証が進行中である。これら東南アジア 4 大学とは、令和元年度に引き続き令和 3 年 1 月に国際シンポジウム 'the 2nd International Symposium for Asian Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders' を大阪会場と Zoom によるハイブリッド形式で開催し、共同研究の成果の共有と意見交換を行った。

また、学内研究者の海外との共同研究および学外研究者の共通リソースの活用を推進するため、学内対象の海外との共同研究支援および 6 大学外の研究者の学内研究者との共同研究支援の募集を行い、令和 2 年度は学内 4 件、学外 4 件（海外からの応募 2 件を含む）の共同研究に対して本事業部会より研究費の支援を行った(64 頁～67 頁)。研究科全体の令和 2 年度の国際共同研究論文は、42 編（in press 1 編含む）にのぼった（12 頁～26 頁）。

4. 社会実装（102 頁～103 頁，129 頁～131 頁）

連合小児発達学研究科では、とくに千葉校において、認知行動療法をベースとした社会実装（学校で、特に不登校対策として使用することを目的に独自に作製した教材～勇者の旅～の教育現場への展開）が進められている。アジア地域において展開を図るべく、台湾の教育関係者協力の下、同教材の多言語化（中国語、フィリピン語）が進められた。

5. 人材育成（104 頁～117 頁，131 頁～133 頁）

若手人材の国際交流を促進し、国際共同研究を行う力を持った若手研究者を育成するため、本事業部会からは若手研究者の研究支援を令和 2 年度は 7 件行った。研究科全体の支援は 27 件にのぼった。

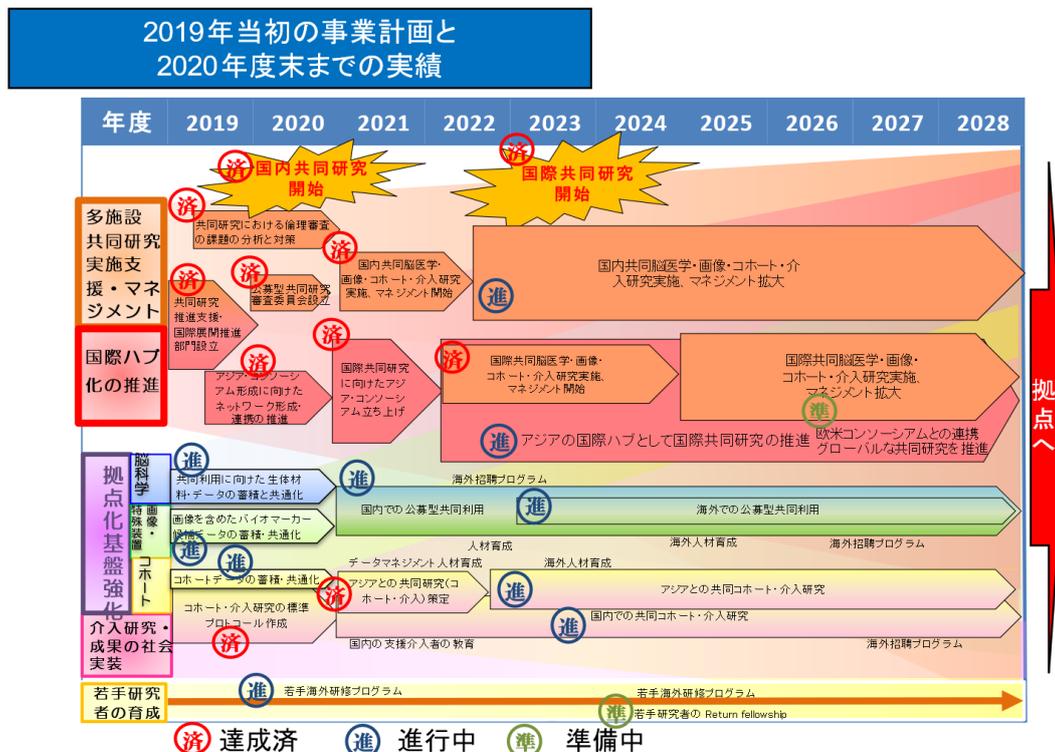
6. 評価指標（K P I）に対する達成度について

進捗成果は以下のとおりである（詳細は、123 頁～135 頁に記載）。

- ・ 5 大学および弘前大学間での共同研究（数）、人材交流実績 20 件
- ・ 国際共同論文の数、質 およびその増加 42 編（in press 1 編含む）
- ・ 日本人の特性に適した、診断・治療・介入法の提唱 22 件
- ・ 先端的知見の地域還元実績（市民公開シンポジウム、報道数、専門家研修など）246 件
- ・ 若手研究者育成実績 27 件
- ・ アジアのハブとしての活動実績（シンポジウム、共同研究、政策への反映など）14 件
- ・ 国内・国際共同研究マネジメント数 54 件

なお、「既存リソースの共通化・国際共通臨床データベースの構築」については、KPI として指標化はしていないが、予定を上回って達成できた（11 頁，123 頁～125 頁）。

7. 活動計画と対比した実績を以下に模式図にて示す。
事業計画を先取りして実績をあげることができた。



<成果一覧（原著論文， 総説， 著書， 受賞）>

2020 年度

【英文原著論文】数字の*は国際共同研究を示す。

1. Ishii A, Okuno H, Nakaoka T, Iwasaka H, Taniike M. Effectiveness of a Teacher Training Program for Students with Symptoms of Developmental Disorders: Data from a Correspondence High School in Japan. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 17(9) : 3100, 2020.
2. Haraki S, Tsujisaka A, Toyota R, Shiraishi Y, Adachi H, Ishigaki S, Yatani H, Taniike M, Kato. First night effect on polysomnographic sleep bruxism diagnosis varies among young subjects with different degrees of rhythmic masticatory muscle activity. *T Sleep Med*, 75 : 395-400, 2020.
3. Okura M, Nonoue S, Tsujisaka A, Haraki S, Yokoe C, Taniike M, Kato T. Polysomnographic analysis of respiratory events during sleep in young nonobese Japanese adults without clinical complaints of sleep apnea. *J Clin Sleep Med*, 16(8) : 1303-1310, 2020.
- 4*. Yamada T, Miura Y, Oi M, Akatsuka N, Tanaka K, Tsukidate N, Yamamoto T, Okuno H, Nakanishi M, Taniike M, Mohri I, Laugeson EA. Examining the Treatment Efficacy of PEERS in Japan: Improving Social Skills Among Adolescents with Autism Spectrum Disorder. *J Autism Dev Disord*, 50(3) : 976-997, 2020.
- 5*. Shinohara M, Kanekiyo T, Tachibana M, Kurti A, Shinohara M, Fu Y, Zhao J, Han X, Sullivan PM, Rebeck WG, Fryer JD, Heckman MG, Bu G. APOE2 is associated with longevity independent of Alzheimer's disease. *eLife*, 9 : e62199, 2020.
6. Yoshizaki A, Mohri I, Yamamoto T, Shirota A, Okada S, Murata E, Hoshino K, Kato-Nishimura K, Matsuzawa S, Kato T, Taniike M. An Interactive Smartphone App, Nenne Navi, for Improving Children's Sleep: Pilot Usability Study. *JMIR Pediatr Parent*, 3(2) : e22102, 2020.
7. Shinomiya Y, Yoshizaki A, Murata E, Fujisawa TX, Taniike M, Mohri I. Sleep and the General Behavior of Infants and Parents during the Closure of Schools as a Result of the COVID-19 Pandemic: Comparison with 2019 Data. *Children*, 8(2) : 168, 2021.
8. Hagihara K, Kajimoto K, Osaga S, Nagai N, Shimosegawa E, Nakata H, Saito H, Nakano M, Takeuchi M, Kanki H, Kagitani-Shimono K, Kijima T. Promising Effect of a New Ketogenic Diet Regimen in Patients with Advanced Cancer. *Nutrients*,

- 12(5) : 1473, 2020.
9. Kagitani-Shimono K, Kato H, Hayashi R, Tominaga K, Nabatame S, Kishima H, Hatazawa J, Taniike M. Clinical evaluation of neuroinflammation in child-onset focal epilepsy: a translocator protein PET study. *J Neuroinflammation*, 18(1) : 8, 2021.
 10. Yoshimi K, Oka Y, Miyasaka Y, Kotani Y, Yasumura M, Uno Y, Hattori K, Tanigawa A, Sato M, Oya M, Nakamura K, Matsushita N, Kobayashi K, Mashimo T. Combi-CRISPR: combination of NHEJ and HDR provides efficient and precise plasmid-based knock-ins in mice and rats. *Hum Genet*. 2021 Feb;140(2):277-287. doi: 10.1007/s00439-020-02198-4. Epub 2020 Jul 2.
 11. Amano G, Matsuzaki S, Mori Y, Miyoshi K, Han S, Shikada S, Takamura H, Yoshimura T, Katayama T. SCYL1 arginine methylation by PRMT1 is essential for neurite outgrowth via Golgi morphogenesis. *Mol Biol Cell*. 2020 Aug 15;31(18):1963-1973. doi: 10.1091/mbc.E20-02-0100. Epub 2020 Jun 17.
 12. Higashi M, Yoshimura T, Usui N, Kano Y, Deguchi A, Tanabe K, Uchimura Y, Kuriyama S, Suzuki Y, Masaki T, Ikenaka K. A Potential Serum N-glycan Biomarker for Hepatitis C Virus-Related Early-Stage Hepatocellular Carcinoma with Liver Cirrhosis. *Int J Mol Sci*. 2020 Nov 24;21(23):8913. doi: 10.3390/ijms21238913.
 13. Hashimoto M, Suzuki M, Hotta M, Nagase A, Yamamoto Y, Hirakawa N, Nagata Y, Satake Y, Suehiro T, Kanemoto H, Yoshiyama K, Mori E, Ikeda M. The Influence of the COVID-19 Outbreak on the Lifestyle of Older Patients With Dementia or Mild Cognitive Impairment Who Live Alone. *Front Psychiatry*. 2020 Oct 30;11:570580. doi: 10.3389/fpsy.2020.570580. eCollection 2020.
 14. Suzuki M, Hotta M, Nagase A, Yamamoto Y, Hirakawa N, Satake Y, Nagata Y, Suehiro T, Kanemoto H, Yoshiyama K, Mori E, Hashimoto M, Ikeda M. The behavioral pattern of patients with frontotemporal dementia during the COVID-19 pandemic. *Int Psychogeriatr*. 2020 Oct; 32(10)1231-1234. doi:10.1017/S104161022000109X. Epub 2020 Jun 10.
 15. Watanabe H, Ikeda M, Mori E. Non-fluent/Agrammatic Variant of Primary Progressive Aphasia With Generalized Auditory Agnosia. *Front Neurol*. 2020 Jun 6; 1:519. doi: 10.3389/fneur.2020.00519.
 - 16*. Takeuchi S, Kawanai T, Yamauchi R, Chen L, Miyaoka T, Yamada M, Asano S, Hayata-Takano A, Nakazawa T, Yano K, Horiguchi N, Nakagawa S, Takuma K, James A Waschek, Hashimoto H, Ago Y. Activation of the VPAC2 Receptor Impairs Axon Outgrowth and Decreases Dendritic Arborization in Mouse Cortical Neurons by a PKA-Dependent Mechanism. *Front Neurosci*. 2020 Jun 4; 4:521. doi: 10.3389/fnins.2020.00521. eCollection 2020.

- 17*. Sato M, Chou SJ. Editorial: The Earliest-Born Cortical Neurons as Multi-Tasking Pioneers: Expanding Roles for Subplate Neurons in Cerebral Cortex Organization and Function. *Front Neuroanat* 2020 Aug 25; 14:43. doi: 10.3389/fnana.2020.00043.
18. Hamaguchi T, Sakai K, Kobayashi A, Kitamoto T, Ae R, Nakamura Y, Sanjo N, Arai K, Koide M, Katada F, Harada M, Murai H, Murayama S, Tsukamoto T, Mizusawa H, Yamada M: Characterization of Sporadic Creutzfeldt-Jakob Disease and History of Neurosurgery to Identify Potential Iatrogenic Cases. *Emerging infectious diseases* 2020, 26:1140-6.
19. Hideshima M, Beck G, Yamadera M, Motoyama Y, Ikenaka K, Kakuda K, Tsuda H, Nagano S, Fujimura H, Morii E, Murayama S, Mochizuki H: A clinicopathological study of ALS with L126S mutation in the SOD1 gene presenting with isolated inferior olivary hypertrophy. *Neuropathology* 2020; 40:191-5.
- 20*. Ishigaki K, Akiyama M, Kanai M, Takahashi A, Kawakami E, Sugishita H, Sakaue S, Matoba N, Low SK, Okada Y, Terao C, Amariuta T, Gazal S, Kochi Y, Horikoshi M, Suzuki K, Ito K, Koyama S, Ozaki K, Niida S, Sakata Y, Sakata Y, Kohno T, Shiraishi K, Momozawa Y, Hirata M, Matsuda K, Ikeda M, Iwata N, Ikegawa S, Kou I, Tanaka T, Nakagawa H, Suzuki A, Hirota T, Tamari M, Chayama K, Miki D, Mori M, Nagayama S, Daigo Y, Miki Y, Katagiri T, Ogawa O, Obara W, Ito H, Yoshida T, Imoto I, Takahashi T, Tanikawa C, Suzuki T, Sinozaki N, Minami S, Yamaguchi H, Asai S, Takahashi Y, Yamaji K, Takahashi K, Fujioka T, Takata R, Yanai H, Masumoto A, Koretsune Y, Kutsumi H, Higashiyama M, Murayama S, Minegishi N, Suzuki K, Tanno K, Shimizu A, Yamaji T, Iwasaki M, Sawada N, Uemura H, Tanaka K, Naito M, Sasaki M, Wakai K, Tsugane S, Yamamoto M, Yamamoto K, Murakami Y, Nakamura Y, Raychaudhuri S, Inazawa J, Yamauchi T, Kadowaki T, Kubo M, Kamatani Y: Large-scale genome-wide association study in a Japanese population identifies novel susceptibility loci across different diseases. *Nat Genet* 2020; 52:669-79.
21. Kakuda N, Yamaguchi H, Akazawa K, Hata S, Suzuki T, Hatsuta H, Murayama S, Funamoto S, Ihara Y: gamma-Secretase Activity Is Associated with Braak Senile Plaque Stages. *Am J Pathol* 2020; 190:1323-31.
22. Omura T, Motoyama R, Tamura Y, Nonaka K, Tanei ZI, Shigemoto K, Tokumaru AM, Murayama S, Arai T, Araki A: Meningoencephalitis caused by masked mastoiditis that was diagnosed during a follow-up in an elderly patient with diabetes mellitus: A case report. *Geriatr Gerontol Int* 2020, 20:500-1.
- 23*. Schweighauser M, Shi Y, Tarutani A, Kametani F, Murzin AG, Ghetti B, Matsubara T, Tomita T, Ando T, Hasegawa K, Murayama S, Yoshida M, Hasegawa M, Scheres

- SHW, Goedert M: Structures of alpha-synuclein filaments from multiple system atrophy. *Nature* 2020; 585: 464- 469
24. Serisawa S, Hirao K, Sato T, Ogawa Y, Kanetaka H, Enomoto M, Shimizu S, Sakurai H, Sakashita Y, Murayama S, Hanyu H: Adult-onset neuronal intranuclear inclusion disease showing markedly high phosphorylated tau protein levels in cerebrospinal fluid. *Geriatr Gerontol Int* 2020; 20: 793- 795
- 25*. Zhang W, Tarutani A, Newell KL, Murzin AG, Matsubara T, Falcon B, Vidal R, Garringer HJ, Shi Y, Ikeuchi T, Murayama S, Ghetti B, Hasegawa M, Goedert M, Scheres SHW: Novel tau filament fold in corticobasal degeneration. *Nature* 2020, 580:283-7.
- 26*. Nagano, S., Jinno, J., Abdelhamid, R. F., Jin, Y., Shibata, M., Watanabe, S., Hirokawa, S., Nishizawa, M., Sakimura, K., Onodera, O., Okada, H., Okada, T., Saito, Y., Takahashi-Fujigasaki, J., Murayama, S., Wakatsuki, S., Mochizuki, H., Araki, T.: TDP-43 transports ribosomal protein mRNA to regulate axonal local translation in neuronal axons. *Acta Neuropath* 2020; 140: 695- 713
27. Matsubara T, Izumi Y, Oda M, Takahashi M, Maruyama H, Miyamoto R, Watanabe C, Tachiyama Y, Morino H, Kawakami H, Saito Y, Murayama S: An autopsy report of a familial amyotrophic lateral sclerosis case carrying VCP Arg487His mutation with a unique TDP43 proteinopathy. *Neuropathology* 2021.
28. Nakano M, Mitsuishi Y, Liu L, Watanabe N, Hibino E, Hata S, Saito T, Saido TC, Murayama S, Kasuga K, Ikeuchi T, Suzuki T, Nishimura M: Extracellular Release of ILEI/FAM3C and Amyloid-beta Is Associated with the Activation of Distinct Synapse Subpopulations. *J Alzheimers Dis* 2021.
29. Sobue A, Komine O, Hara Y, Endo F, Mizoguchi H, Watanabe S, Murayama S, Saito T, Saido TC, Sahara N, Higuchi M, Ogi T, Yamanaka K: Microglial gene signature reveals loss of homeostatic microglia associated with neurodegeneration of Alzheimer's disease. *Acta neuropathologica communications* 2021, 9:1.
30. Tanei ZI, Saito Y, Ito S, Matsubara T, Motoda A, Yamazaki M, Sakashita Y, Kawakami I, Ikemura M, Tanaka S, Sengoku R, Arai T, Murayama S: Lewy pathology of the esophagus correlates with the progression of Lewy body disease: a Japanese cohort study of autopsy cases. *Acta Neuropathol* 2021, 141:25-37.
31. Umeda K, Kawakami I, Ikeda K, Tanei ZI, Matsubara T, Murayama S, Murahashi Y, Niizato K, Oshima K, Iritani S: Case report of anorexia nervosa showing periventricular gliosis at autopsy. *Neuropathology* 2021 Jan 20. doi: 10.1111/neup.12711.
32. Fujioka T, Tsuchiya KJ, Saito M, Hirano Y, Matsuo M, Kikuchi M, Maegaki Y, Choi

- D, Kato S, Yoshida T, Yoshimura Y, Ooba S, Mizuno Y, Takiguchi S, Matsuzaki H, Tomoda A, Shudo K, Ninomiya M, Katayama T, Kosaka H. Developmental changes in attention to social information from childhood to adolescence in autism spectrum disorders: a comparative study. *Mol Autism* 2020 Apr 9;11(1):24. doi: 10.1186/s13229-020-00321-w.
- 33*. Huang Y, Zhang W, Go K, Tsuchiya KJ, Hu J, Skupski DW, Sie SY, Nomura Y. Altered growth trajectory in children born to mothers with gestational diabetes mellitus and preeclampsia. *Arch Gynecol Obstet* 2020 Jan;301(1):151-159. doi: 10.1007/s00404-020-05436-2.
34. Fujioka T, Fujisawa TX, Inohara K, Okamoto Y, Matsumura Y, Tsuchiya KJ, Katayama T, Munesue T, Tomoda A, Wada Y, Kosaka H. Attenuated relationship between salivary oxytocin levels and attention to social information in adolescents and adults with autism spectrum disorder: a comparative study. *Ann Gen Psychiatry* 2020 Jun 5;19:38. doi: 10.1186/s12991-020-00287-2.
- 35*. Nishimura T, Wakuta M, Tsuchiya KJ, Osuka Y, Tamai H, Takei N, Katayama T. Measuring School Climate among Japanese Students-Development of the Japan School Climate Inventory (JaSC). *Int J Environ Res Public Health* 2020 Jun 19;17(12):4426. doi: 10.3390/ijerph17124426.
- 36*. Takahashi N, Nishimura T, Harada T, Okumura A, Choi D, Iwabuchi T, Kuwabara H, Takagai S, Nomura Y, Newcorn JH, Takei N, Tsuchiya KJ. Polygenic risk score analysis revealed shared genetic background in attention deficit hyperactivity disorder and narcolepsy. *Transl Psychiatry* 2020 Aug 17;10(1):284. doi: 10.1038/s41398-020-00971-7.
37. Usui N, Iwata K, Miyachi T, Takagai S, Wakusawa K, Nara T, Tsuchiya KJ, Matsumoto K, Kurita D, Kamenoy Y, Wakuda T, Takebayashi K, Iwata Y, Fujioka T, Hirai T, Toyoshima M, Ohnishi T, Toyota T, Maekawa M, Yoshikawa T, Maekawa M, Nakamura K, Tsujii M, Sugiyama T, Mori N, Matsuzaki H. VLDL-specific increases of fatty acids in autism spectrum disorder correlate with social interaction. *EBioMedicine* 2020 Aug ;58 :102917. doi: 10.1016/j.ebiom.2020.102917.
38. Hirai T, Usui N, Iwata K, Miyachi T, Tsuchiya KJ, Xie MJ, Nakamura K, Tsujii M, Sugiyama T, Matsuzaki H. Increased plasma lipoprotein lipase activity in males with autism spectrum disorder. *Res Autism Spectr Disord* 77:101630, 2020. doi: 10.1016/j.rasd.2020.101630.
39. Maekawa M, Ohnishi T, Toyoshima M, Shimamoto-Mitsuyama C, Hamazaki K, Balan S, Wada Y, Esaki K, Takagai S, Tsuchiya KJ, Nakamura K, Iwata Y, Nara T, Iwayama Y, Toyota T, Nozaki Y, Ohba H, Watanabe A, Hisano Y, Matsuoka S, Tsujii

- M, Mori N, Matsuzaki H, Yoshikawa T. A potential role of fatty acid binding protein 4 in the pathophysiology of autism spectrum disorder. *Brain Commun* 2020 Sep 10;2(2): fcaa145. doi: 10.1093/braincomms/fcaa145. eCollection 2020.
40. Hirayama A, Wakusawa K, Fujioka T, Iwata K, Usui N, Kurita D, Kamenno Y, Wakuda T, Takagai S, Hirai T, Nara T, Ito H, Nagano Y, Oowada S, Tsujii M, Tsuchiya KJ, Matsuzaki H. Simultaneous evaluation of antioxidative serum profiles facilitates the diagnostic screening of autism spectrum disorder in under-6-year-old children. *Sci Rep* 2020 Nov 26;10(1):20602. doi: 10.1038/s41598-020-77328-z.
 41. Tsuchiya KJ, Hakoshima S, Hara T, Ninomiya M, Saito M, Fujioka T, Kosaka H, Hirano Y, Matsuo M, Kikuchi M, Maegaki Y, Harada T, Nishimura T, Katayama T. Diagnosing Autism Spectrum Disorder Without Expertise: A Pilot Study of 5- to 17-Year-Old Individuals Using Gazefinder. *Front Neurol* 2021 Jan 28;11:603085. doi: 10.3389/fneur.2020.603085.
 42. Kato Y, Kuwabara H, Okada T, Munosue T, Benner S, Kuroda M, Kojima M, Yassin W, Eriguchi Y, Kamenno Y, Murayama C, Nishimura T, Tsuchiya KJ, Kasai K, Ozaki N, Kosaka H, Yamasue H. Oxytocin-induced increase in N,N-dimethylglycine and time course of changes in oxytocin efficacy for autism social core symptoms. *Mol Autism* 2021 Feb 23;12(1):15. doi: 10.1186/s13229-021-00423-z.
 43. Iwabuchi T, Makuuchi M. When a sentence loses semantics: Selective involvement of a left anterior temporal subregion in semantic processing. *Eur J Neurosci* 2021 Feb;53(3):929-942. doi: 10.1111/ejn.15022. Epub 2020 Nov 14.
 44. Suzuki S, Fujisawa TX, Sakakibara N, Fujioka T, Takiguchi S, Tomoda A. Development of Social Attention and Oxytocin Levels in Maltreated Children. *Sci Rep*. 10(1):7407, 2020. doi:10.1038/s41598-020-64297-6 (Published: 2020 May 4)
 45. Makita K, Takiguchi S, Naruse H, Shimada K, Morioka S, Fujisawa TX, Shimoji K, Tomoda A. White matter changes in children and adolescents with reactive attachment disorder: A diffusion tensor imaging study. *Psychiatry Res neuroimaging*. 303:111129, 2020. doi:10.1016/j.psychres.2020.111129 (Epub 2020 Jun 15, Published: 2020 Sep 30)
 46. Hiraoka D, Tomoda A. Relationship between parenting stress and school closures due to the COVID-19 pandemic. *Psychiatry Clin Neurosci*. 74(9):497-498, 2020. doi: 10.1111/pcn.13088. (Epub 2020 Jul 3, First published: 17 Jun 2020)
 - 47*. Kosaka T, Kawatani M, Ohta G, Mizuno Y, Takiguchi S, Kumano A, Hayashi H, Fujine A, Tsuda A, Fujisawa TX, Tomoda A, Ohshima Y. Low threshold to Vestibular and Oral Sensory stimuli might affect quality of sleep among children with autism spectrum disorder. *Brain Dev*. 43(1):55-62, 2021.

- doi:10.1016/j.braindev. 2020.07.010. (Epub 2020 Jul 30, Published: 2021 Jan)
- 48*. Kogan SM, Bae D, Cho J, Smith AK, Nishitani S. Pathways linking adverse environments to emerging adults' substance abuse and depressive symptoms: A prospective analysis of rural African American men. *Dev Psychopathol.* 1-11, 2020. doi:10.1017/S0954579420000632. (Epub 2020 Jul 22)
- 49*. Zaninello M, Palikaras K, Naon D, Iwata K, Herkenne S, Quintana-Cabrera R, Semenzato M, Grespi F, Ross-Cisneros FN, Carelli V, Sadun AA, Tavernarakis N and Scorrano L. Inhibition of autophagy curtails visual loss in a model of autosomal dominant optic atrophy. *Nat Commun* 11(1):4029, 2020. DOI: 10.1038/s41467-020-17821-1. (Published: 12 August 2020)
- 50*. De Leon D, Nishitani S, Walum H, McCormack KM, Wilson ME, Smith AK, Young LJ, Sanchez MM. Methylation of OXT and OXTR genes, central oxytocin, and social behavior in female macaques. *Horm Behav.* 2020;126:104856. doi:10.1016/j.yhbeh.2020.104856 (Epub 2020 Oct 14, Published: Nov 2020)
51. Kimura Y, Fujioka T, Jung M, Fujisawa TX, Tomoda A, Kosaka H. An investigation of the effect of social reciprocity, social anxiety, and letter fluency on communicative behaviors in adults with autism spectrum disorder. *Psychiatry Res.* 294:113503, 2020. doi:10.1016/j.psychres. 2020.113503. (Epub 2020 Oct 13. Published: Dec 2020)
52. Hiraoka D, Nishitani S, Shimada K, Kasaba R, Fujisawa TX, Tomoda A. Epigenetic modification of the oxytocin gene is associated with gray matter volume and trait empathy in mothers. *Psychoneuroendocrinology.* 123:105026, 2021. doi:10.1016/j.psyneuen. 2020.105026 (Epub 2020 Oct 21. Published: Jan 2021)
53. Saito T, Yamashita Y, Tomoda A, Okada T, Umeuchi H, Iwamori S, Shinoda S, Mizuno-Yasuhira A, Urano H, Nishino I, Saito K. Using the drug repositioning approach to develop a novel therapy, tipepidine hibenazate sustained-release tablet (TS-141), for children and adolescents with attention-deficit/hyperactivity disorder. *BMC Psychiatry.* 20(1):530. 2020. doi:10.1186/s12888-020-02932-2 (Published: 2020 Nov 10)
54. Kuboshita R, Fujisawa TX, Makita K, Kasaba R, Okazawa H, Tomoda A. Intrinsic brain activity associated with eye gaze during mother-child interaction. *Sci Rep.* 10(1):18903, 2020. doi:10.1038/s41598-020-76044-y (Published 2020 Nov 3)
55. Nishitani S, Suzuki S, Ochiai K, Yao A, Fujioka T, Fujisawa TX, Tomoda A. Altered epigenetic clock in children exposed to maltreatment. *Psychiatry Clin Neurosci.* 75(3):110-112, 2021. doi:10.1111/pcn.13183 (Epub 2020 Dec 24, Published: Mar 2021)

56. Kasaba R, Shimada K, Tomoda A. Neural Mechanisms of Parental Communicative Adjustments in Spoken Language. *Neuroscience*. 457:206-217, 2021. doi:10.1016/j.neuroscience.2020.12.002 (Epub 2020 Dec 18, Published: 1 Mar 2021)
57. Aoi T, Fujisawa TX, Nishitani S, Tomoda A. Mismatch negativity of preschool children at risk of developing mental health problems *Neuropsychopharmacol Rep*. 2021. doi:10.1002/npr2.12168 (published online ahead of print, 2021 Feb 19)
- 58*. Usui N, Berto S, Konishi A, Kondo M, Konopka G, Matsuzaki H, Shimada S. Zbtb16 regulates social cognitive behaviors and neocortical development. *Transl. Psychiatr*. In press. (accept: 26 Mar 2021)
59. Tochitani S, Furukawa T, Bando R, Kondo S, Ito T, Matsushima Y, Kojima T, Matsuzaki H, Fukuda A. GABA_A receptors and maternally derived taurine regulate the temporal specification of progenitors of excitatory glutamatergic neurons in the mouse developing cortex. *Cereb. Cortex* In press. (accept: 26 Mar 2021)
60. Ono Y, Kudoh K, Ikeda T, Takahashi T, Yoshimura Y, Minabe Y, Kikuchi M. Auditory steady-state response at 20 Hz and 40 Hz in young typically developing children and children with autism spectrum disorder. *Psychiatry Clin Neurosci* 2020 Jun;74(6):354-361. doi: 10.1111/pcn.12998. Epub 2020 Apr 24.
61. Kumazaki H, Okamoto M, Yoshimura Y, Ikeda T, Hasegawa C, Saito D, Iwanaga R, Tomiyama S, An KM, Minabe Y, Kikuchi M. Brief Report: Odour Awareness in Young Children with Autism Spectrum Disorders. *J Autism Dev Disord* 2020 May;50(5):1809-1815. doi: 10.1007/s10803-018-3710-y.
62. Nobukawa S, Yamanishi T, Kasakawa S, Nishimura H, Kikuchi M, Takahashi T. Classification Methods Based on Complexity and Synchronization of Electroencephalography Signals in Alzheimer's Disease. *Front Psychiatry*. 2020 Apr 7;11:255. doi: 10.3389/fpsy.2020.00255. eCollection 2020.
63. Kurokawa H, Kinari Y, Okudaira H, Tsubouchi K, Sai Y, Kikuchi M, Higashida H, Ohtake F. Competitiveness and individual characteristics: a double-blind placebo-controlled study using oxytocin. *Sci Rep*. 2020 Jul 13;10(1):11526. doi: 10.1038/s41598-020-68445-w.
- 64*. Furutani N, Nariya Y, Takahashi T, Noto S, Yang AC, Hirosawa T, et al. Decomposed Temporal Complexity Analysis of Neural Oscillations and Machine Learning Applied to Alzheimer's Disease Diagnosis. *Front Psychiatry*. 2020; 11:531801. doi:10.3389/fpsy.2020.531801.
65. Hirosawa T, Kontani K, Fukai M, Kameya M, Soma D, Hino S, Kitamura T, Hasegawa C, An KM, Takahashi T, Yoshimura Y, Kikuchi M. Different associations between intelligence and social cognition in children with and without autism

- spectrum disorders. *PLoS One*. 2020 Aug 21;15(8): e0235380. doi: 10.1371/journal.pone.0235380. eCollection 2020.
66. Yoshimura Y, Kikuchi M, Saito D, Hirosawa T, Takahashi T, Munosue T, Kosaka H, Naito N, Ouchi Y, Minabe Y. Markers for the central serotonin system correlate to verbal ability and paralinguistic social voice processing in autism spectrum disorder. *Sci Rep*. 2020 Sep 3;10(1):14558. doi: 10.1038/s41598-020-71254-w.
67. Furutani N, Nariya Y, Takahashi T, Ito H, Yoshimura Y, Hiraishi H, Hasegawa C, Ikeda T, Kikuchi M. Neural Decoding of Multi-Modal Imagery Behavior Focusing on Temporal Complexity. *Front Psychiatry* 2020 Jul;30:11:746. doi: 10.3389/fpsy.2020.00746. eCollection 2020.
68. Kumazaki H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Matsumoto Y, Ishiguro H, Kikuchi M, Sumiyoshi T, Mimura M. Optimal robot for intervention for individuals with autism spectrum disorders. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2020 Nov; 74(11):581-586. doi: 10.1111/pcn.13132. Epub 2020 Sep 12.
- 69*. Tanaka S, Komagome A, Iguchi-Sherry A, Nagasaka A, Yuhi T, Higashida H, Rooksby M, Kikuchi M, Arai O, Minami K, Tsuji T, Tsuji C. Participatory Art Activities Increase Salivary Oxytocin Secretion of ASD Children. *Brain Sci*. 2020 Sep 27;10(10):680. doi: 10.3390/brainsci10100680.
- 70*. Hirosawa T, Sowman PF, Fukai M, Kameya M, Soma D, Hino S, et al. Relationship between epileptiform discharges and social reciprocity or cognitive function in children with and without autism spectrum disorders: An MEG study. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2020;74(9):510-1. doi:10.1111/pcn.13093.
71. Yoshimura Y, Hasegawa C, Ikeda T, Saito DN, Hiraishi H, Takahashi T, Kumazaki H, Kikuchi M. The maturation of the P1m component in response to voice from infancy to 3 years of age: A longitudinal study in young children. *Brain Behav*. 2020 Aug;10(8): e01706. doi: 10.1002/brb3.1706. Epub 2020 Jun 23.
- 72*. Shabalova AA, Liang M, Zhong J, Huang Z, Tsuji C, Shnyder NA, et al. Oxytocin and CD38 in the paraventricular nucleus play a critical role in paternal aggression in mice. *Horm Behav*. 2020;120:104695. doi:10.1016/j.yhbeh.2020.104695.
73. Tsuji T, Inatani M, Tsuji C, Cheranov SM, Kadonosono K. Oxytocin induced epithelium-mesenchymal transition through Rho-ROCK pathway in ARPE-19 cells, a human retinal pigmental cell line. *Tissue Cell*. 2020;64:101328. doi:10.1016/j.tice.2019.101328.
- 74*. Gerasimenko M, Cherepanov SM, Furuhashi K, Lopatina O, Salmina AB, Shabalova AA, et al. Nicotinamide riboside supplementation corrects deficits in

- oxytocin, sociability and anxiety of CD157 mutants in a mouse model of autism spectrum disorder. *Sci Rep.* 2020;10(1):10035. doi:10.1038/s41598-019-57236-7.
- 75*. Takaso Y, Noda M, Hattori T, Roboon J, Hatano M, Sugimoto H, et al. Deletion of CD38 and supplementation of NAD (+) attenuate axon degeneration in a mouse facial nerve axotomy model. *Sci Rep.* 2020;10(1):17795. doi:10.1038/s41598-020-73984-3.
76. Leerach N, Harashima A, Munesua S, Kimura K, Oshima Y, Goto H, et al. Glycation reaction and the role of the receptor for advanced glycation end-products in immunity and social behavior. *Glycoconj J.* 2020. doi:10.1007/s10719-020-09956-6.
- 77*. Gerasimenko M, Lopatina O, Shabalova AA, Cherepanov SM, Salmina AB, Yokoyama S, et al. Distinct physical condition and social behavior phenotypes of CD157 and CD38 knockout mice during aging. *PLoS One.* 2020;15(12): e0244022. doi:10.1371/journal.pone.0244022.
- 78*. An KM, Ikeda T, Hasegawa C, Yoshimura Y, Tanaka S, Saito DN, et al. Aberrant brain oscillatory coupling from the primary motor cortex in children with autism spectrum disorders. *Neuroimage Clin.* 2021;29:102560. doi:10.1016/j.nicl.2021.102560.
79. Shimoyama I, Hayashi F, Hayashi A, Yoshida A, Yugeta T, Shimizu E, Kobayashi Y. Iconic Memory for Senile Dementia after Five Minutes Distraction with a Necker's Cube. *International Medical Journal Vol. 27, No. 2, pp.1-4.* 2020/04.
80. Matsumoto K, Hamatani S, Nagai K, Sutoh C, Nakagawa A, Shimizu E. Long-Term Effectiveness and Cost-Effectiveness of Videoconference-Delivered Cognitive Behavioral Therapy for Obsessive-Compulsive Disorder, Panic Disorder, and Social Anxiety Disorder in Japan: One-Year Follow-Up of a Single-Arm Trial. *JMIR Mental Health,* 2020, 7(4): e17157. 2020/04/23.
- 81*. Kong XZ, Boedhoe PSW, Abe Y, Alonso P, Ameis SH, Arnold PD, Assogna F, Baker JT, Batistuzzo MC, Benedetti F, Beucke JC, Bollettini I, Bose A, Brem S, Brennan BP, Buitelaar J, Calvo R, Cheng Y, Cho KIK, Dallaspezia S, Denys D, Ely BA, Feusner J, Fitzgerald KD, Fouché JP, Fridgeirsson EA, Glahn DC, Gruner P, Gürsel DA, Hauser TU, Hirano Y, Hoexter MQ, Hu H, Huyser C, James A, Jaspers-Fayer F, Kathmann N, Kaufmann C, Koch K, Kuno M, Kvale G, Kwon JS, Lazaro L, Liu Y, Lochner C, Marques P, Marsh R, Martínez-Zalacáin I, Mataix-Cols D, Medland SE, Menchón JM, Minuzzi L, Moreira PS, Morer A, Morgado P, Nakagawa A, Nakamae T, Nakao T, Narayanaswamy JC, Nurmi EL, O'Neill J, Pariente JC, Perriello C, Piacentini J, Piras F, Piras F, Pittenger C, Reddy YCJ, Rus-Oswald OG, Sakai Y, Sato JR, Schmaal

- L, Simpson HB, Soreni N, Soriano-Mas C, Spalletta G, Stern ER, Stevens MC, Stewart SE, Szeszko PR, Tolin DF, Aki Tsuchiyagaito A, van Rooij D, GA, Venkatasubramanian G, Wang Z, Yun JY, ENIGMA OCD Working Group, Thompson PM, Stein DJ, van den Heuvel OA, Francks C. Mapping Cortical and Subcortical Asymmetry in Obsessive-Compulsive Disorder: Findings from the ENIGMA Consortium. *Biol Psychiatry*, 2020;87:1022-1034, doi: 10.1016/j.biopsych.2019.04.022. 2020/06/15.
82. Mastumoto K, Hamatani S, Makino T, Uemura T, Suzuki F, Shinno S, Ikai T, Hayashi H, Shimizu E. Guided Internet-Based Cognitive Behavioral Therapy in Japanese Patients with Obsessive-Compulsive Disorder: Protocol for a Randomized Controlled Trial. *JMIR Research Protocols*, 2020, 9(6): e18216. 2020/06/24.
83. Kimura Y, Hamatani S, Matsumoto K, Shimizu E. Cognitive Behavioral Therapy for Three Patients with Bipolar II Disorder during Depressive Episodes: A Case Series. *Hindawi Case Reports in Psychiatry*, 2020,3892024, 1-4. 2020/07/14.
84. Sano K, Matsuda S, Tohyama S, Komura D, Shimizu E, Sutoh C. Deep learning-based classification of the mouse estrous cycle stages. *Sci Rep* 10:11714. 2020/07/16.
- 85*. Writing Committee for the Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder; Autism Spectrum Disorder; Bipolar Disorder; Major Depressive Disorder; Obsessive-Compulsive Disorder; and Schizophrenia ENIGMA Working Groups; Patel Y, Parker N, Shin J, Howard D,, Hirano Y (91/191),, Virtual histology of cortical thickness reveals shared neurobiology underlying 6 psychiatric disorders. *JAMA Psychiatry*. 2020/08/26.
- 86*. Boedhoe PSW, van Rooij D, ...Hirano Y, ..., Kuno M, ..., Nakagawa A, ..., ENIGMA-ADHD working group, ENIGMA-ASD working group, ENIGMA-OCD working group. Subcortical brain volume, regional cortical thickness and cortical surface area across attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD), autism spectrum disorder (ASD), and obsessive-compulsive disorder (OCD) – findings from the ENIGMA-ADHD, -ASD, and -OCD working groups. *Am J Psychiatry*. 2020/09/01. doi: 10.1176/appi.ajp.2020.19030331.
- 87*. Hamatani S, Tsuchiyagaito A, Nihei M, Hayashi Y, Yoshida T, Takahashi J, Okawa S, Arai H, Nagaoka M, Matsumoto K, Shimizu E, Hirano Y. Predictors of response to exposure and response prevention-based cognitive behavioral therapy for obsessive-compulsive disorder. *BMC Psychiatry*, 20: 433, 2020. 2020/09/04.
- 88*. Oshima F, William M, Takahashi N, Tsuchiyagaito A, Kuwabara H, Shiina A, Seto M, Hongo M, Iwama Y, Hirano Y, Sutoh C, Taguchi K, Yoshida T, Kawasaki Y, Ozawa Y, Masuya J, Sato N, Nakamura S, Kuno M, Takahashi J, Ohtani T, Matsuzawa D,

- Inada N, Kuroda M, Ando M, Hori A, Nakagawa A, Shimizu E. Cognitive-behavioral family therapy as psychoeducation for adolescents with high-functioning autism spectrum disorders: Aware and Care for my Autistic Traits (ACAT) program study protocol for a pragmatic multisite randomized controlled trial . *Trials* 2020;21(1)814. 2020/09/29.
- 89*. Bruin W, Taylor L, ..., Hirano Y,, Kuno M, ..., Nakagawa A,, Shimizu E, ..., Wingen G. Structural neuroimaging biomarkers for obsessive-compulsive disorder in the ENIGMA-OCD consortium: medication matters. *Transl Psychiatry* 2020 Oct 8;10(1):342. doi: 10.1038/s41398-020-01013-y.
- 90*. Numata N, Nakagawa A, Yoshioka K, Isomura K, Matsuzawa D, Setsu R, Nakazato M and Shimizu E. Associations between autism spectrum disorder and eating disorders with and without self-induced vomiting: an empirical study. *Journal of Eating Disorders* (2021) 9:5. 2021/01/06.
91. Hiramatsu, Y, Murata, T, Yamada, F, Seki, Y, Yokoo, M, Noguchi, R, Shibuya, T, Tanaka, M, Matsuzawa, D & Shimizu, E. Memory rescripting in major depressive disorder. *Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy*, 2021, 12, 1-18.
92. Hamatani S, Hirano Y, Sugawara A, Isobe M, Kodama N, Yoshihara K, Moriguchi Y, Ando T, Endo Y, Takahashi J, Nohara N, Takamura T, Hori H, Noda T, Tose K, Watanabe K, Adachi H, Gondo M, Takakura S, Fukudo S, Shimizu E, Yoshiuchi K, Sato Y, Sekiguchi A. Eating Disorder Neuroimaging Initiative (EDNI): a multicenter prospective cohort study protocol for elucidating the neural effects of cognitive behavioral therapy for eating disorders. *BMJ Open*, 2021;11:e042685. doi: 10.1136/bmjopen-2020-042685
93. Kurita K, Takasughi J, Hirano Y. A case of left thalamic hemorrhage with mirror writing: Influence the writing direction. *J Rehabil Neurosci*, doi: 10.24799/jrehabilneurosci.200818
94. Okawa S, Hamatani S, Hayashi Y, Arai H, Nihei M, Yoshida T, Takahashi J, Shimizu E, Hirano Y. Neuropsychological comparison between patients with social anxiety and healthy controls: Weak central coherence and visual scanning deficit *Neuropsychiatr Dis Treat*, 2020;16:2849-2855. doi: 10.2147/NDT.S283950
- 95*. Hamatani S, Tsuchiyagaito A, Nihei M, Hayashi Y, Yoshida Y, Takahashi J, Okawa S, Arai H, Nagaoka M, Matsumoto K, Shimizu E, Hirano Y. Predictors of response to exposure and response prevention-based cognitive behavioral therapy for obsessive-compulsive disorder. *BMC Psychiatry*, 2020;20:433 .doi: 10.1186/s12888-020-02841-4
- 96*. Koike H, Tsuchiyagaito A, Hirano Y, Oshima F, Asano K, Sugiura Y, Kobori O, Ishikawa R, Nishinaka H, Shimizu E, Nakagawa A. Reliability and validity of the

- Japanese version of the Obsessive-Compulsive Inventory-Revised (OCI-R). *Curr Psychol*, 2020;39:89-95. doi: 10.1007/s12144-017-9741-2
97. Shiina A, Niitsu T, Kobori O, Idemoto K, Hashimoto T, Sasaki T, Igarashi Y, Shimizu E, Nakazato M, Hashimoto K, Iyo M. Perception of and anxiety about COVID-19 infection and risk behaviors for spreading infection: an international comparison. *Ann Gen Psychiatry*. 2021 Feb 18;20(1):13. doi: 10.1186/s12991-021-00334-6
98. Shiina A, Niitsu T, Kobori O, Idemoto K, Hashimoto T, Sasaki T, Igarashi Y, Shimizu E, Nakazato M, Hashimoto K, Iyo M. Relationship between perception and anxiety about COVID-19 infection and risk behaviors for spreading infection: A national survey in Japan. *Brain Behav Immun Health*. 2020 Jul;6: 100101. doi: 10.1016/j.bbih.2020.100101. Epub 2020 Jul 2.
99. Sano K, Matsuda S, Tohyama S, Komura D, Shimizu E, Sutoh C. Deep learning-based classification of the mouse estrous cycle stages. *Sci Rep*. 2020 Jul 16;10(1):11714. doi: 10.1038/s41598-020-68611-0.
100. Kimura Y, Hamatani S, Matsumoto K, Shimizu E. Cognitive Behavioral Therapy for Three Patients with Bipolar II Disorder during Depressive Episodes. *Case Rep Psychiatry*. 2020 Jul 14; 2020:3892024. doi: 10.1155/2020/3892024. eCollection 2020.
- 101*. Hiramatsu Y, Asano K, Kotera Y, Sensui T, Endo A, Shimizu E, Basran J, Goss K. Development of the Japanese version of the Other As Shamer Scale using item response theory. *BMC Res Notes*. 2020 Apr 5;13(1):200. doi: 10.1186/s13104-020-05027-z.
- 102*. Piras F, Piras F, Abe Y, Agarwal SM, Anticevic A, Ameis S, Arnold P, Banaj N, Bargalló N, Batistuzzo MC, Benedetti F, Beucke JC, Boedhoe PSW, Bollettini I, Brem S, Calvo A, Cho KIK, Ciullo V, Dallspezia S, Dickie E, Ely BA, Fan S, Fouche JP, Gruner P, Gürsel DA, Hauser T, Hirano Y, Hoexter MQ, Iorio M, James A, Reddy YCJ, Kaufmann C, Koch K, Kochunov P, Kwon JS, Lazaro L, Lochner C, Marsh R, Nakagawa A, Nakamae T, Narayanaswamy JC, Sakai Y, Shimizu E, Simon D, Simpson HB, Soreni N, Stämpfli P, Stern ER, Szeszko P, Takahashi J, Venkatasubramanian G, Wang Z, Yun JY; ENIGMA OCD Working Group, Stein DJ, Jahanshad N, Thompson PM, van den Heuvel OA, Spalletta G. White matter microstructure and its relation to clinical features of obsessive-compulsive disorder: *Transl Psychiatry* (IF: 5.28; Q1). 2021 Mar 17;11(1):173. doi: 10.1038/s41398-021-01276-z.
103. Taguchi K, Numata N, Takanashi R, Takemura R, Yoshida T, Kutsuzawa K, Yoshimura K, Shimizu E. Integrated cognitive behavioral therapy for chronic pain:

- An open-labeled prospective single-arm trial. *Medicine (Baltimore)*. 2021 Feb 12;100(6): e23859. doi: 10.1097/MD.00000000000023859.
- 104*. Saito M, Hirota T, Sakamoto Y, Adachi M, Takahashi M, Osato-Kaneda A, Kim YS, Leventhal B, Shui A, Kato S, Nakamura K. Prevalence and cumulative incidence of autism spectrum disorders and the patterns of co-occurring neurodevelopmental disorders in a total population sample of 5-year-old children. *Mol Autism*. 2020 May 14;11(1):35. doi: 10.1186/s13229-020-00342-5.
- 105*. Wang G, Takahashi M, Wu R, Liu Z, Adachi M, Saito M, Nakamura K, Jiang F. Association between Sleep Disturbances and Emotional/Behavioral Problems in Chinese and Japanese Preschoolers. *Behav Sleep Med*. 2020 May-Jun;18(3):420-431. doi: 10.1080/15402002.2019.1605995.
- 106*. Mikami M, Hirota T, Takahashi M, Adachi M, Saito M, Koeda S, Yoshida K, Sakamoto Y, Kato S, Nakamura K, Yamada J. Atypical Sensory Processing Profiles and Their Associations With Motor Problems In Preschoolers With Developmental Coordination Disorder. *Child Psychiatry Hum Dev*. 2020 Jun 11. doi: 10.1007/s10578-020-01013-5.
107. Masuyama A, Shinkawa H, Kubo T. Validation and Psychometric Properties of the Japanese. *International Journal of Mental Health and Addiction* Version of the Fear of COVID-19 Scale Among Adolescents. 2020 Jul 13;1-11. doi: 10.1007/s11469-020-00368-z.
- 108*. Hirota T, Bishop S, Adachi M, Shui A, Takahashi M, Mori H, Nakamura K. Utilization of the Maternal and Child Health Handbook in Early Identification of Autism Spectrum Disorder and Other Neurodevelopmental Disorders. *Autism Res*. 2021 Mar;1 (3):551-559. doi: 10.1002/aur.2442.
- 109*. Hirota T, Takahashi M, Adachi M, Sakamoto Y, Nakamura K. Neurodevelopmental Traits and Longitudinal Transition Patterns in Internet Addiction: A 2-year Prospective Study. *J Autism Dev Disord*. 2020 Jul 23. doi: 10.1007/s10803-020-04620-2.
110. Saito M, Nakamura K, Hirota K. Concerns for labor analgesia and autism spectrum disorders. *J Anesth*. 2020 Nov 24. doi: 10.1007/s00540-020-02880-x.
- 111*. Hirota T, Takahashi M, Adachi M, Nakamura K. Pediatric health-related quality of life and school social capital through network perspectives. *PLoS One*. 2020 Dec 2;15(12): e0242670. doi: 10.1371/journal.pone.0242670
- 112*. Adachi M, Takahashi M, Hirota T, Shinkawa H, Mori H, Saito T, Nakamura K. Distributional patterns of item responses and total scores of the Patient Health Questionnaire for Adolescents in a general population sample of adolescents in

Japan. Psychiatry Clin Neurosci. 2020 Sep 29. doi: 10.1111/pcn.13148.

113. Nishida C, Ishimoto Y, Takizawa Y, Katayama T, Matsumoto Y. Preliminary evidence for the reliability and validity of the Stirling children's well-being scale (SCWBS) with Japanese children. *International Journal of Educational Research Open Volumes* 2–2, 2021, 100034. doi.org/10.1016/j.ijedro.2021.100034

【和文原著論文・総説】

1. 石井篤子, 奥野裕子. 通信制高等学校(登校型)における発達障害傾向を持つ生徒の担当教員への遠隔式ティーチャー トレーニングの有用性の検討 —TV 会議システムを用いて— 子どものこころと脳の発達, 11(1), 2020.
2. 下野九理子 他. てんかん, 早わかり! —診療アルゴリズムと病態別アトラス— 池田昭夫 編, 南江堂, p. 216, 2020.
3. 吉崎亜里香. 養育者とのコミュニケーション 小児科診療, 83 巻(10号): 1303–1309 ページ, 2020.
4. 加藤久美, 村田絵美, 谷池雅子. 小児閉塞性睡眠時無呼吸と発達の問題, 睡眠医療, 14(4): 413–417, 2020.
5. 下野九理子. 【診断・治療可能な遺伝性疾患を見逃さないために】神経疾患 結節性硬化症, 小児科臨床, 73(5): 641–644, 2020.
6. 下野九理子. 神経発達症と感覚異常, 小児の精神と神経, 60(3): 208–210, 2020.
7. 下野九理子. 結節性硬化症治療の最前線, 大阪小児科医会会報, 196: 18–20, 2021.
8. 早田敦子, 吾郷由希夫, 橋本均. PACAP シグナル系を介したストレスが誘発する精神疾患の発症機序の解明と治療薬の開発, *Medical Science Digest*, Vol.46(6), 2020
9. 西村倫子, 土屋賢治. 胎児期・幼少期の環境因子が子どもの神経発達に与える影響: 浜松母と子の出生コホート(HBC Study)からの知見. *医学のあゆみ*.
10. 土屋賢治. ASD 特性・ADHD 特性をもつ子どもたちの乳幼児期における神経発達の軌跡 —浜松母と子の出生コホートから—. *小児の精神と神経*. (2020); 60:214–17.
11. 田井中華絵, 高橋長秀, 土屋賢治. 周産期の環境と乳幼児の神経発達. *産婦人科の実際*. (2020); 69:125–30.
12. 椎野智子, 友田明美. インターネット・スマホが子どものこころと脳に及ぼす影響. *こころの科学*, 211, 26–29, 2020年5月.
13. 友田明美. 医療最前線 子ども虐待(マルトリートメント)は脳にどのようなダメージを与えるのか—虐待の脳科学から視えてきた「とも育て」の重要性—. *手話通訳 問題研究*, 152, 56–57, 2020.
14. 友田明美. 子ども虐待と脳科学. *小児科*, 61(6), 871–877, 2020年5月.

15. 矢尾明子, 島田浩二, 笠羽涼子, 牧田 快, 友田明美. ADHD 児の母親に対するペアレント・トレーニングの効果が子どもの実行機能改善の及ぼす影響の予備的検討. 発達研究, 34, 137-146, 2020.
16. 友田明美. 子どもの健やかな育ちのためのマルトリートメント予防と養育者支援. 小児の精神と神経, 60(2), 111-115, 2020年7月.
17. 友田明美. マルトリートメント予防モデル 大阪の取り組み. 地域保健, 51(4), 32-35, 2020年7月.
18. 友田明美. マルトリートメント(子ども虐待)は脳にどのようなダメージを与えるのかー子ども虐待の脳科学から視えてきた「とも育て」の重要性ー. 幼児教育じほう, 48(6), 12-18, 2020.
19. 友田明美. 虐待などのマルトリートメントが子どもに与えるダメージ. 臨床心理学, 20(5), 530-534, 2020年9月.
20. 友田明美. 「マルトリ予防」と「とも育て」の重要性. ほけんニュース(少年写真新聞社), 441, 1-4, 2020年11月.
21. 友田明美. マルトリートメントによる子どもの脳の変化と親の支援. 月刊保団連(全国保険医団体連合会), 1333, 4-9, 2020年11月.
22. 友田明美. 幼少期のマルトリートメントストレスが脳発達に与える影響ー脳科学とエピゲノム科学からの知見ー. 医学のあゆみ, 275(9), 957-962, 2020.
23. 友田明美. 脳科学的な診断技術の進歩. 児童青年精神医学とその領域, 61(3), 44-48, 2020.
24. 椎野智子, 榊原信子, 友田明美. マルトリートメントの理解に関する研修効果の検討. 小児の精神と神経, 60(4), 337-343, 2021年1月.
25. 友田明美. 子どものマルトリートメントに関する最近の神経性物学的知見. 精神科治療学, 36(1), 11-15, 2021年1月.
26. 田中 早苗, 山田 智子. 友だち作りの科学「PEERS®プログラム」の実践子どものころと脳と発達, 11(1), 2020.
27. 佐藤大介, 関沢洋一, 須藤千尋, 平野好幸, 大川翔, 廣瀬素久, 竹村亮, 清水栄司. 不眠を対象としたインターネット認知行動療法と「3つの良いこと」エクササイズの有効性の検証(3群ランダム化比較試験). RIETI Discussion Paper Series, 2020;20-J-019. 2020/04.
28. 杉田克生, 千葉明子. 「千葉大学学術成果リポジトリ CURATOR」を活用したモノグラフの出版: 研究成果オープンアクセス推進への提言. 千葉医学 96(2), P31-35. 2020/04/10.
29. 杉田克生. 動物磁気理論など疑似科学が生まれる時代背景ーリヨン大学医学・薬学歴史博物館訪問からの一考察ーSTETHOSCOPE No. 234・5, P3-5, 2020. 2020/04/20.
30. 杉田克生. フィンランドにおける神経発達症診療. 千葉県小児科医会会誌 第53号,

P28-29, 2020. 2020/07/15.

31. 平野好幸. 強迫症・不安症の認知行動療法の作用機序と治療効果予測: 脳画像による検討. 予防精神医学. (印刷中)
32. 杉田克生. 治療教育者ハンス・アスペルガー. 千葉県小児科医学会誌 2021, 第 54 号. p46-47. 2021.
33. 杉田克生. カナー. STETHOSCOPE 2021, No. 239, p17-22.
34. 杉田克生. オーストリア系アメリカ人レオ・カナーとユダヤ系自閉症史の変遷. STETHOSCOPE 2021, No. 239, p17-21.

【著書】

1. 友田明美. 運動部活動における体罰の影響. 部活動学 (神谷 拓 監修), 221-233, ベースボール・マガジン社, 2020/6/30.
2. 友田明美. チック・Tourette 症. 今日の小児治療指針 第 17 版 (水口 雅, 市橋 光 編), 17(1), 700-701, 医学書院, 2020/11/30.
3. 友田明美. 被虐待児症候群 (こどもへの虐待). 今日の治療指針 2021 年版 (福井次矢 他 編), 医学書院, 2021/1.
4. 濱村尚子, 友田明美. 反応性アタッチメント症. 講座 精神疾患の臨床 (神庭重信 編), 3 巻, 289-296, 中山書店, 2021/2.
5. Higashida H, Lopatina O. Cyclic ADP-Ribose and Heat Regulate Oxytocin Release via CD38 and TRPM2 in the Hypothalamus. In: Lemos JR, Dayanithi G, editors. Neurosecretion: Secretory Mechanisms. Cham: Springer International Publishing; 2020. p. 43-58.
6. 大島郁葉, 桑原齊. 「ASD に気づいてケアする CBT ACAT 実践ガイド」. 金剛出版. 2020/10/06.

【受賞】

- 友田明美 文部科学大臣表彰 科学技術賞 (研究部門) (2020 年 4 月)
- 藤澤隆史 日本発達心理学会 国際奨励賞 (2021 年 3 月)
- アセップ・サエフロ 第 38 回日本生化学会北陸支部大会 「発表奨励賞」 2020.6.13
- アン・キョンミン Korean Society for Human Brain Mapping 2020 「優秀発表賞」 2020.11.6

＜委員会の活動実績＞

本事業では拠点形成・推進委員会が事業の方針ならびに活動の大枠を決定し、事業を推進する役割を担う。所掌事項として、各種委員会の構成立案、関連規程の制定、人事の決定（特任教員の選考後の承認など）、予算・決算の承認などがあげられる。事業の具体的な実施は、拠点形成・推進委員会の下に設置された実行委員会が担い、事業の成果を含めた広報は、同じく拠点形成・推進委員会の下での広報委員会が担う（118頁～121頁参照）。さらに、本事業では、事業内容について専門家の立場で助言する組織としてアドバイザリーボードを設置し、事業全体の活動評価は、独立した外部評価委員会がその任にあたる。なお、アドバイザリーボードによるアドバイスを令和3年度の早い時期に実施を予定している。令和3年度の後半には、外部評価委員会の評価を予定している。

① 拠点形成・推進委員会

委員長 佐藤 真

委員長は、役職指定として連合小児発達学研究科長が務め、5大学から各校の副研究科長、弘前大学からは子どものこころの発達研究センター長が委員として参加する。研究科長の交代に伴い、令和2年度はあらたに佐藤真研究科長が本委員会の委員長を務めた。

事業の実行に関しては、拠点形成・推進委員会は、実行委員会を監督・指導すると位置付けられており、その方針に沿って活動を行った。委員、関連規程並びに詳細な議事録は3. 資料の項を参照にされたい（137頁、140頁～142頁、148頁～153頁）。

② 実行委員会

委員長 佐藤 真

実行委員会では、本事業の特徴的な活動に対応する担当部会をその下に置き、その部会の統括を行うとともに、国際シンポジウムなど部会をまたぐ事業の実施主体として活動した。本委員会の構成メンバーは137頁に掲載し、関連規程は別途示した(143頁～144頁)。本委員会は、各参加校における活動をもとに、より協働しての活動を推進した。なお、それぞれの部会(共同研究推進・国際ハブ化推進部会、拠点化基盤推進部会、社会実装支援部会、若手人材育成部会)については、別途部会長からの活動報告をまとめた。特に本年度は、相互の関係の深化を鑑み、共同研究推進・国際ハブ化推進部会、拠点化基盤推進部会を同時に開催し、経費も両部会で合議のうえ用途を定め、活動することとした。令和元年度末頃よりの、いわゆるCOVID-19の世界的な広がりもあり、国際シンポジウム(アジア発達障がいコンソーシアム)については、Zoomを使用して開催となったが、活発な議論が展開できたことは幸甚であった。詳細については、(31頁～117頁)を参照されたい。各校における活動については123頁～135頁に記載した。

【令和2年度 実行委員会 各部会別活動報告】

共同研究推進部会・国際ハブ化推進部会
拠点化基盤推進部会

部会長 橘 雅弥
部会長 土屋賢治

共同研究推進部会、国際ハブ化推進部会の2つの部会は、昨年度に引き続き共通課題が多いことから、合同部会である共同研究推進・国際ハブ化部会として活動を行った。令和2年度の構成員は、大阪大学・橘特任准教授（常勤）を部会長とし、菱谷特任助教（大阪大学）、辻特任准教授・池田助教（金沢大学）、西村講師・原田助教（浜松医科大学）、久能特任助教（千葉大学）、謝助教・西谷特命助教（福井大学）、高橋准教授（弘前大学）の計10名で構成し、計4回のZoomによる会合および適宜メール会議を開催した。

拠点化基盤推進部会は、6大学におけるデータ基盤整備の推進と、それに伴う倫理的問題やインフラ整備についての検討を令和元年度に引き続き行った。令和2年度は、引き続き浜松医科大学・土屋特任教授を部会長とし、吉村講師（大阪大学）、An特任助教・矢追助教（金沢大学）、関助教（千葉大学）、藤澤准教授・謝助教（福井大学）、斉藤准教授（弘前大学）の8名で構成し、活動した。データ基盤整備においては、共同研究推進・国際ハブ化部会との連携が必要であることから、令和2年度は共同研究推進・国際ハブ化部会と連携しての活動を行った。令和3年2月18日には、両部会の合同部会を開催した。

両部会の令和2年度の活動においては、1、事業主体6大学内の海外に向けた研究支援、2、6大学に所属する研究者との共同研究支援、3、令和3年度に制定・施行される「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針（統合指針）」を見据えた、共同研究における一括倫理審査の推進、4、国際ハブ化の推進として、令和元年度に形成したアジアネットワークの強化とこれを基盤とした共同研究の推進、5、上記共同研究に向けた研究資金獲得のための競争的研究資金への応募、6、6大学共通リソースの整備の推進、を行った。令和2年度は、COVID-19の世界的な流行により、国内外との往来が困難であり、アジアネットワークへの新規の海外組織の加入の働きかけは断念し、既存の連携の強化に努めた。

1. 学外からの共同研究公募について

令和元年度に引き続き、学外研究者の提案による拠点に属する6大学との共同研究について公募により支援を行った。共同利用・共同研究拠点化を視野に入れ、6大学が保有する研究リソースの活用を促進するため、令和2年度より募集要項内に計画共同研究として、受入れテーマおよび対応する学内の研究者名を明記した形での募集を追加した。令和2年度第1回共同研究推進・国際ハブ化部会で公募要領を策定し、6月に共共事業、連合小児発達学研究所および各大学子どものこころのセンターHP上に掲載し、さ

らに国内の大学・研究施設に案内を送り、公募を行った（資料 1-1, 1-2）。2020 年 6 月 30 日の〆切までに、4 件の応募があった。共同研究推進・国際ハブ化部会および拠点化基盤推進部会の両部会員で厳密に審査を行い、令和 2 年度は下記の 4 件に対し各 15 万円の支援をおこなった。

- ・田中潤也（愛媛大学大学院医学系研究科分子細胞生理学講座教授 共同研究者：大阪大学 佐藤 真 教授）
「ミクログリアのシナプス貪食活性上昇誘導による ADHD および ASD 様行動改善の試み」
- ・Subashini Jayanath (Senior Lecturer, Department of Paediatrics, University of Malaya Medical Center 共同研究者：大阪大学 毛利育子 准教授)
「Translation and validation of the Japanese Sleep Questionnaire for preschoolers (JSQ-P) into English and Malay Language versions in a Malaysian context」
- ・Hsiu-Lan Shelley Tien (Professor, Department of Educational Psychology and Counseling, National Taiwan Normal University / University Counseling Center, 共同研究者：千葉大学 清水栄司 教授, 浦尾悠子 講師)
「Cognitive behavioral therapy-based anxiety prevention program, ‘Journey of the Brave’ for Taiwanese children」
- ・辻 隆宏（福井大学医学部眼科助教, 共同研究者：金沢大学 横山 茂 教授, 辻 知陽 特任准教授）
「脳内移行性の高いバソプレシン受容体 (V1a/V1b) 特異的アゴニストの開発」

2. 6 大学内からの国際化に向けた研究支援

6 大学内における海外との共同研究・海外との共同研究に向けた試みに対する研究支援を行った。本年度第 1 回共同研究推進・国際ハブ化推進部会にて公募要領を策定して募集を行い（資料 2）、2020 年 6 月 30 日の〆切までに、6 件の応募があった。共同研究推進・国際ハブ化部会および拠点化基盤推進部会の両部会員の審査の上、下記の 4 件に対し各 15 万円の支援をおこなった。

- ・東田陽博（金沢大学, 令和元年度より継続）
「オキシトシン体内動態解析のための新しい ELISA 測定キットの作成」
- ・西谷正太（福井大学, 令和元年度より継続）
「アジア人脳・末梢組織間メチル化相関データベース (AMAZE-CpG) 構築の為の日本人データベース作成」
- ・辻 知陽（金沢大学）
「自閉症モデルマウスを用いた自閉症主症状改善効果を持つ漢方薬のスクリーニング」

グ」

・ Mohammad Shafiur Rahman, (浜松医科大学)

「The association between unhealthy lifestyles and psychosocial problems: a comparative study among children aged 5-9 years in Bangladesh and Japan」

3. 令和元年度共同研究支援課題の報告会

令和元年度に事業主体外研究者と6大学との共同研究支援および学内から海外への共同研究支援を行った課題について、令和元年度は初年度であり募集と採択決定が12月~1月であったため、本年6月に報告書の提出があった(資料3-1, 3-2)。また令和3年3月29日に令和元年度(一部令和2年度も含む)支援課題の報告会を、共同研究推進・国際ハブ化部会で企画し開催した(資料4)。令和2年度採択課題については、令和3年5月に報告書の提出があり、HP上に公開した(資料5-1, 5-2)。また、COVID-19の影響により課題遂行遅延が生じている課題があることから、令和2年度の採択課題の報告会は令和3年度の報告会と合わせて開催とする予定である。



令和元年度共同研究報告会(2021.3.29,Zoomにて開催)

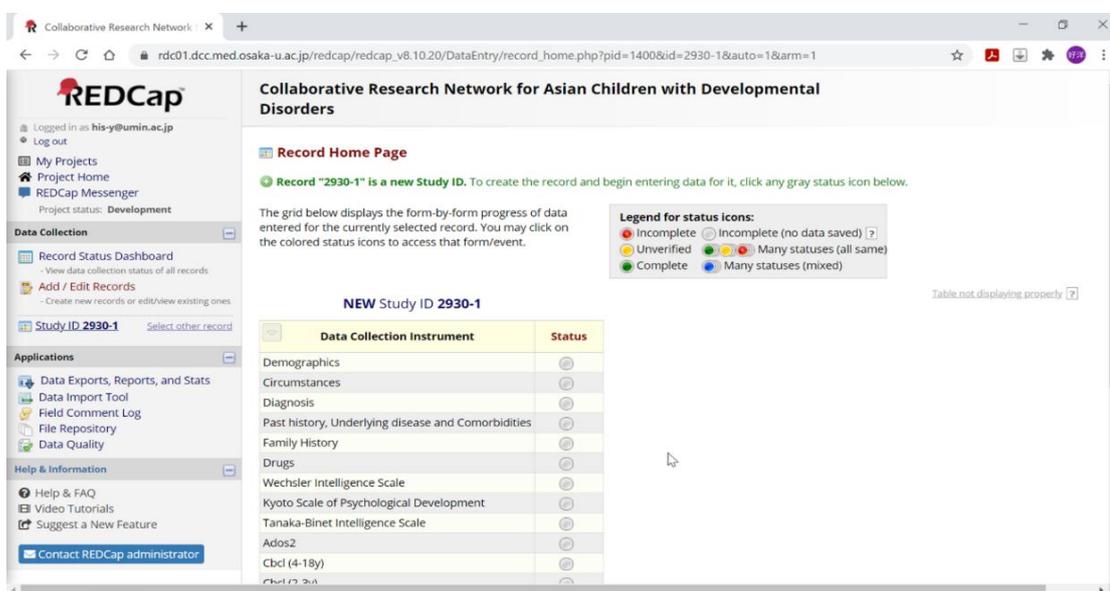
4. アジア・コンソーシアム形成と連携の推進について

令和2年度はCOVID-19の影響により、海外施設と新たな連携を作ることはできなかった。令和元年度に引き続き、共同研究推進・国際ハブ化部会として東南アジア4か国(マレーシア、フィリピン、タイ、インドネシア)の4施設と、後述の国際レジストリの構築を中心に連携を進めた。令和3年1月22日には、6大学および鳥取大学の子どもこころの研究センターで毎年開催している子どもこころのセンター連絡会と日程を合わせて、同日に実行委員会の下、第2回の国際シンポジウム The 2nd International Symposium for Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders 2021を開催した(後述)。

5. 国際共同研究の推進について

a) アジア共同臨床レジストリ (Asian Neurodevelopmental Disorder Registry; ANDy) の構築

参加6大学の医師を中心に、臨床レジストリ構築に向けたワーキンググループ（構成メンバー：大阪大学 橋特任准教授（常勤）・菱谷特任助教，金沢大学 廣澤特任助教，浜松医科大学 土屋特任教授，千葉大学 高橋特任講師・久能特任助教，福井大学 滝口特命助教，弘前大学 斉藤准教授，オブザーバー 共同研究推進・国際ハブ化部会員）を立ち上げ、Zoom およびメール審議にて、REDCap システムを用いた共通レジストリ構築の準備を進めた（図）。国内6大学での研究の遂行にあたっては、国内共同研究として大阪大学での一括倫理審査を行い、国内研究承認を得た（研究代表者：大阪大学・橋雅弥特任准教授（常勤））。またレジストリに含める情報およびフォーマット作成について、6大学および海外施設とも協議しながら作業を進め、2021年3月よりレジストリへの登録を開始した。本レジストリ構築に対して、大阪大学医学部附属病院が参画するAMED「国際共同臨床研究実施推進事業」より追加の資金援助を得ることができ、各大学でのREDCapへの臨床情報登録を簡便化するシステムの一部を構築する費用にあてるとともに、海外の施設での登録準備の支援を行った。海外施設でも現在倫理委員会のプロセスが進行中である。また、海外の共同研究施設とのレジストリのデータ共有およびオーサiershipに関する同意書についてZoomやメールでの協議を行い、各施設との同意書締結を近く行う予定である。



REDCap 上の共通レジストリ ANDy 登録画面(サンプル)

b) 子どもの眠りの質問票のアジア版作成

令和元年度学内共同研究支援課題（大阪大学，毛利准教授），令和2年度学外共同

研究支援課題（Dr. Jayanath, マレーシア）である日本版子どもの眠りの質問票のアジア版作成と妥当性検証について、事業連携相手との共同研究であり、共同研究推進・国際ハブ化部会で研究遂行のサポート・マネジメントを行った。英語及び4カ国の言語に翻訳したものを、海外4施設に提供した。マレーシアでは既にデータ収集を終了、解析を行っており、他3国でも研究が進行中である。

c) COVID-19 下のこどもと養育者の調査

上記 a, b の部会ベースでの共同研究支援に加え、2020年のCOVID-19流行に伴う社会的要請にこたえるため、拠点形成・推進委員会委員長からのトップダウンでの「COVID-19 拡散のなか、アジアの重点機関（マラヤ大学、インドネシア大学、マヒドン大学、フィリピン小児医療センター）と協働し、COVID-19 下の子どもたちの問題に取り組んでいる活動」に対して、追加支援を行った。追加支援対象課題として、大阪大学山本助教、金沢大学吉村准教授・田中助教とマレーシア・マラヤ大学との共同研究「新型コロナウイルス感染拡大下における発達障がいをもつ子どもの状況と発達支援ニーズに関する調査」に対して2部会の合同予算から15万円の支援を行った。当該研究においては日本・マレーシアで同一調査項目を用いた共同研究を実施し、両国においてデータ収集がほぼ完了している。インドネシア大学も同一調査項目を用いての調査を希望しており、現在準備中である。

本研究も、大阪大学医学部附属病院未来医療センターよりAMED経費の一部を支援していただいている。また、当該研究に関しては令和3-4年度の日本学術振興会二国間交流事業（研究代表者：大阪大学・橘特任准教授（常勤））に採択されており、令和3年度以降の解析・論文化・提言へとつなげていく予定である。

また、これとは別に福井大学の育児下ストレス調査についても、福井大学とマレーシア・マラヤ大学とで共同研究が進行中である。

6. 第2回 Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders 国際シンポジウムの開催。

令和3年1月22日（金）に、こころのセンター連絡会と合わせて、第2回 Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders (CRNACDD) 国際シンポジウムを、大阪大学会場とZoomによるハイブリッド形式で開催した（資料6, 7）。会場約15名、Zoomによる参加は65名で、日本・マレーシア・フィリピン・タイ・インドネシアの各国から共同研究の進捗とCOVID-19の各国の状況についての報告があった。本シンポ



第2回 CRNACDD 国際シンポジウム（2021.1.22、大阪大学と zoom のハイブリッド開催

ジウムには、国内外から大学院生や若手研究者など、21名（うち海外15名）の参加があった。本シンポジウム開催にあたっては、大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年記念事業委員会 国際シンポジウム実行委員会の「部局等が主催する国際シンポジウムへの支援」に申請採択され開催費用の支援を受けた。また、ハイブリッド開催にあたり、大阪大学医学部附属病院未来医療開発部未来医療センターの技術スタッフより、全面的な技術支援を受けた。

7. バイオリソースの整備・拠点化基盤強化

バイオリソースの整備に関して、大阪大学子どものこころの分子統御機構センターでは「ブレインバンク・バイオリソース部門」が村山繁雄特任教授を迎えて立ち上がり、大阪大学が保有するバイオリソースの共同研究利用・整備をすすめた。令和2年度、弘前大学中村和彦先生の仲介により、理化学研究所吉川研究室よりASD（および精神疾患）患者とその両親由来のリンパ芽球約200トリオ（総検体数約1250検体）の提供を受け、大阪大学への移送および本年度の管理関連費用について、2部会の予算より支出した。

本年度事業予算のうち、COVID-19の影響および、外部からの追加資金援助により余裕が生じた予算について、拠点形成・推進委員会より一部再配分があり、従来より大阪大学において収集してきた詳細な臨床情報と紐づいた患者と両親のヒト試料（DNA、RNA、リンパ芽球、血漿）のうち、トリオDNAの全エクソーム解析のためのライブラリー作製の費用の一部に充て、同バイオリソースの共有化に向けての整備を進めている。

8. 令和3年度共同研究募集要項について

令和3年度の6大学内研究者の海外との共同研究、および6大学研究者から内部研究者との共同研究の提案について、拠点化基盤推進部会が中心となって募集要項を作成し、4月より募集を開始した（資料8、9-1、9-2）。令和3年度は5月末を募集〆切とし、令和2年度同様共同研究推進・国際ハブ化部会および拠点化基盤推進部会の合同で審査を行って、学内、学外5件ずつ程度、各15万円の研究支援を行う予定である。

9. 令和3年度以降の活動予定について

令和3年度には、COVID-19の流行状況を見ながら、アジア圏の新規連携組織の開拓を行っていくことを予定している。具体的には、東南アジア圏のシンガポールやバングラデシュ、東アジアでの中国、韓国、台湾などとの連携を模索していきたい。合わせて、既に連携が確立した国々との間での学術交流、若手研究者や学生の交流と育成を進め、国外の共有可能なリソースの管理と活用を、現地研究者が行えるようなシステム作りを目指す。国内リソースの整備としては、連携施設にバラバラに存在する既存

のリソースを共通患者レジストリを活用して結びつける作業を進めるとともに、学内外の研究者が利用しやすい形でのリソース整備を推進し、合わせてリソース整備事業の研究資金の獲得に尽力する。

令和 2 年度 文部科学省共通政策課題事業「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」との共同研究支援 公募要領

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所, 同研究所附属子どものこころの分子統御機構研究センター, 金沢大学子どものこころの発達研究センター, 浜松医科大学子どものこころの発達研究センター, 千葉大学子どものこころの発達教育研究センター, 福井大学子どものこころの発達研究センター並びに弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センターで連携して実施する文部科学省共通政策課題事業「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」は, 国立大学法人のなかで唯一, 複数の大学が連合し, 「科学的視点を持って子どものこころを健やかに育てる」ための教育研究拠点です。

本事業では, 上記 6 大学内だけでなく, 広く国内, 海外の研究者・研究施設が, 子どものこころを健やかに育てることを目指して行う多施設に依る共同研究の場として中核的役割を果たし, 国内外の研究者の要請に応えることを目指しております。

そのため, 大阪大学連合小児発達学研究所の構成 5 大学及び弘前大学のこころの発達研究センターにおいて蓄積されたりソースや設備を活用して, 研究者が広く, 連合小児発達学研究所および弘前大学と共同し実施する研究を公募し, 支援します。

公募事項

1. 募集テーマ

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所, 研究科構成大学の子どものこころの発達研究センター(大阪大学は子どものこころの分子統御機構研究センター, 千葉大学は子どものこころの発達教育研究センター), 及び弘前大学子どものこころの発達研究センターにおいて実施する, 子どものこころに関する臨床研究・介入研究・基礎研究に関連するテーマ。

- (1) 計画共同研究: 6 大学の持つ共通リソースや設備を活用した下記テーマに関する共同研究を募集します。本年度の各受け入れ研究者の研究内容の詳細については各大学のホームページを参照してください。

研究テーマ

テーマ 1 脳とこころの表現型

(研究内容) 神経発生, 発達とその障害の分子メカニズム, ゲノム・エピゲノム・オミクス研究, 神経病理・神経薬理, 発達と発達障がいのあるあわれ・症候論など

<p>(事業側受入れ研究者)</p> <p>佐藤 真 教授 (大阪大学), 片山泰一 教授 (大阪大学), 横山 茂 教授 (金沢大学), 中村和彦 教授 (弘前大学), 謝 敏珏(ビンカク) 助教 (福井大学), 橋 雅弥 特任准教授 (大阪大学)</p>
<p>テーマ2 こころの育ちとその支援</p>
<p>(研究内容) 子育て支援, 地域・学校支援, 虐待, 出生コホート, 認知行動療法, ペアレントトレーニング, ことばとコミュニケーション, 子どもの眠りと育ちなど</p>
<p>(事業側受入れ研究者)</p> <p>友田明美 教授 (福井大学), 清水栄司 教授 (千葉大学), 土屋賢治 特任教授 (浜松医科大学), 毛利育子 准教授 (大阪大学), 高橋芳雄 准教授 (弘前大学), 足立匡基 准教授 (弘前大学), 奥野裕子 准教授 (大阪大学), 浦尾悠子 特任講師 (千葉大学), 西村倫子 特任講師 (浜松医科大学), 久能 勝 特任助教 (千葉大学)</p>
<p>テーマ3 子どものこころの計測とその基盤</p>
<p>(研究内容) MEG, MRI, PSG, 視線計測装置, バイオマーカー, 評価尺度開発, 機械学習, 子どものこころ研究の ELSI (ethical, legal and social issues) など</p>
<p>(事業側受入れ研究者)</p> <p>谷池雅子 教授 (大阪大学), 平野好幸 教授 (千葉大学), 土屋賢治 特任教授 (浜松医科大学), 下野九理子 准教授 (大阪大学), 丁ミンヨン 特命講師 (福井大学), 池田尊司 助教 (金沢大学)</p>

- (2) 一般共同研究：事業主体 6 大学外部の研究者からの自由な提案により，連合小児発達学研究所または 6 大学の子どものこころの研究センター所属の研究者と共同で行う子どものこころに関する研究を募集します。共同研究者には事業主体側の研究者（特任助教以上）を 1 名以上必ず含むようにしてください。6 大学による研究内容および研究者については，下記ホームページを参照してください。

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/>

大阪大学連合小児発達学研究所附属子どものこころの分子統御機構研究センター

<http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/kokoro/>

金沢大学子どものこころの発達研究センター

<http://kodomokokoro.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

浜松医科大学子どものこころの発達研究センター

<http://www.rccmd.org/>

千葉大学子どものこころ発達教育研究センター

<http://www.m.chiba-u.ac.jp/class/rccmd/>

福井大学子どものこころの発達研究センター

<http://www.med.u-fukui.ac.jp/CDRC/welcome.html>

弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター

<http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~kodomonon/>

2. 申請資格者

日本国内および海外の大学並びに研究機関，または公的医療機関に所属する教員・研究者・医師・コメディカル

3. 研究期間

採択日から令和3年3月31日まで（次年度の再申請による延長可）

4. 申請方法

申請書の様式は，上記 連合小児発達学研究所ホームページ，事業主体6大学の子どものこころのセンターホームページ，または以下の事業ホームページよりダウンロードして取得して下さい。

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/index.html>

本研究支援を希望される方は，募集テーマの受入教員（連合小児発達学研究所・子どものこころの発達研究センター所属）と研究課題，研究計画，必要経費等について事前に打ち合わせを行ったうえ，申請して下さい。

研究分野・所属教員・研究の概要等は，以下のホームページをご覧ください。

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/access/>

適当な受け入れ教員が見つからない場合や，希望の受入教員との事前打ち合わせについての調整を希望される場合は，6. 申請書提出先に記載された担当までご連絡ください。

作成した申請書は，e-mail または郵送にて 「6. 申請書提出先」に記載の提出先に提出して下さい。

5. 申請書提出期限

令和2年6月30日（火）17時必着

6. 申請書提出先

大阪大学大学院連合小児発達学研究所

共同研究推進・国際ハブ化部会担当：橋 雅弥（大阪大学，特任准教授）

拠点化基盤推進部会担当：土屋賢治（浜松医科大学，特任教授）

E-mail：kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

電話 06-6879-3863

住所 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2

7. 採択基準

応募いただいた提案は以下の基準を以って評価し、採否を決定します。

- (1) 連合小児発達学研究科および 6 大学の子どものこころの研究センターで行っている子どものこころの発達研究をさらに飛躍させるものであること
- (2) 研究実現の可能性が高く、研究の中で子どものこころのセンターが果たす役割が明確であること
- (3) 国際化の視点を持った研究であること
- (4) 先端的もしくは社会への還元・貢献が期待できる研究であること
- (5) 本事業の趣旨にかなう内容であること
- (6) 倫理的な問題のない研究であること

※事業の趣旨については、下記の HP を参照してください。

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/index.html>

8. 採否

(1)計画共同研究、(2)一般共同研究を合わせて5件程度の採択を予定しています。

共同研究の採否は、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業 共同研究推進・国際ハブ化推進部会および拠点化基盤推進部会で審議決定し、本事業実行委員会で承認後、申請者へ直接通知します。

9. 研究経費

1 件につき 15 万円を上限として、共同研究に必要な研究経費について、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業で負担します。必要な研究経費のうち、支援可能な項目は、共同研究にかかわる旅費、および事業側が支出に同意した物品購入費とします。

10. 遺伝子組み換え実験、動物実験、ヒト及びヒトから得られた標本を対象とする研究、ヒトへの介入研究、ヒトゲノム・遺伝子解析研究等

研究において遺伝子組み換え実験、動物実験等を 6 大学で実施する場合、またヒトから得られた標本を用いた研究、ヒトへの介入研究、ヒトゲノム・遺伝子を扱う研究等では、研究の遂行にあたって、6 大学において申請手続きや倫理審査・承認が必要となります。

11. 研究連絡会での発表

共同研究代表者には、研究の進捗状況や成果について、例年 1 月下旬に開催する子ど

ものこころの研究センター研究連絡会にてご報告いただきます。詳細については、採択後にお知らせします。

1 2. 共同研究報告書の提出

研究代表者は、令和元年度の研究成果を A4 版 2 – 3 枚程度にまとめ、令和 3 年 4 月 30 日までに、「6. 申請書提出先」へ提出してください。

報告書の著作権は公衆送信権を含めて「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業を実施している各大学の子どものこころの研究センター（大阪大学連合小児発達学研究所附属子どものこころの分子統御機構研究センター、金沢大学子どものこころの発達研究センター、浜松医科大学子どものこころの発達研究センター、千葉校大学子どものこころの発達教育研究センター、福井大学子どものこころの発達研究センター並びに弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター）に帰属いたしますので、ご了承ください。

※報告書の記載方法などについては、後日連絡します。

1 3. 論文の提出

本共同研究の成果を論文として発表される場合には、謝辞として「文部科学省共通政策課題事業子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装事業との共同研究による」旨の文章を記載していただくことをお願いいたします。その際、別刷り 1 部を「6. 申請書提出先」へ提出してください。

1 4. 知的財産権の取り扱い

大阪大学共同研究規程を準用します。

http://www.osaka-u.ac.jp/jp/about/kitei/reiki_honbun/u035RG00000471.html

1 5. 事故対応等

共同研究が採択され、学生が参画する場合は、「学生教育研究災害障害保険」等に必ず加入し、所属機関の助教以上の教員、もしくは、連合小児発達学研究所、各大学の子どものこころの研究センター及び弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの研究センターの教員の監督下にて実験等を実施してください。

1 5. 前年度採択者の再申請

前年度に本事業での共同研究に対する支援を受けている場合にも、次年度に改めて共同研究申請を行うことができます。他の申請と同様に、厳正な審査を行い、再度採択された場合には、次年度にも継続して共同研究支援を受けることができます。

1 6. 問い合わせ先

大阪大学大学院連合小児発達学研究科

共同研究推進・国際ハブ化部会担当：橘 雅弥（大阪大学，特任准教授）

拠点化基盤推進部会担当：土屋賢治（浜松医科大学，特任教授）

E-mail : kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

電話 06-6879-3863

住所 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2

Information and Call for Collaborative Research Partners for FY2020
With the Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders
Under MEXT Policy Initiative

The Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders is a unique initiative among national universities in Japan. It is an education research network set up by several national universities that have come together to promote mental health in children, with a scientific focus. This is a project initiative of the Japanese Government's Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). Participating universities and centers are Osaka University United Graduate School of Child Development, Osaka University, Kanazawa University, Hamamatsu University School of Medicine, Chiba University and University of Fukui ("UGSCD"), Molecular Research Center for Children's Mental Development, United Graduate School of Child Development, Osaka University, Research Center for Child Mental Development, Kanazawa University, Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine, Research Center for Child Mental Development, Chiba University, Research Center for Child Mental Development, University of Fukui, and Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine.

The project goes beyond the bounds of the six academic institutions named above. The Network is to play a key role as a hub for collaborative research aimed at promoting the mental health of children, with participation from other Japanese and non-Japanese institutions, international researchers and research centers around the globe. The Network aims to respond to the requests and needs of Japanese as well as international researchers.

To this end, the Network is calling for research partners who will work in collaborative research with the five universities that comprise UGSCD and the Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine. The collaboration will utilize the resources and facilities that have been acquired and created at these centers and research support and funding will be made available. Potential research partners from far and wide are invited to apply to undertake collaborative research.

General Information for Applicants

1. Research Topic

The research topic for application should be relevant to clinical/ interventional/ basic researches on child mental development conducted at UGSCD, the research centers of Network member institutions (The center at Osaka University will be Molecular Research Center for Children's

Mental Development, United Graduate School of Child Development, Osaka University, and the center at Chiba University will be Research Center for Child Mental Development, Chiba University), and the Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine.

(1) Planned collaborative project

Collaborative projects which will utilize the resources and facilities that have been acquired and created at Osaka University UGSCD and 6 centers of the participating universities in Japan. The collaborative research theme and the collaborator(s) from the 6 universities in the Network in 2020 will be selected from the list below. For the details of each research topic and researcher, please refer to the websites of UGSCD and 6 centers.

List of research topics

<i>Theme 1 Phenotypes of Brain and Mind</i>
(Topics) Neurogenesis; Molecular mechanisms of mental development/disorders; Genomics / epigenomics / other omics studies; Neuropathology; Neuropharmacology; Phenotypes and symptomatology of normal/abnormal mental development, etc.
(Collaborative researchers from the Network in 2020) SATO Makoto (Prof., Osaka Univ.), KATAYAMA Taiichi (Prof. Osaka Univ.), YOKOYAMA Shigeru (Prof., Kanazawa Univ.), NAKAMURA Kazuhiko (Prof. Hirosaki Univ.), XIE Min-Jue (Assist. Prof., Univ. of Fukui), TACHIBANA Masaya (Assoc. Prof., Osaka Univ.)
<i>Theme 2 Mental development and support for development</i>
(Topics) Parenting support; Regional childcare / school support; Child abuse; Birth cohort study; Cognitive behavioral therapy; Parent training; Language and communication; Sleep, etc.
(Collaborative researchers from the Network in 2020) TOMODA Akemi (Prof., Univ. of Fukui), SHIMIZU Eiji (Prof., Chiba Univ.), TSUCHIYA Kenji (Prof., Hamamatsu Univ. School of Med.), MOHRI Ikuko (Assoc. Prof., Osaka Univ.), TAKAHASHI Michio (Assoc. Prof., Hirosaki Univ.), ADACHI Masaki (Assoc. Prof., Hirosaki Univ.), OKUNO Hiroko (Assoc. Prof., Osaka Univ.), URAO Yuko (Assoc. Prof., Chiba Univ.), NISHIMURA Tomoko (Assoc. Prof., Hamamatsu Univ. School of Med.), KUNO Masaru (Assist. Prof., Chiba Univ.)
<i>Theme 3 Measurement of children's mental activities, infrastructures for the measurement</i>
(Topics) MRI; MEG; PSG; Gaze detection system; Biomarkers; Development of scales/questionnaires; Artificial intelligence; ELSI (ethical, legal and social issues) in researches of child mental development, etc.
(Collaborative researchers from the Network in 2020)

TANIIKE Masako (Prof., Osaka Univ.), HIRANO Yoshiyuki (Prof., Chiba Univ.), TSUCHIYA Kenji (Prof., Hamamatsu Univ. School of Med.), KAGITANI-SHIMONO Kuriko (Assoc. Prof., Osaka Univ.), JUNG Minyoung (Assoc. Prof., Univ. of Fukui), IKEDA Takashi (Assist. Prof., Kanazawa Univ.)

(2) General Collaborative Project

General Collaborative Project themes will be proposed freely by researchers outside the Network of Japan. The proposal should include at least one researcher (Prof / Assoc. prof. Asst. prof.) of UGSCD or the 6 universities participating the Network.

Please refer to the following websites for the research being undertaken at each institution and the belonging researchers.

Osaka University UGSCD

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/>

Molecular Research Center for Children's Mental Development, United Graduate School of Child Development, Osaka University

<http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/kokoro/>

Research Center for Child Mental Development, Kanazawa University

<http://kodomokokoro.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine

<http://www.rccmd.org/>

Research Center for Child Mental Development, Chiba University

<http://www.m.chiba-u.ac.jp/class/rccmd/>

Research Center for Child Mental Development, University of Fukui

<http://www.med.u-fukui.ac.jp/CDRC/welcome.html>

Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine

<http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~kodomono/>

2. Eligibility

Teaching staff, researchers, graduate school students, physicians and co-medical professionals of universities and research institutions or healthcare institutions in Japan and other countries

3. Research Timeframe

From the date of approval until March 31, 2021 (Possible extension into the following fiscal year upon reapplication)

4. Application Procedure

Use the application form available from the websites of Osaka University UGSCD and the research centers listed above or the project webpage below.

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/index.html>

Applicants for this research support and funding should first liaise with the relevant prospective academic collaborator belonging to the respective Network member research institution, and discuss the theme, plan, and research expenses beforehand.

Please refer to the following webpage or the websites listed above for information on the research domain, faculty/staff members and details of ongoing research.

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/en/>

If the applicant has difficulties in finding relevant collaborator at the research institution of choice, or wishes to discuss the collaboration with the prospective academic collaborator, please e-mail the Application Contact given in Section 6.

Submit the completed application form by e-mail or by post to the Application Contact given in Section 6.

5. Application Deadline

No later than 17:00 hrs (JST) on Tuesday, June 30, 2020.

6. Application Contact

Committee of Collaborative Research Promotion / Globalization

(Chair: TACHIBANA Masaya, Osaka Univ., Assoc. Prof.) or

Committee of Joint Resource Promotion

(Chair: TSUCHIYA Kenji, Hamamatsu Univ. School of Med., Prof.)

Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders

United Graduate School of Child Development, Osaka University

E-mail: kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

Phone: +81-6-6879-3863

Address: 2-2, Yamadaoka, Suita-shi, Osaka 565-0871, Japan

7. Review of Research Proposal

Research proposals submitted will be reviewed under the criteria listed below. The successful application shall:

- (1) Further drive forward and enhance the developmental research undertaken at UGSCD and the six member university research centers.
- (2) Be highly practicable and have a clearly defined role to play in the ongoing work at the

relevant research center.

- (3) Have a global perspective and scope of application
- (4) Be pioneering or have the potential of benefiting/contributing to society at large
- (5) Fulfil the purpose and mission of the project initiative
- (6) Be ethically acceptable

*Please refer to the webpage below for the purpose and mission of the project initiative.

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crmacdd/index.html>

8. Successful Applications

Adoption of roughly five applications in total is planned. Adoptive decisions will be made upon deliberation by the executive committee of the Network after reviewed by Collaborative Research Promotion/Globalization Subcommittee and Joint Resource Promotion Subcommittee. The successful applicants will be contacted directly by the Network.

9. Expenses

Research expenses required for the collaborative research shall be paid for with project funding from the Network up to a maximum of 150,000 JPY per adopted project. The items which will be paid are travel expenses and purchase of materials for which the Network agree to pay beforehand.

10. Research Using Genome-Editing Techniques / Animals / Human Samples, Research with Intervention to Human and Analysis of Human Genome / Genes

If the adopted research plan includes genome-editing, animal experiments, use of human derived samples, intervention to human subjects, and human genome analysis at institute within the Network, review and approval from the relevant committee (IRB, IACUC, etc) of the Network institute are necessary. The recipient of this funding and the collaborator inside the network shall submit necessary application for approval to the relevant committee of the institutes where the network collaborator belongs, before the recipient starts applicable experiments or research.

11. Presentation at Research Liaison Conference

The successful recipient of the research collaboration funding shall report on the progress and results of the research to the research liaison conference of the research centers for child development which is held every end-January. Detailed information will be given after application approval.

12. Collaborative Research Report

The principal investigator shall submit a summary of the research results for FY 2020. This shall be a report covering 2 to 3 pages of A4 paper. The report should be submitted by April 30, 2021 to the UGSCD contact given in Section 6 above.

The copyright of the report, including the right of public transmission, shall be the property of the research centers of each university undertaking the project belonging to the Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders (namely, Molecular Research Center for Children's Mental Development, United Graduate School of Child Development, Osaka University, Research Center for Child Mental Development, Kanazawa University, Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine, Research Center for Child Mental Development, Chiba University, Research Center for Child Mental Development, University of Fukui, and Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine).

*Format and other instructions on compiling the report will be made available at a later date.

12. Publication of Research Paper

If the findings of this collaborative research are to be published, the paper should carry the following sentence as acknowledgement: "This study was supported by the Collaborative Research Program of the Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders: MEXT Policy Initiative FY2020, under joint research conducted through the initiative." Please submit a printed copy of the paper to the contact address given in Section 6.

13. Intellectual Property Rights

Regulations on Collaborative Research at Osaka University will apply to the handling of intellectual property rights.

http://www.osaka-u.ac.jp/jp/about/kitei/reiki_honbun/u035RG00000471.html

14. Health and Safety Provision

After approval of the research project, if students are recruited to participate in the research, insurance must be taken out (e.g. Accidents and Disasters Insurance for Students in Education and Research). Experiments must be conducted under the supervision either of a member of the institution concerned who is of assistant professor position or higher, or a faculty member of UGSCD, research centers of member universities or the Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine.

15. Reapplication for Research Funding

Even if funding has been received for collaborative research in one fiscal year, application can be made for collaborative research funding in the following fiscal year. The application will be considered carefully alongside other applications. If your application is successful, funding for the collaborative research will continue for the new fiscal year.

16. Contact Us

Committee of Collaborative Research Promotion / Globalization

(Chair: TACHIBANA Masaya, Osaka Univ. Assoc. Prof.) or

Committee of Joint Resource Promotion

(Chair: TSUCHIYA Kenji, Hamamatsu Univ. School of Med., Prof.)

Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders

United Graduate School of Child Development, Osaka University

E-mail: kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

Phone: +81-6-6879-3863

Address: 2-2, Yamadaoka, Suita-shi, Osaka 565-0871, Japan

令和2年度 文部科学省共通政策課題事業「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」海外共同研究支援 支援プロジェクトの募集について

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究科，同研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター，金沢大学子どものこころの発達研究センター，浜松医科大学子どものこころの発達研究センター，千葉大学子どものこころの発達教育研究センター，福井大学子どものこころの発達研究センター並びに弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センターで連携して実施する文部科学省共通政策課題事業「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」では，6大学内だけでなく，広く国内，海外の研究者・研究施設が，子どものこころを健やかに育てることを目指して行う多施設に依る共同研究の場として中核的役割を果たし，全国の研究者の要請に応えることを目指しております。

そのため，大阪大学連合小児発達学研究科の構成5大学及び弘前大学のこころの発達研究センターにおいて現在進行中もしくは今後行われる国際化を目指した研究に対し，これを支援します。

募集要項

1. 募集テーマ

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究科，研究科構成大学のこころの発達研究センター（大阪大学は子どものこころの分子統御機構研究センター，千葉大学は子どものこころの発達教育研究センター），および弘前大学子どものこころの発達研究センターにおいて実施する，特にアジアに向けた国際化を目指す臨床研究もしくは基礎研究。現在進行中のものでも，今後実施する予定のものでも良い。

2. 応募資格者

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究科，研究科構成大学のこころの発達研究センター（大阪大学は子どものこころの分子統御機構研究センター，千葉大学は子どものこころの発達教育研究センター），および弘前大学子どものこころの発達研究センターに所属する，教員，大学院生，研究員等。

3. 応募方法

所定の申請書（様式1）に必要事項を記載して，下記申請書提出先に E メールに添付

してご提出ください。

4. 申請書提出期限

令和2年 6月30日(火) 17時必着

5. 申請書提出先

大阪大学大学院連合小児発達学研究科

共同研究推進・国際ハブ化推進部会担当 橘 雅弥 (大阪大学)

拠点化基盤推進部会担当：土屋賢治 (浜松医科大学)

E-mail : kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

電話 06-6879-3863

住所 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2

6. 支援基準

応募いただいた提案は以下の基準を以って評価し、支援の可否を決定します。

- (ア) 連合小児発達学研究科および6大学の子どものこころの研究センターで行っている子どものこころの発達研究をさらに飛躍させるものであること
- (イ) 国際化(特にアジア地域)の視点を持った研究であること
- (ウ) 倫理的に問題のない研究であること
- (エ) 本事業の主旨にかなう内容であること
- (オ) 令和2年度中に支援を受けた額の執行が可能であること

7. 採否

採否は、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業共同研究推進・国際ハブ化推進部会および拠点化基盤推進部会で審議決定し実行委員会で承認後、申請者へ直接通知します。

8. 支援内容

研究に必要な備品等購入費、海外との連携のための旅費などを支援します。今年度は5~6件について1件につき上限15万円までの支援を予定しています。

9. 研究連絡会での発表

研究代表者には、研究の進捗状況や成果について、例年1月下旬に開催する子どものこころの研究センター研究連絡会にてご報告いただきます。詳細については、採択後お知らせします。

10. 研究報告書の提出

研究代表者は、令和元年度の研究成果を A4 版 2-3 枚程度にまとめ、令和 3 年 3 月 31 日までに「12. 報告書提出先」へ提出してください。

報告書の著作権は公衆送信権を含めて「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業を実施している各大学の子どものこころの研究センター（大阪大学連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター、金沢大学子どものこころの発達研究センター、浜松医科大学子どものこころの発達研究センター、千葉校大学子どものこころの発達教育研究センター、福井大学子どものこころの発達研究センター並びに弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター）に帰属いたしますので、ご了承ください。

※報告書の記載方法などについては、後日連絡します。

11. 前年度採択者の再申請

前年度に本支援を受けている場合にも、次年度に改めて研究支援への応募ができます。他の申請と同様に、厳正な審査を行い、再度採択された場合には、次年度にも継続して研究支援を受けることができます

12. 報告書提出先（問い合わせ先）

大阪大学大学院連合小児発達学研究科

共同研究推進・国際ハブ化推進部会担当 橘 雅弥（大阪大学）

拠点化基盤推進部会担当：土屋賢治（浜松医科大学）

e-mail：kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

電話：06-6879-3863（平日 9時~17時）

住所：〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2

資料 3-1 事業主体外研究者と 6 大学内研究者との共同研究支援 報告書

共同研究支援報告書	
提出日	2020年5月25日
氏名	周東 智
所属大学名	北海道大学薬学研究院創薬化学創薬有機化学
職位	教授
研究題目	還元型nicotinamide ribosideによる社会性行動異常の修復実験
研究の成果・進捗状況	adenine dinucleotide (NAD)の前駆体であるnicotinamide riboside (NR) の経口投与で、脳NADが増加し、引きこもりや社会性行動障害が改善されることをマウスで報告した(Gerasimenko et al., Scientific Reports, in press)。一方、還元型のNRはNRより効果が高いことが考えられ、周東、渡辺、藤原は還元型のNRを合成した。これを、金沢大学の社会性行動解析チームGerasimenko, 辻、東田らがCD157 ノックアウトマウスに投与し、横山の指導の下、社会性忌避行動からの回復を観察する準備が整った。また、NAD 代謝の専門家であるアメリカや中国の大学とも協力して、オキシトシンに代わる自閉症治療薬として開発してゆくつもりであったが、今の状況はそれを許さなかったため、まず、有効性を確認したら、海外とも共同研究を推し進める予定である。
論文発表・学会発表等	
共同研究支援報告書	
提出日	2020年6月4日
氏名	辻隆宏
所属大学名	福井大学
職位	助教
研究題目	脳内移行性の高いバソプレシン受容体(V1a/V1b)特異的アゴニスト開発の研究
研究の成果・進捗状況	<p>研究概要: バソプレシン受容体(V1a/V1b)特異的アゴニストをカルシウムイメージングにてスクリーニングを行う。その後、簡便な眼圧降下実験にて検証したのち、社会性行動障害を示す自閉症モデルマウスを用いて社会性改善効果を検討する。最後に、アゴニストの脳内移行性を視床下部バソプレシン(AVP)細胞の神経活動を指標に検証する。</p> <p>1) 共同開発先であるスカイシーファーマからいくつかの類縁AVPの提供を受け、in vitroのアッセイ系により、AVPアゴニストの受容体への特性を解析した。天然型AVPに比べ、バソプレシン受容体への親和性や特異性が高いものではなかった。</p> <p>2) AVPIには、眼圧降下効果があることが知られており、AVPの投与によりマウス眼圧を下降させることを確認している。簡便に行える眼圧降下実験を指標に生理的な効果を評価したところ、天然型AVPIに比べ、眼圧降下作用が強くなかった。</p> <p>よって、引き続き、スカイシーファーマ社から化合物の提供を受ける予定である。</p>
論文発表・学会発表等	該当なし

資料 3-2 6 大学から海外に向けた共同研究支援 報告書

共同研究支援報告書	
提出日	2020年5月21日
氏名	毛利育子
所属大学名	大阪大学
職位	准教授
研究題目	子どもの眠りの質問票を用いた小児の睡眠のアジア諸国間の国際比較
研究の成果・進捗状況	睡眠は小児において脳発達や行動に重要である。一方、睡眠は家庭の睡眠環境やライフスタイル、メディア視聴が大きく影響する。本件研究は、我々が開発した子どもの眠りの質問票(JSQP)を用いて、アジア各国の小児の睡眠と行動発達の状況を明らかにすることを目的としている。本年度はマレーシア、インドネシア、フィリピン、タイにおいて睡眠調査を展開すべく、各国の研究者にJSQPを紹介した。さらに、現地での調査にあたり、JSQPの英語版、インドネシア語版、タイ語版、フィリピン語版を作成した。
論文発表・学会発表等	なし。

共同研究支援報告書	
提出日	2020年5月26日
氏名	東田陽博
所属大学名	金沢大学子どものこころの発達研究センター
職位	特任教授
研究題目	オキシトシン体内動態解析のための新しいELISA測定キットの作成
研究の成果・進捗状況	<p>1. 抗オキシトシンモノクローナル抗体を産生するハイブリドーマは株式会社スカイシーファーマで2種類(7a5と8a2)作成された。抗オキシトシンモノクローナル抗体7a5は、抗原抗体反応による抗原への結合と視床下部組織の免疫組織染色による特異性を確認した(A monoclonal antibody raised against a synthetic oxytocin peptide stains mouse hypothalamic neurons. J Neuroendocrinol. 2019 Nov 26:e12815.)。今回、東田陽博、渡辺由美、横山茂、辻知陽らで8a2について、マウスの脳組織切片での免疫組織染色を行った。両者にはほとんど差がみられなく、オキシトシン神経はよく染色でき、バゾプレシン神経は染めないことを確認した。しかし、上清に処理を加え精製する必要性を免疫組織化学染色で確認した。</p> <p>2. 培養上清を500 mLほど採取し、冷凍保存した。アフィニティークロマトグラフィーの選択を行うところで、研究の追行ができなくなり、精製ができなかった。</p> <p>3. 2種類の抗原抗体反応を利用し、サンドイッチ法によるenzyme linked immunoassay system (ELISA)オキシトシン検出方法は確立できなかった。予定の海外共同研究者には連絡せず、拠点の形成には至らなかった。</p>
論文発表・学会発表等	

共同研究支援報告書	
提出日	2020年5月19日
氏名	土屋 賢治
所属大学名	浜松医科大学
職位	特任教授
研究題目	アジア諸国との出生コホート連携
研究の成果・進捗状況	<p>アウストロアジア15か国の31出生コホートが参加するBirth Cohort Consortium in Asia (BiCCA)を通じてデータ連携を行い、低出生体重児の予後に関する大規模疫学共同研究を行うことを目指し研究に着手した。この研究期間中はもっぱらデータ統合の準備を目的に、日本国内でBiCCAに参加する北海道大学岸玲子教授らと、また日本国内の出生コホートの連携を目指す活動を行う中央大学の佐田文宏教授、国立成育医療研究センター森崎菜穂室長らと会合、情報交換を行い、低出生体重、妊娠糖尿病(GDP)、妊娠高血圧症候群(HDP)のそれぞれ進行中のコホートにおける定義について比較検討を行った。低出生体重の定義については各コホートとも差異はなかったが、GDPおよびHDPについてはかなり大きな違いがみられた。また、BiCCAに参加するシンガポール国立大学、台湾国立大学の出生コホートの定義についても比較・検討を行い、定義の差異がみられた。当面は低出生体重とその予後に絞ったデータ統合を進めるべきであるとの結論に至った。</p>
論文発表・学会発表等	なし

共同研究支援報告書	
提出日	2020年5月19日
氏名	浦尾悠子
所属大学名	千葉大学
職位	特任講師
研究題目	認知行動療法に基づく不安の予防教育プログラム「勇者の旅」の台湾における実施可能性と効果検証
研究の成果・進捗状況	<p>現在までに、「勇者の旅」ワークブックの中国語版作成、「勇者の旅」ホームページの中国語翻訳、「子どもみんなプロジェクト」ホームページの中国語翻訳を完了している。</p> <p>国立台湾師範大学との共同研究を開始するにあたり、令和2年2月下旬に台湾を訪問予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、渡航困難となったため、2月27日にオンライン会議を行った。また、3月下旬に同大学の田秀蘭教授を招聘して「学校認知行動療法研修会～日本・台湾での生徒指導の在り方～」の国際共同シンポジウム・特別講演を開催予定であったが、同理由で中止となったため、4月～5月にかけて、オンライン会議システムで国立台湾師範大学の田秀蘭教授と複数回コンタクトをとり、研究に関する情報交換を行った。更に5月には、「勇者の旅」プログラムの評価指標であるSCAS(スペンス児童不安尺度)の中国語版開発者らとコンタクトをとり、尺度の使用許可を得た。今後、まずはSCAS中国語版を用いて、台湾の児童の不安の状態を把握し、日本と国際比較を行う予定である。</p>
論文発表・学会発表等	

共同研究支援報告書	
提出日	2020年6月10日
氏名	堀家 慎一
所属大学名	金沢大学
職位	准教授
研究題目	合成ゲノム生物学的手法を用いた神経発達障害患者の新規ゲノム治療法の開発
研究の成果・進捗状況	<p>自閉症をはじめとする神経発達障害は、多くの場合ゲノム異常を伴う遺伝病であり、近年のゲノム解析技術の向上に伴い、自閉症患者においては、様々な染色体領域の大規模な欠失および重複が認められることが明らかとなった。本研究では、天津大学のYingjin Yuan教授らと共同で「合成ゲノム生物学的手法を用いた神経発達障害患者の新規ゲノム治療法の開発」を行うこととした。これまでの進捗状況として、平成31年4月～令和元年12月にかけてYuan教授のラボの大学院生、Ruiying Zhuさんが金沢大学に滞在し、本研究課題の根幹となる合成ゲノムのヒト細胞への移入実験や組み換えベクターの構築に取り組んできた。引き続き、令和2年2月以降も、Yuan教授のラボの大学院生の金沢への訪問や申請者の中国・天津大学の訪問を予定していたが、新型コロナウイルスの影響で、すべての交流がキャンセルとなった。しかしながら、現在までのところEメール等で情報交換し、互いのラボで本研究課題に取り組んでいる。本学では、微小核細胞融合法を用いたヒト人工染色体ベクターのヒト細胞への移入実験を行っており、ヒト人工染色体ベクターが導入された細胞を同定中である。一方、Yuan教授のラボでは、天津大学の人工ゲノム合成システムを用いて、自閉症患者で欠失した1p36領域（100kb以上）の人工ゲノム合成を出芽酵母を用いて行っていると報告を受けている。</p>
論文発表・学会発表等	なし

共同研究支援報告書	
提出日	2020年6月16日
氏名	西谷正太
所属大学名	福井大学
職位	特命助教
研究題目	アジア人脳・末梢組織間メチル化相関データベース(AMAZE-OpG)構築の為に日本人データベース作成
研究の成果・進捗状況	<p>本研究の成果はまだない。しかし、本研究支援申請時に、準備・申請していた本研究計画内容の倫理申請が、最近（5月）、承認され、実施が可能となった。また、既に6月中に少なくとも1例実施する。そこで、本年度中にはパイロット版データベースを作成するための例数を集められることが期待できる。一方、本支援により、本研究計画で行う予定の解析（メチル化マイクロアレイ）の予備実験を十分に行うことができた。したがって、これから検体が収集できた場合、解析部分（Wet/Dry両方）を円滑に進める目処を立てることができた。</p>
論文発表・学会発表等	



文部科学省共通政策課題事業

子どものこころの研究センターから展開する 国際研究拠点の形成と社会実装

「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業

令和元年度支援課題報告会プログラム

日 時 : 令和3年3月29日(月) 15:00-16:50 (14:45より参加できます)

Zoom URL :

<https://zoom.us/j/99736290494?pwd=VmRubEgzVzRvRWwxdytQLzV1dWpwdz09>

ミーティング ID: 997 3629 0494

パスワード : 129218

15:00-15:05 開会挨拶 連合小児発達学研究科長, 拠点形成・推進委員会委員長
佐藤 真

セッション1 (15:05~15:45) 6 大学内海外共同研究支援課題1

座長: 原田妙子 (浜松医科大学), 池田尊司 (金沢大学)

15:05-15:15 毛利育子 (大阪大学)

子どもの眠りの質問票を用いた小児の睡眠のアジア諸国間の国際比較

15:15-15:25 浦尾悠子 (千葉大学)

認知行動療法に基づく不安の予防教育プログラム「勇者の旅」の台湾における実施可能性と効果検証

15:25-15:35 新川広樹 (弘前大学)

乳幼児のための睡眠改善オンラインアプリの地方部における有用性評価-アジアの睡眠文化に適した介入法の整備に向けて-

15:35-15:45 土屋賢治 (浜松医科大学)

アジア諸国との出生コホート連携

セッション2 (15:45~16:50) 6 大学内海外共同研究支援課題2・学外共同研究支援課題

座長：謝敏カク (福井大学), 西谷正太 (福井大学)

15:45-15:55 堀家慎一 (金沢大学)

合成ゲノム生物学的手法を用いた神経発達障害患者の新規ゲノム治療法の開発

15:55 -16:05 東田陽博 (金沢大学)

オキシトシン体内動態解析のための新しい ELISA 測定キットの作成

16:05- 16:15 西谷正太 (福井大学)

アジア人脳・末梢組織間メチル化相関データベース (AMAZE-CpG) 構築の為に日本人データベース作成

16:15-16:25 辻 隆宏 (福井大学, 共同研究者：金沢大学 横山 茂, 辻 知陽, 令和元-2 年度共同

研究支援課題)

脳内移行性の高いバソプレシン受容体 (V1a/V1b) 特異的アゴニストの開発

16:25-16:35 周東 智 (北海道大学, 共同研究者：金沢大学 横山 茂, 東田陽博, 辻知陽, 令和元年度共同研究支援課題)

還元型 nicotinamide riboside による社会性行動異常の修復実験

16:35-16:45 田中潤也 (愛媛大学, 共同研究者：大阪大学 佐藤 真, 令和2 年度共同研究支援課題)

ミクログリアのシナプス貪食活性上昇誘導による ADHD 及び ASD 様行動改善の試み

16:45-16:50 閉会挨拶 共同研究推進・国際ハブ化推進部会長 橘 雅弥

資料 5-1 事業主体外研究者と 6 大学内研究者との共同研究支援 報告書

共同研究支援報告書	
氏名	田中潤也
所属大学名	愛媛大学
職位	教授
研究題目	ミクログリアのシナプス貪食活性上昇誘導によるADHDおよびASD様行動改善の試み
内容報告	黒いまだら模様を持つLister hooded ratが多動であることに気づき、様々な行動実験を行った。Wistarラットや自然発症高血圧ラットSHRに比べて、多動・不注意・衝動性が顕著であり、かつ、ASD様の行動や知的能力の低下は認めなかった。これらのADHD様行動はアトモキセチン・グアンファシンで改善し、ヒトADHDで異常が報告されている遺伝子のうち8個でWistar、SHRに比べて前頭葉での発現が低下していた。これらから、LHRをADHDモデル動物として用いると考えた。また、LHRミクログリアは貪食活性が弱く、内側前頭前皮質に相当する領域でシナプスが増加しており、神経細胞におけるcFos発現が高かった。ミクログリアによる興奮性シナプスの貪食除去が減少する結果、ADHD様行動を生じる可能性がある。
成果(論文発表等)	Lister hooded rats as a novel animal model of attention-deficit / hyperactivity disorder. T Jogamoto, R Utsunomiya, et al. Neurochem Int 141 (2020) 104857. Synaptic elimination by microglia and disturbed higher brain functions. K Miyanishi, A Sato, N Kihara, R Utsunomiya, J Tanaka. Neurochem Int 142 (2021) 104901.

Collaborative Research Report	
Name	Dr Subhashini Jayanath
University/Organization	University of Malaya, Kuala Lumpur, Malaysia
Position	Senior Lecturer & Consultant Developmental Paediatrician
Research Topic and Outline	<p>Research Topic: Translation and validation of the Japanese Sleep Questionnaire for Preschoolers (JSQ-P) into English and Malay Language versions in a Malaysian context.</p> <p>Outline: Validation of the English language version of the available Japanese Sleep Questionnaire for Preschoolers (JSQ-P) was conducted in Malaysia. Additionally, the English language version of the JSQ-P was translated into the local language (Malay language) and the Malay language version was then also validated. Descriptive data (socio-demographic, sleep practices, sleep issues) were collected and analysed to provide information on the Malaysian paediatric population of typically developing children. Ninety-one (91) respondents answered the English language version and another 91 answered the Malay language version.</p>
Collaborative Research Activity	<p>(1) Joint research study utilising the Japanese Sleep Questionnaire for Preschoolers (JSQ-P) developed by Associate Prof. Ikuko Mohri and her team. The English language version was previously translated by Associate Prof. Ikuko Mohri and her team. The University of Malaya team conducted: (1) the validation of the English language version in the Malaysian population, and also (2) the translation and validation of the Malay language version. Recruitment was over a three-month period from August to November 2020. Data analysis was completed in January 2021. Currently, at the manuscript drafting stage. After publication, the subsequent plan is to use the validated English and Malay language versions of the JSQ-P in other paediatric populations in Malaysia (including those with developmental disabilities, neurodisabilities and comorbidities).</p> <p>(2) The findings of the research study were presented during the Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders: 2nd International Symposium, on 22 January 2021.</p>
Publication, Paper	It is planned for two (2) manuscripts to be submitted to the Sleep Medicine journal. The first manuscript will include descriptive findings and validation results of the English language version of the JSQ-P. The second manuscript will include descriptive findings, translation and validation of the Malay language version.

Collaborative Research Report	
Name	Hsiu-Lan Shelley Tien; Yi-Ning, Su
University/Organization	National Taiwan Normal University/Department of Educational Psychology and Counseling
Position	No. 162, Section 1, Heping East Road, Sec 1, Da'an District, Taipei City
Research Topic and Outline	A Counseling Effect Study of Journey of the Brave Group on the Anxiety, Happiness and Life Adaptation of Primary School Children
Collaborative Research Activity	<p>The study aims to explore the effectiveness of the Brave Group program intervention in the counseling of the anxiety, happiness and life adjustment of primary school children. The research adopts a quasi-experimental design. It recruits schoolchildren who are willing to participate in the group project on campus, and obtains the consent of the participants and their legal representatives. It is estimated that 16-20 people will be recruited, and they will be randomly assigned to the experimental group and the control group. Before the experimental intervention, the scale will be pre-tested, and the pre-test scores will be used as covariates for statistical control. Then, the experimental operation will be carried out. The experimental group will have a 10-week tour of the Brave Group for 40 minutes once a week; the control group will also have a Normal Group for 40 minutes once a week for 10 weeks. After the experiment, a post-test of the scale was performed, and a post-test of the scale was performed one month after the end of the experiment to test and analyze the changes in anxiety, happiness, and life adaptation of the participants, as well as the tracking effect. In addition, the performance of the participants will be observed and compiled into records during the group. After the group project, the group participants will also be asked to fill in the group feedback questionnaire and conduct semi-structured interviews with the mentors of the group participants to collect qualitative data. The data serves as research evidence and supplementary explanation. The entire research process was conducted in the same school.</p>
Publication, Paper	N/A

共同研究支援報告書	
氏名	辻隆宏
所属大学名	福井大学
職位	助教
研究題目	脳内移行性の高いバソプレシン受容体(V1a/V1b)特異的アゴニスト開発の研究
研究の成果・進捗状況	<p>研究概要: バソプレシン受容体(V1a/V1b)特異的アゴニストをカルシウムイメージングにてスクリーニングを行う。その後、簡便な眼圧降下実験にて検証したのち、社会性行動障害を示す自閉症モデルマウスを用いて社会性改善効果を検討する。最後に、アゴニストの脳内移行性を視床下部バソプレシン(AVP)細胞の神経活動を指標に検証する。</p> <p>1) 共同開発先であるスカイシーファーマからいくつかの類縁AVPの提供を受け、in vitroのアッセイ系により、AVPアゴニストの受容体への特性を解析した。天然型AVP1に比べ、バソプレシン受容体(V1a)への親和性は高くないが、V1Bに対してはスーパーアゴニスト用に働く類縁体を同定した。</p> <p>2) AVP1には、眼圧下降効果作用があり、簡便に行える眼圧降下実験を行ったところ、天然型AVP1に比べ、上記類縁体は、眼圧降下作用が持続することがわかった。以上のことを踏まえ、論文投稿にむけ、追加実験を行っている。</p>
論文発表・学会発表等	

資料 5-2 6 大学から海外に向けた共同研究支援 報告書

Collaborative Research Report	
Name	Mohammad Shafiur Rahman
University/Organization	Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine
Position	Assistant Professor
Research Topic and Outline	<p>The association between unhealthy lifestyles and psychosocial problems: a comparative study among children aged 5-9 years in Bangladesh and Japan</p> <p>We are conducting a cross-sectional study among children aged 5-6 years in Bangladesh and Japan to explore the association of various unhealthy lifestyle factors including longer screen time, video game addiction, sleep problems, unhealthy dietary intake and lower levels of physical activity with psychosocial problems. The specific outcomes of interest are emotional problems, conduct problems, hyperactivity/inattention, peer problems and pro-social behavior. We are currently collecting data from 400 Bangladeshi children aged 5-6 years.</p>
Collaborative Research Activity	<p>We collaborated with Professor Dr. Abul Basher Miah, Director of Global Public Health Research Foundation (GPHRF), Bangladesh to implement this research project. His team obtained permission from the local authority, translated the questionnaire, and provided training to the assessors (data collectors). We already recruited 400 children from four unions of Alamdanga Upazilaa (sub-district) of Chuadanga district, Bangladesh, as well as obtained consent from parents of those children. However, the data collection work has been postponed due to the recent restriction on public movement due to Covid-19.</p>
Publication, Paper	None

共同研究支援報告書	
氏名	東田 陽博
所属大学名	金沢大学
職位	特任教授
研究題目	オキシトシン体内動態解析のための新しいELISA測定キットの作成
内容報告	<p>オキシトシンの鼻腔投与により、自閉スペクトラム症患者の社会性交流が増加する。抹消投与のオキシトシンが血管内皮細胞に存在する RAGE に依存して、脳内輸送されることを示した。一方、その濃度を正確に測定する方法が十分に確立されていないことに起因して、血中オキシトシン濃度の変化、体内動態など未解決の問題もある。そこで、われわれは、オキシトシンを抗原として、抗オキシトシンモノクローナル抗体を作成したので、これを使用し、信頼性の高い体外診断用 ELISA 測定キットを作成することとしたが、感度が低いことが判明した。今後、コニカミノルタが有する SPFS (Surface Plasmon field-enhanced Fluorescence Spectroscopy) 技術を用いたオキシトシン免疫測定法キットを開発することにした。一方、ELISA キットの有用性を確認するための、ロシアの国立クラスノヤルスク医科大学、韓国全州市国立全北大学、および北京大学深圳研究生院での濃度測定を計画したが、計画はコロナウイルス流行のため、実施できなかった。</p>
成果(論文発表等)	<p>A monoclonal antibody raised against a synthetic oxytocin peptide stains mouse hypothalamic neurones. Kogami Y, Tsuji T, Tsuji C, Yokoyama S, Furuhashi K, Lopatina O, Shabalova A, Salmina AB, Watanabe Y, Hattori T, Nishimori K, Kodama K, Higashida H. J Neuroendocrinol. 2020 Apr;32(4):e12815.</p>

共同研究支援報告書

氏名	西谷正太
所属大学名	福井大学
職位	特命助教
研究題目	アジア人脳・末梢組織間メチル化相関データベース(AMAZE-CpG)構築の為に日本人データベース作成
内容報告	<p>19年度から継続支援を受け、19年度には倫理申請の承認を得、また引き続き、他校複数の倫理委員会の承認も20年度に承認を得ることができ、研究遂行のための下地が整った。その上で、20年度は、13歳の小児の例も含む、合計15例から、脳、血液、唾液、頬粘膜の検体を得ることができた。また、この内、10例については、4種類の検体をイルミナEPICアレイによる85万箇所のメチル化解析を実施することができた。そこで、本研究の第一目的であるパブリック・データベース（AMAZE-CpG）のβ版に、近々、着手する予定である。また、当初予定になかったが、DNAメチル化は、発現量、遺伝子多型とも相互作用があるため、10例についてはRNAseqによる全トランスクリプトーム解析、ジャポニカアレイによるSNPアレイ（東北大学のデータインピュテーションサービスにより、全SNPに拡張予定）も行い、データベースのマルチオミクス化も検討する。</p>
成果(論文発表等)	

共同研究支援報告書	
氏名	辻知陽
所属大学名	金沢大学
職位	特任准教授（現RPD学術振興会特別研究員）
研究題目	自閉症モデルマウスを用いた自閉症主症状改善効果を持つ漢方薬のスクリーニング
内容報告	<p>自閉スペクトラム症の中核症状とされている社会性を改善するような薬剤はこれまで見つかっていない。そこで、申請者は、ASDモデル動物を作成し、社会性行動障害改善効果がある薬物・化合物のスクリーニングできる行動実験系を開発したいと考えた。抗てんかん薬のバルプロ酸(VPA)を妊娠12.5日目の母体に投与すると、生まれてくる仔は、社会性相互作用障害がおきることが報告されている。申請者は、このASDモデルマウスを用いて、社会性行動障害を検証できる行動パラダイムを雄(論文未報告)、及び発達期(Tsuji, et al, JNE, 2020)において確立することに成功している。</p> <p>広西中医薬大学のZhong博士と共に、このモデルマウスを用いて、社会性行動障害改善効果がある漢方薬を同定することを本研究の目的とする。</p>
成果(論文発表等)	<p>VPAに曝露された仔マウス(VPA マウス)の生後初期における超音波発声(USV)の発生頻度は、生後1週間までは対照群と同程度であったが、生後11日目にはより低下する。また、視床下部におけるオキシトシン(OT)系遺伝子の発現は、変化しており、生後11日目にOTを急性投与すると、VPAの仔の発声頻度が上昇することを明らかにした(Tsuji, et al, JNE, 2020)。今回、OT投与におけるUSVの質的変化について調べ、OTは、投与後約二時間でその効果が消失し、USVのパターンに対しても影響を与えることが明らかになった。特に、複雑なコンプレックスタイプのUSVがVPAマウスでは、割合が低く、OTによって、割合が上昇することが明らかになった。以上の結果をまとめ、現在論文投稿中である(in revise)。中国からの学生らには、上記実験系の解析に加わった。</p>



Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders

The 2nd International Symposium for CRNACDD 2021

Date and Time: 22nd (Fri.) January, 2021

11:00-14:00(JST), 9:00-12:00(WIB, ICT), 10:00-13:00 (MYT, PST)

Venue: Hankyu-Dentetsu Sanwa-Ginko Hall, Ichō-kaikan, Osaka
University and Zoom meeting (Hybrid meeting)

Participants: <Japan> Osaka University, Kanazawa University, Hamamatsu
University of Medicine, Chiba University, University of Fukui and
Hirosaki University
<Overseas> University of Malaya, Philippine Children's
Medical Center, Mahidol University and Universitas Indonesia

Zoom Info:

URL:

<https://zoom.us/j/95443443337?pwd=c0VLZGJMcWNTD1d6YTdXMEh3c0tDdz09>

Pass code: 606864 <For presenters, please join from your own notified Zoom
URL.>

Program

◆Opening Remarks: 11:00 (JST)

Makoto Sato, Professor, Dean of UGSCD, Osaka University

◆Annual Report 1: 11:05 -12:15

from each country about consortium collaborative research this year

Chair: *Shigeru Yokoyama, Professor, Kanazawa University*

<Japan> 11:05 -11:45

Annual Report from Japan

International NDDs, Registry, COVID-19, Sleep questionnaire

Presenter: Masaya Tachibana, Associate Professor, Osaka Univ.
Tomoka Yamamoto, Assistant Professor, Osaka Univ.
Shota Nishitani, Assistant Professor, Univ. of Fukui
Yoshihiro Hishitani, Assistant Professor, Osaka Univ.

<Univ. of Malaya> 11:45 -12:15

Annual Report from Malaysia

JSQ-P translation and validation research study

Presenter: Dr. Subhashini Jayanath, Senior Lecturer, UMMC

COVID-19 survey

Presenter: Dr. Aishah Ahmad Fauzi, Senior Lecturer, UMMC

[Break Time: 12:15-12:30]

◆Annual Report 2: 12:30 -13:30

Chair: Yoshiyuki Hirano, Professor, Chiba University

< Philippine Children's Medical Center > 12:30-12:50

Annual Report from Philippines

Update from Philippine Children's Medical Center

Presenter: Dr. Ermenilda Avendano, Chief- Child Neuroscience
Division, PCMC

<Mahidol University> 12:50-13:10

Annual Report from Thailand

Sleep questionnaire

Presenter: Dr. Lunliya Thampratankul, Associate Professor, Mahidol
Univ.

Dr. Jariya Chuthapisith, Associate Professor, Mahidol
Univ.

Dr. Natcha Lueangapapong, pediatric neurologist,
Mahidol

Univ.

<Universitas Indonesia> 13:10-13:30

Annual Report from Indonesia

International Clinical Registry on Neurodevelopmental Disorders,
comments and suggestions

Presenter: *Prof. Hardiono D. Pusponegoro, Universitas Indonesia*

Impact of the COVID-19 pandemic on children with
neurodevelopmental disorders

Presenter: *Dr. Amanda Soebadi, Universitas Indonesia*

Collaborative Sleep Study using Sleep Questionnaire for Preschoolers

Presenter: *Dr. Ivan Widjaja, Universitas Indonesia*

◆Discussion 13:30-13:55

<Discussion of Registry>

financial support, policy of data sharing, authorship, contents of
registration

Facilitator: *Masaya Tachibana, Associate Professor, Osaka Univ.*

Yoshihiro Hishitani, Assistant Professor, Osaka Univ.

<Discussion of proposal for new collaborative research>

(If there is any proposal from each facility, please show it.)

Facilitator: *Masaya Tachibana, Associate Professor, Osaka Univ.*

<Discussion of Memorandum of Understanding>

Facilitator: *Makoto Sato, Professor, Osaka Univ.*

◆Closing remarks: 13:55-14:00

Kazuhiko Nakamura, Professor, Hirosaki University



OSAKA UNIVERSITY

The 2nd International Symposium 2021
Collaborative Research Network for
Asian Children with Developmental Disorders

January 22nd, 2021

Annual Report from Japan

Masaya Tachibana MD., PhD.
United Graduate School of Child Development
OSAKA UNIVERSITY, JAPAN



UGSCD
連合小児発達学研究所



Collaborative Research Network for
Asian Children with
Developmental Disorders



OSAKA UNIVERSITY

Agenda



UGSCD
連合小児発達学研究所

- ◆ Covid-19 in Japan
- ◆ Collaborative Research Grant from CRNACDD
- ◆ Ongoing Collaborative Projects
 - ✓ Surveys related to COVID-19
 - ✓ Asian International Registry of NDDs (ANDy)
 - ✓ Sleep Questionnaire for Asian children



Collaborative Research Network for
Asian Children with Developmental Disorders

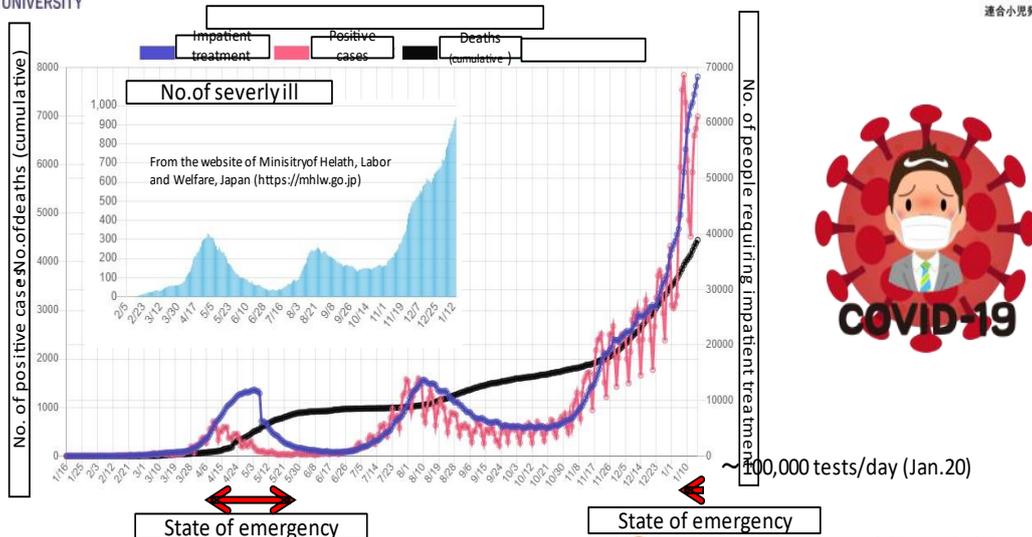


OSAKA UNIVERSITY

COVID -19 pandemic in Japan



UGSCD
連合小児発達学研究所



Modified from <https://stopcovid19.jp>



Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders



OSAKA UNIVERSITY

Collaborative Research Grant from CRNACDD



UGSCD
連合小児発達学研究所



👉 Call for proposals of collaborative projects with the researchers in Japan joining CRNACDD every fiscal year

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/en/index.html>

👉 Up to 150,000yen (~\$1,450) /project financial support from CRNACDD

👉 Application will open in March for FY2021



Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders



Collaborative Research Grant from CRNACDD Winners in FY2020



- **Subhashini Jayanath (Univ. of Malaya, Malaysia)** with Prof. Mohri (Osaka Univ.)
'Translation and validation of the Japanese Sleep Questionnaire for Preschoolers(JSQ -P) into English and Malay Language versions in a Malaysian context'
- **Junya Tanaka (Ehime Univ. Japan)** with Prof. Sato (Osaka Univ.)
'Trial for improving ASD/ADHD like behaviors in mice by inducing synaptic pruning by microglia'
- **Hsiu-Lan Shelley Tien (National Taiwan Normal University, Taiwan)** with Prof. Shimizu and Prof. Urao (Chiba Univ.)
'Cognitive behavioral therapy -based anxiety prevention program, 'Journey of the Brave' for Taiwanese children'
- **Takahiro Tsuji (Univ.of Fukui, Japan)** with Prof. Yokoyama and Prof. Tsuji (Kanazawa Univ.)
'Development of vasopression receptors (V1a/V1b) specific agonists with high central transportation property.'



Ongoing Collaborative Projects



- **Surveys related to COVID-19**
Tomoka Yamamoto, Osaka Univ.
Shota Nishitani, Univ. of Fukui
- **Asian International Registry of NDDs (ANDy)**
Yoshihiro Hishitani, Osaka Univ.
- **Sleep Questionnaire for Asian children**
Ping Su, Ikuko Mohri, Osaka Univ.



(CRNCDD the 2nd International Meeting)

Asian Neurodevelopmental Disorders Registry (ANDy)

United Graduate School of Child Development

OSAKA UNIVERSITY

Yoshihiro HISHITANI M.D., Ph.D.

Objective of the registry

- There are genetic, ethnic, and cultural differences behind neurodevelopmental disorders.
- Large-scale data accumulation and multi-institutional joint research in Asia are necessary.
- The registry will accumulate information that can be a basis for large-scale collaborative research in Asia.
- The accumulated information will be used to analyze morbidity and ethnic and cultural factors, as well as to provide basic information for further epidemiological studies and clinical trials.

UGSCD
United Graduate School of
Child Development

Mahidol University
Dr. Lunliya Thampratankul
Dr. Jariya Chuthapisith

Philippine Children's Medical Center
Dr. Ermenilda L. Avendaño
Dr. Marilyn Ortiz

University of Malaya
Dr. Norhamizan Hamzah
Dr. Subhashini Jayanath
Dr. Aishah Ahmad Fauzi
Dr. Aida Syarinaz Ahmad Adlan

University of Indonesia
Dr. Hardiono Puspongoro
Dr. Amanda Soebadi
Dr. Ivan Widjaja

Asian
Neurodevelopmental
Disorders
Registry

ANDy

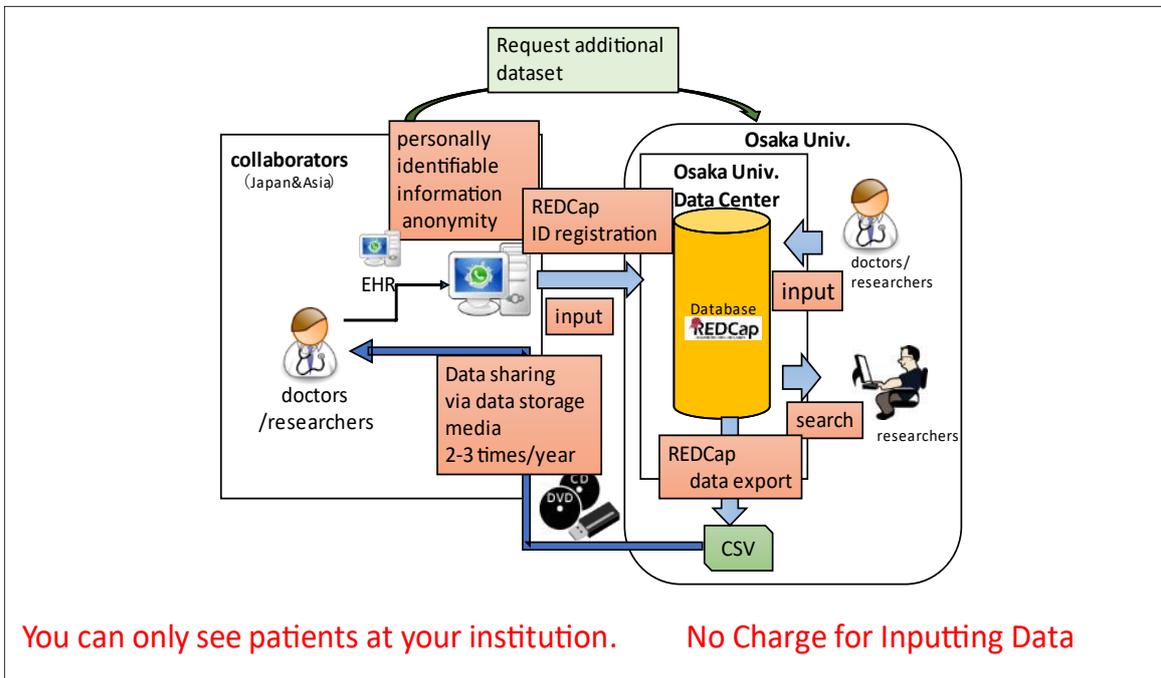
About REDCap

- ✓ REDCap is a secure web application for building and managing online surveys and databases, developed by Vanderbilt University, USA.
- ✓ Osaka University is licensed to use REDCap.
- ✓ Able to add data to the database from all over the world, even from your smartphone.

REDCap
Research Electronic Data Capture

Institutions	Countries	Projects	Users	Articles
4798	141	1.1M	1.6M	12.6k

<https://www.project-redcap.org/>



Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders

Project Home

Logged in as his-y@umin.ac.jp
Log out

My Projects
Project Home
REDCap Messenger
Project status: Development

Data Collection

- Record Status Dashboard - View data collection status of all records
- Add / Edit Records - Create new records or edit/view existing ones

Show data collection instruments

Applications

- Data Exports, Reports, and Stats
- Data Import Tool
- Field Comment Log
- File Repository
- Data Quality

Help & Information

- Help & FAQ
- Video Tutorials
- Suggest a New Feature
- Contact REDCap administrator

Quick Tasks

- Codebook** - The Codebook is a human-readable, read-only version of the project's Data Dictionary and serves as a quick reference for viewing field attributes.
- Create a report** - Build custom reports for quick views of your data, and export reports to Excel/CSV.
- Check data quality** - Build or execute data quality rules to find discrepancies and errors in your project data.

Project Dashboard

The tables below provide general dashboard information, such as a list of all users with access to this project, general project statistics, and upcoming calendar events (if any).

Current Users (12)	
User	Expires
hirosawa@staff.kar (Tetsu Hirosawa)	never
hiroyuki.araki@dmi (hiroyuki araki)	never
his-y@umin.ac.jp (Yoshihiro Hishitani)	never
hishitani@kokoro.n (Yoshihiro Hishitani)	never
lumpei-t@chiba-u.jp	

Project Statistics	
Records in project	Total: 5 / In group: 0
Most recent activity	2021/01/19 10:20
Space usage for docs	0.08 MB

Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders

Add / Edit Records

You may view an existing record/response by selecting it from the drop-down lists below. To create a new record/response, click the button below.

NOTICE: This project is currently in Development status. Real data should NOT be entered until the project has been moved to Production status.

Total records: 5 / In group: 0

Choose an existing Study ID

(CAUTION)
You cannot enter personally identifiable information into the REDCap system.
→ You must make a connectable anonymization correspondence table at each institution.

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/record_home.php?pid=1400&id=2930-1&auto=1&arm=1

REDCap Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders

Record "2930-1" is a new Study ID. To create the record and begin entering data for it, click any gray status icon below.

The grid below displays the form-by-form progress of data entered for the currently selected record. You may click on the colored status icons to access that form/event.

Legend for status icons:

- Incomplete
- Incomplete (no data saved) ?
- Unverified
- Many statuses (all same)
- Complete
- Many statuses (mixed)

NEW Study ID 2930-1

Data Collection Instrument	Status
Demographics	⊖
Circumstances	⊖
Diagnosis	⊖
Past history, Underlying disease and Comorbidities	⊖
Family History	⊖
Drugs	⊖
Wechsler Intelligence Scale	⊖
Kyoto Scale of Psychological Development	⊖
Tanaka-Binet Intelligence Scale	⊖
Ados2	⊖
Cbcl (4-18y)	⊖
Cbcl (2-3y)	⊖
M-CHAT	⊖
Vineland-II	⊖
Conners3	⊖
ADI-R	⊖
CARS2	⊖
Bayley-III	⊖
MRI	⊖
EEG	⊖
Laboratory Data	⊖
Completion Data	⊖

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/record_home.php?pid=1400&id=2930-1&auto=1&arm=1

Study ID 2930-1

Legend for status icons:

- Incomplete
- Incomplete (no data saved) ?
- Unverified
- Many statuses (all same)
- Complete
- Many statuses (mixed)

Data Collection Instrument	Status
Demographics	⊖
Circumstances	⊖
Diagnosis	⊖
Past history, Underlying disease and Comorbidities	⊖
Family History	⊖
Drugs	⊖
Wechsler Intelligence Scale	⊖
Kyoto Scale of Psychological Development	⊖
Tanaka-Binet Intelligence Scale	⊖
Ados2	⊖
Cbcl (4-18y)	⊖
Cbcl (2-3y)	⊖
M-CHAT	⊖
Vineland-II	⊖
Conners3	⊖
ADI-R	⊖
CARS2	⊖
Bayley-III	⊖
MRI	⊖
EEG	⊖
Laboratory Data	⊖
Completion Data	⊖

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/index.php?pid=1400&id=2930-1&event_id=8219&page=demographics&auto...

My Projects
Project Home
REDCap Messenger
Project status: Development

Data Collection
Record Status Dashboard
Add / Edit Records
Study ID 2930-1
Demographics

Demographics

Adding new Study ID 2930-1

Study ID: 2930-1

Institution: * must provide value

Local ID: * must provide value
Not ID for charts

Date of birth: Today Y-M-D * must provide value

Cultural Backgrounds: * must provide value

- Japanese
- Korean
- Chinese
- Taiwan
- Malays
- Philippines
- Thai
- Javanese
- Indian
- Tagalog
- Sundanese
- Visayan
- others
- Unknown / Not Reported

Sex: Female Male reset

Birth Order:

Save & Exit Form
Save & ...
-- Cancel --

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/index.php?pid=1400&id=2930-1&event_id=8219&page=demographics&auto...

Laboratory Data
Completion Data

Applications
Data Exports, Reports, and Stats
Data Import Tool
Field Comment Log
File Repository
Data Quality

Help & Information
Help & FAQ
Video Tutorials
Suggest a New Feature
Contact REDCap administrator

Demographics

Birth Order:

Dominant hand: right left both undeter Unknown reset

Maternal birth date: Today Y-M-D

maternal age at birth: Not necessary if the date is identified

Paternal birth date: Today Y-M-D

paternal age at birth: Not necessary if the date is identified

fetus week number: (weeks)

birth weight: (g)

Route of delivery: Transvaginal delivery Caesarean section reset

Perinatal abnormalities?: Yes No reset

Comments: Expand

Save & Exit Form
Save & ...
-- Cancel --

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/index.php?pid=1400&id=2930-1&event_id=8219&page=demographics&auto...

Contact REDCap administrator

fetus week number (weeks) Save & Exit Form Save & ... --Cancel--

birth weight (g)

Route of delivery Transvaginal delivery Caesarean section reset

Perinatal abnormalities? Yes No reset

Maternal perinatal abnormalities?
 Proteinuria
 Edema
 Hypertension
 Threatened abortion
 Threatened premature labor
 Hyperemesis
 Other diseases

Neonatal perinatal abnormalities?
 Neonatal distress
 Umbilical cord coiling
 Jaundice
 Amniotic fluid opacity
 Respiratory abnormalities
 Hypoglycemia
 Other Neonatal abnormalities

Comments

Expand

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/index.php?pid=1400&id=2930-1&event_id=8219&page=circumstances&auto...

Record Status Dashboard - View data collection status of all records

Add / Edit Records - Create new records or edit/view existing ones

Study ID 2930-1 Select other record

Data Collection Instruments:

- Demographics
- Circumstances**
- Diagnosis
- Past history, Underlying disease and Comorbidities
- Family History
- Drugs
- Wechsler Intelligence Scale
- Kyoto Scale of Psychological Development
- Tanaka-Binet Intelligence Scale
- Ados2
- Cbcl (4-18y)
- Cbcl (2-3y)
- M-CHAT
- Vineland-II
- Conners3
- ADI-R
- CARS2
- Bayley-III
- MRI
- EEG
- Laboratory Data
- Completion Data

Applications

- Data Exports, Reports, and Stats
- Data Import Tool
- Field Comment Log

Study ID 2930-1

Date about circumstances Today Y-M-D Save & Exit Form Save & ... --Cancel--

Parents' Marital Status
 With both biological parents (including law marriage)
 Single (divorced)
 Single (Unmarried)
 Remarried
 Without parents (e.g. facility, grandparents) reset

Maternal Education

Maternal Occupation
 Not Educated
 Elementary School Dropout
 Elementary School Graduate
 Junior High School Graduate
 High School Dropout
 High School Graduate
 College Dropout or Junior college (or Vocational School) graduate
 College Graduate
 Over Master Course Graduate

Paternal Education

Paternal Occupation

Number of Siblings * must provide value Including the patient

Form Status

Complete? Incomplete Save & Exit Form Save & ... --Cancel--

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/index.php?pid=1400&id=2930-1&event_id=82198&page=circumstances&auto...

Study ID: 2930-1

Date about circumstances: [Today] Y-M-D

Parents' Marital Status:

- With both biological parents (including law marriage)
- Single (divorced)
- Single (Unmarried)
- Remarried
- Without parents (e.g. facility, grandparents)

Maternal Education: [Dropdown]

Maternal Occupation: [Dropdown]

- Without work (e.g. Housewife)
- Administrative and managerial workers
- Professional and engineering workers
- Clerical workers
- Sales workers
- Service workers
- Security workers
- Agriculture, forestry, and fishery workers
- Manufacturing process workers
- Transport and machine operation workers
- Construction and mining workers
- Carrying, cleaning, packaging, and related workers
- Workers not classifiable by occupation

Paternal Education: [Dropdown]

Paternal Occupation: [Dropdown]

Number of Siblings: [Dropdown] * must provide value

Form Status: [Dropdown]

Complete?: [Dropdown]

Save & Exit Form, Save & ..., -- Cancel --

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/index.php?pid=1400&id=2930-1&event_id=82198&page=circumstances&auto...

Paternal Education: [Dropdown]

Paternal Occupation: [Dropdown]

Number of Siblings: 3 * must provide value

- Including the patient

Sibling 1's sex: Female Male * must provide value

Sibling 1's birth date: [Today] Y-M-D

Sibling 1's age: [Dropdown]

- Not necessary if the date is identified

Sibling 2's sex: Female Male * must provide value

Sibling 2's birth date: [Today] Y-M-D

Sibling 2's age: [Dropdown]

- Not necessary if the date is identified

Form Status: [Dropdown]

Complete?: Incomplete

Save & Exit Form, Save & ..., -- Cancel --

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/index.php?pid=1400&page=diagnosis&id=2930-1&event_id=8219

My Projects
Project Home
REDCap Messenger
Project status: Development

Data Collection
Record Status Dashboard
Add / Edit Records
Study ID 2930-1

Diagnosis

Editing existing Study ID 2930-1

Study ID: 2930-1

visit date: 2021-01-19

Diagnosis (check all that apply)

- Autism spectrum disorder
- Attention-deficit/hyperactivity disorder
- Intellectual disability (Intellectual developmental disorder)
- Specific learning disorder
- Developmental coordination disorder
- Communication disorders
- Tic Disorders
- Obsessive-Compulsive and Related Disorders
- Depressive Disorders
- Anxiety Disorders
- Sleep-Wake Disorders
- Reactive Attachment Disorder
- PTSD
- Oppositional Defiant Disorder
- Conduct Disorder
- Other
- Undefined
- Normal Development

Coexisting Problems ?

- Abuse
- Bullying
- Truancy
- Domestic violence

Save & Exit Form
Save & ...
-- Cancel --

Collaborative Research Network

rdc01.dcc.med.osaka-u.ac.jp/redcap/redcap_v8.10.20/DataEntry/index.php?pid=1400&page=diagnosis&id=2930-1&event_id=8219

Vineland-II
Conners3
ADI-R
CARS2
Bayley-III
MRI
EEG
Laboratory Data
Completion Data

Applications
Data Exports, Reports, and Stats
Data Import Tool
Field Comment Log
File Repository
Data Quality

Help & Information
Help & FAQ
Video Tutorials
Suggest a New Feature
Contact REDCap administrator

Undefined
Normal Development

Certainty of diagnosis (ASD)

ASD-diagnosis

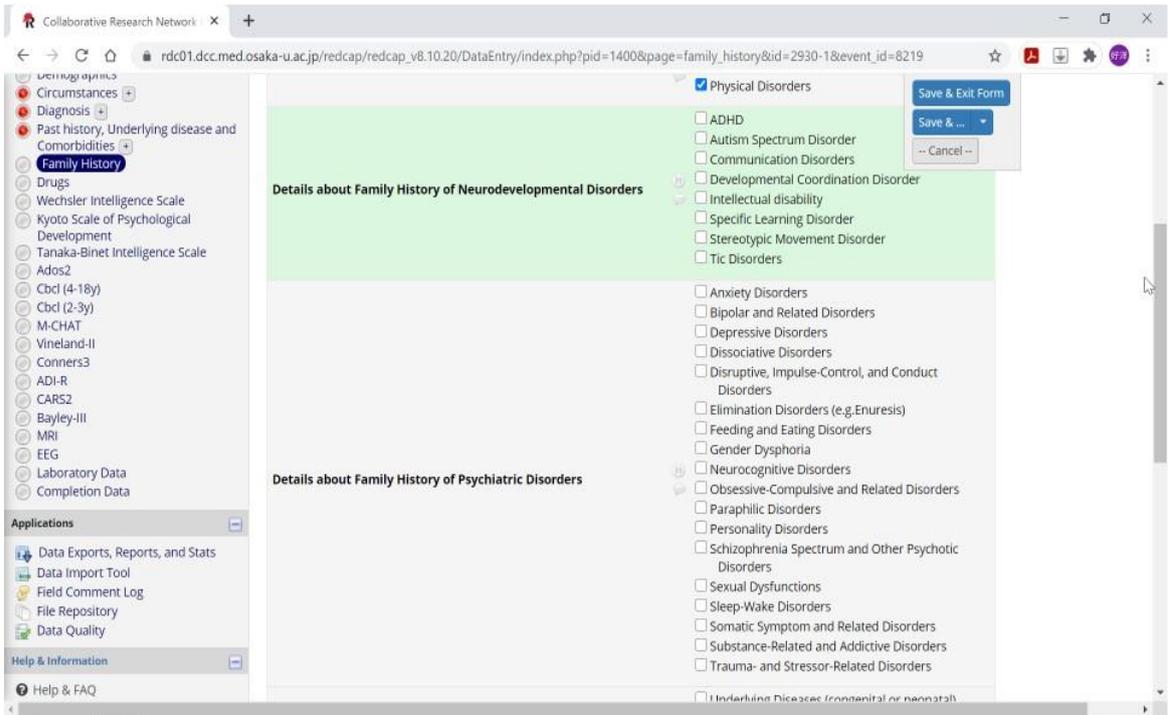
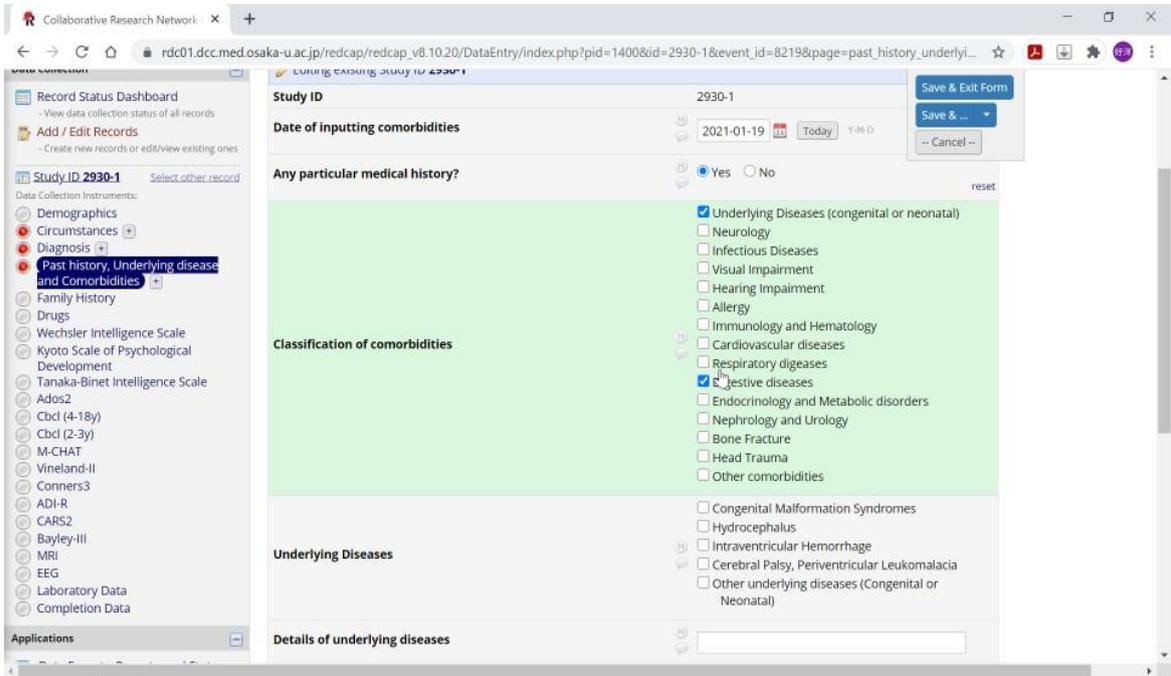
Severity of ASD (social communication)

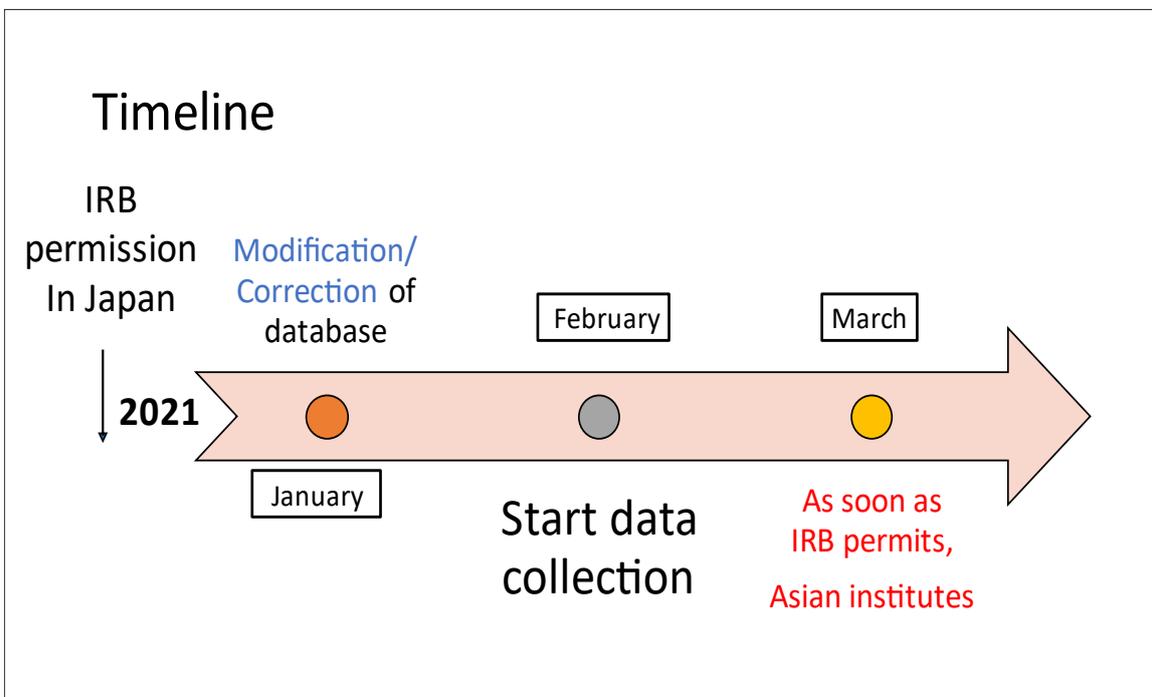
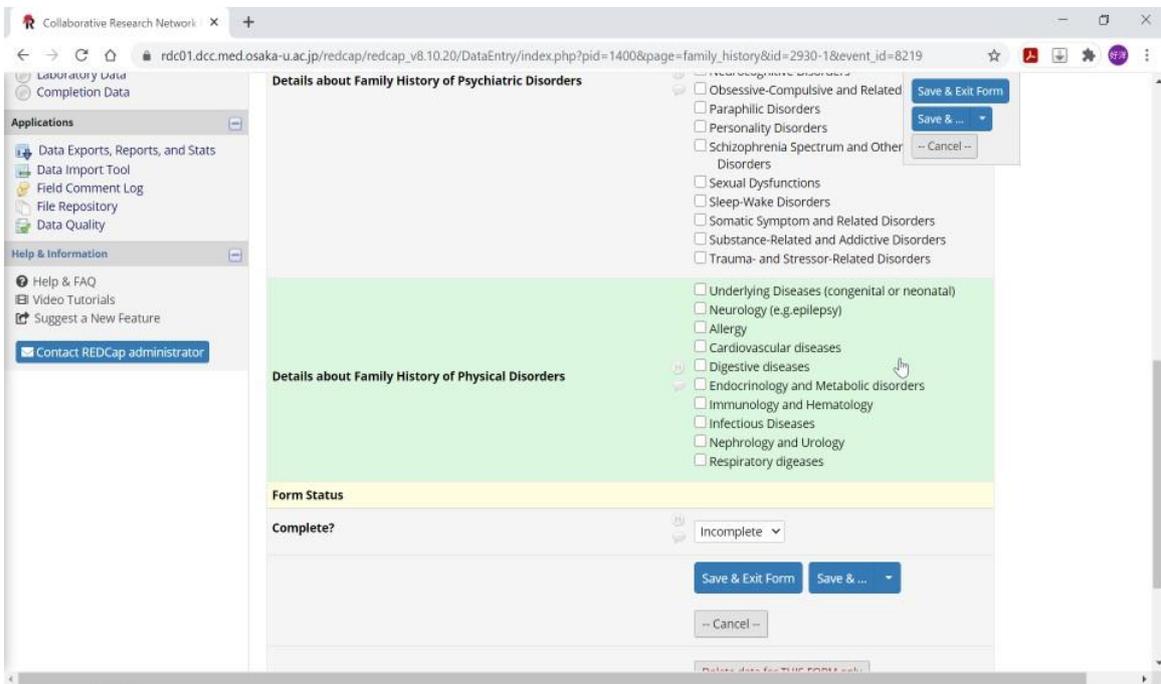
Severity of ASD (restrictive repetitive behavior)

Coexisting Problems ?

- Abuse
- Bullying
- Truancy
- Domestic violence
- Game or media dependence
- sexual deviance

Save & Exit Form
Save & ...
-- Cancel --





What I want you to do

- Please tell me who to register (the researchers, not the person who will do the input work) and their E-mail addresses.

(CAUTION) Free or commercial email addresses can NOT be used.

Email addresses issued by universities are preferred.

- After registration, E-mail from REDCap system will be sent to you automatically. So please activate your account following the E-mail
- And please try inputting temporary data, and could you tell me if there are any points to be modified, added or changed.
- After IRB permission, you can start inputting real data.

2021（令和 3）年度 文部科学省共通政策課題事業
「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」
海外共同研究支援 支援プロジェクトの募集について

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所，同研究所附属子どものこころの分子統御機構研究センター，金沢大学子どものこころの発達研究センター，浜松医科大学子どものこころの発達研究センター，千葉大学子どものこころの発達教育研究センター，福井大学子どものこころの発達研究センター並びに弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センターで連携して実施する文部科学省共通政策課題事業「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」では，6 大学内だけでなく，広く国内，海外の研究者・研究施設が，子どものこころを健やかに育てることを目指して行う多施設に依る共同研究の場として中核的役割を果たし，全国の研究者の要請に応えることを目指しております。

そのため，大阪大学連合小児発達学研究所の構成 5 大学及び弘前大学のこころの発達研究センターにおいて現在進行中もしくは今後行われる国際化を目指した研究に対し，これを支援します。

募集要項

1. 募集テーマ

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所，研究科構成大学のこころの発達研究センター（大阪大学は子どものこころの分子統御機構研究センター，千葉大学は子どものこころの発達教育研究センター），および弘前大学子どものこころの発達研究センターにおいて実施する，特にアジアに向けた国際化を目指す臨床研究もしくは基礎研究。現在進行中のものでも，今後実施する予定のものでも良い。

2. 応募資格者

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所，研究科構成大学のこころの発達研究センター（大阪大学は子どものこころの分子統御機構研究センター，千葉大学は子どものこころの発達教育研究センター），および弘前大学子どものこころの発達研究センターに所属する，教員，大学院生，研究員等。

3. 応募方法

所定の申請書（様式1）に必要事項を記載して、下記申請書提出先に E メールに添付してご提出ください。

4. 申請書提出期限

2021（令和3）年5月14日（金）17時必着

5. 申請書提出先

大阪大学大学院連合小児発達学研究科

共同研究推進・国際ハブ化推進部会担当 橘 雅弥（大阪大学）

拠点化基盤推進部会担当：土屋賢治（浜松医科大学）

E-mail：kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

電話 06-6879-3863

住所 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2

6. 支援基準

応募いただいた提案は以下の基準を以って評価し、支援の可否を決定します。

- (ア) 連合小児発達学研究科および6大学の子どものこころの研究センターで行っている子どものこころの発達研究をさらに飛躍させるものであること
- (イ) 国際化（特にアジア地域）の視点を持った研究であること
- (ウ) 倫理的に問題のない研究であること
- (エ) 本事業の主旨にかなう内容であること
- (オ) 2021（令和3）年度中に支援を受けた額の執行が可能であること

7. 採否

採否は、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業共同研究推進・国際ハブ化推進部会および拠点化基盤推進部会で審議決定し実行委員会で承認後、申請者へ直接通知します。

8. 支援内容

研究に必要な備品等購入費、海外との連携のための旅費などを支援します。今年度は5~6件について1件につき上限15万円までの支援を予定しています。

9. 研究報告会での発表

研究代表者には、研究の進捗状況や成果について、年度末に開催する研究報告会にてご報告いただきます。詳細については、採択後お知らせします。

10. 研究報告書の提出

研究代表者は、令和3年度の研究成果をA4版2-3枚程度にまとめ、2022（令和4）年4月30日までに「12. 報告書提出先」へ提出してください。

報告書の著作権は公衆送信権を含めて「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業を実施している各大学の子どものこころの研究センター（大阪大学連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター、金沢大学子どものこころの発達研究センター、浜松医科大学子どものこころの発達研究センター、千葉校大学子どものこころの発達教育研究センター、福井大学子どものこころの発達研究センター並びに弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター）に帰属いたしますので、ご了承ください。

※報告書の記載方法などについては、後日連絡します。

11. 前年度採択者の再申請

前年度に本支援を受けている場合にも、次年度に改めて研究支援への応募ができます。他の申請と同様に、厳正な審査を行い、再度採択された場合には、次年度にも継続して研究支援を受けることができます

12. 報告書提出先（問い合わせ先）

大阪大学大学院連合小児発達学研究科

共同研究推進・国際ハブ化推進部会担当 橘 雅弥（大阪大学）

拠点化基盤推進部会担当：土屋賢治（浜松医科大学）

e-mail：kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

電話：06-6879-3863（平日 9時~17時）

住所：〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-2

2021（令和3）年度 文部科学省共通政策課題事業
「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」との
共同研究支援 公募要領

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所、同研究所附属子どものこころの分子統御機構研究センター、金沢大学子どものこころの発達研究センター、浜松医科大学子どものこころの発達研究センター、千葉大学子どものこころの発達教育研究センター、福井大学子どものこころの発達研究センター並びに弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センターで連携して実施する文部科学省共通政策課題事業「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」は、国立大学法人のなかで唯一、複数の大学が連合し、「科学的視点を持って子どものこころを健やかに育てる」ための教育研究拠点です。

本事業では、上記6大学内だけでなく、広く国内、海外の研究者・研究施設が、子どものこころを健やかに育てることを目指して行う多施設に依る共同研究の場として中核的役割を果たし、国内外の研究者の要請に応えることを目指しております。

そのため、大阪大学連合小児発達学研究所の構成5大学及び弘前大学のこころの発達研究センターにおいて蓄積されたリソースや設備を活用して、研究者が広く、連合小児発達学研究所および弘前大学と共同し実施する研究を公募し、支援します。

公募事項

1. 募集テーマ

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所、研究科構成大学のこころの発達研究センター（大阪大学は子どものこころの分子統御機構研究センター、千葉大学は子どものこころの発達教育研究センター）、及び弘前大学子どものこころの発達研究センターにおいて実施する、子どものこころに関する臨床研究・介入研究・基礎研究に関連するテーマ。

- (1) 計画共同研究：6大学の持つ共通リソースや設備を活用した下記テーマに関する共同研究を募集します。本年度の各受け入れ研究者の研究内容の詳細については各大学のホームページを参照してください。

研究テーマ

テーマ1 脳とこころの表現型

(研究内容) 神経発生、発達とその障害の分子メカニズム、ゲノム・エピゲノム・オ

<p>ミクス研究, 神経病理・神経薬理, 発達と発達障がいのあるあわれ・症候論など</p> <p>(事業側受入れ研究者)</p> <p>佐藤 真 教授 (大阪大学), 片山泰一 教授 (大阪大学), 横山 茂 教授 (金沢大学), 松崎秀夫 教授 (福井大学), 中村和彦 教授 (弘前大学), 橘 雅弥 特任准教授 (大阪大学), 岡雄一郎 講師 (大阪大学), 吉村武 講師 (大阪大学), 三好耕助教 (大阪大学), 早田敦子 助教 (大阪大学), 謝 敏瑛(ビンカク) 助教 (福井大学)</p>
<p>テーマ2 こころの育ちとその支援</p> <p>(研究内容) 子育て支援, ペアレントトレーニング, 地域・学校支援, 虐待, 出生コホート研究, 認知行動療法, ことばとコミュニケーション, 子どもの眠りと育ちなど</p> <p>(事業側受入れ研究者)</p> <p>友田明美 教授 (福井大学), 清水栄司 教授 (千葉大学), 毛利育子 准教授 (大阪大学), 藤野陽生 准教授 (大阪大学), 高橋芳雄 准教授 (弘前大学), 足立匡基 准教授 (弘前大学), 西村倫子 特任講師 (浜松医科大学), 浦尾悠子 特任講師 (千葉大学), 山本知加 助教 (大阪大学), 吉崎亜里香 特任助教 (大阪大学), 石井篤子 特任助教 (大阪大学), 田中早苗 特任助教 (金沢大学), 久能 勝 特任助教 (千葉大学)</p>
<p>テーマ3 子どものこころの計測とその基盤</p> <p>(研究内容) 脳画像 (MEG, MRI), 睡眠, 視線, 発達と発達障がいのバイオマーカー, 評価尺度開発, 機械学習と人工知能, 子どものこころ研究の ELSI (ethical, legal and social issues) など</p> <p>(事業側受入れ研究者)</p> <p>谷池雅子 教授 (大阪大学), 土屋賢治 特任教授 (浜松医科大学), 平野好幸 教授 (千葉大学), 下野九理子 准教授 (大阪大学), 丁ミンヨン 特命講師 (福井大学), 池田尊司 助教 (金沢大学)</p>

- (2) 一般共同研究：事業主体 6 大学外部の研究者からの自由な提案により，連合小児発達学研究科または 6 大学の子どものこころの研究センター所属の研究者と共同で行う子どものこころに関する研究を募集します。共同研究者には事業主体側の研究者（特任助教以上）を 1 名以上必ず含むようにしてください。6 大学による研究内容および研究者については，下記ホームページを参照してください。

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学
研究科

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/>

大阪大学連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター

<http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/kokoro/>

金沢大学子どものこころの発達研究センター

<http://kodomokokoro.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

浜松医科大学子どものこころの発達研究センター

<http://www.rccmd.org/>

千葉大学子どものこころ発達教育研究センター

<http://www.m.chiba-u.ac.jp/class/rccmd/>

福井大学子どものこころの発達研究センター

<http://www.med.u-fukui.ac.jp/CDRC/welcome.html>

弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター

<http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~kodomono/>

2. 申請資格者

日本国内および海外の大学並びに研究機関，または公的医療機関に所属する教員・研究者・医師・コメディカル

3. 研究期間

採択日から 2022（令和 4）年 3 月 31 日まで（次年度の再申請による延長可）

4. 申請方法

申請書の様式は，上記 連合小児発達学研究所ホームページ，事業主体 6 大学の子どものこころのセンターホームページ，または以下の事業ホームページよりダウンロードして取得して下さい。

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/index.html>

本研究支援を希望される方は，募集テーマの受入教員（連合小児発達学研究所・子どものこころの発達研究センター所属）と研究課題，研究計画，必要経費等について事前に打ち合わせを行ったうえ，申請して下さい。

研究分野・所属教員・研究の概要等は，以下のホームページをご覧ください。

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/access/>

適当な受け入れ教員が見つからない場合や，希望の受入教員との事前打ち合わせについての調整を希望される場合は，6. 申請書提出先に記載された担当までご連絡ください。

作成した申請書は，e-mail または郵送にて 「6. 申請書提出先」に記載の提出先に提出して下さい。

5. 申請書提出期限

2021（令和 3）年 5 月 14 日（金）17 時必着

6. 申請書提出先

大阪大学大学院連合小児発達学研究科

共同研究推進・国際ハブ化部会担当：橋 雅弥（大阪大学，特任准教授）

拠点化基盤推進部会担当：土屋賢治（浜松医科大学，特任教授）

E-mail：kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

電話 06-6879-3863

住所 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2

7. 採択基準

応募いただいた提案は以下の基準を以って評価し、採否を決定します。

- (ア) 連合小児発達学研究科および 6 大学の子どものこころの研究センターで行っている子どものこころの発達研究をさらに飛躍させるものであること
- (イ) 研究実現の可能性が高く、研究の中で子どものこころのセンターが果たす役割が明確であること
- (ウ) 国際化の視点を持った研究であること
- (エ) 先端的もしくは社会への還元・貢献が期待できる研究であること
- (オ) 本事業の趣旨にかなう内容であること
- (カ) 倫理的な問題のない研究であること

※事業の趣旨については、下記の HP を参照してください。

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/index.html>

8. 採否

(1)計画共同研究，(2)一般共同研究を合わせて5件程度の採択を予定しています。

共同研究の採否は、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業 共同研究推進・国際ハブ化推進部会および拠点化基盤推進部会で審議決定し、本事業実行委員会で承認後、申請者へ直接通知します。

9. 研究経費

1件につき15万円を上限として、共同研究に必要な研究経費について、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業で負担します。必要な研究経費のうち、支援可能な項目は、共同研究にかかわる旅費、および事業側が支出に同意した物品購入費とします。

10. 遺伝子組み換え実験，動物実験，ヒト及びヒトから得られた標本を対象とする研究，ヒトへの介入研究，ヒトゲノム・遺伝子解析研究等

研究において遺伝子組み換え実験，動物実験等を6大学で実施する場合，またヒトから得られた標本を用いた研究，ヒトへの介入研究，ヒトゲノム・遺伝子を扱う研究等では，

研究の遂行にあたって、6大学において申請手続きや倫理審査・承認が必要となります。

11. 研究報告会での発表

共同研究代表者には、研究の進捗状況や成果について、年度末に開催する研究報告会にてご報告いただきます。詳細については、採択後にお知らせします。

12. 共同研究報告書の提出

研究代表者は、令和3年度の研究成果をA4版2-3枚程度にまとめ、2022（令和4）年4月30日までに、「6. 申請書提出先」へ提出してください。

報告書の著作権は公衆送信権を含めて「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業を実施している各大学の子どものこころの研究センター（大阪大学連合小児発達学研究所附属子どものこころの分子統御機構研究センター、金沢大学子どものこころの発達研究センター、浜松医科大学子どものこころの発達研究センター、千葉校大学子どものこころの発達教育研究センター、福井大学子どものこころの発達研究センター並びに弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター）に帰属いたしますので、ご了承ください。

※報告書の記載方法などについては、後日連絡します。

13. 論文の提出

本共同研究の成果を論文として発表される場合には、謝辞として「文部科学省共通政策課題事業子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装事業との共同研究による」旨の文章を記載してくださることをお願いいたします。その際、別刷り1部を「6. 申請書提出先」へ提出してください。

14. 知的財産権の取り扱い

大阪大学共同研究規程を準用します。

http://www.osaka-u.ac.jp/jp/about/kitei/reiki_honbun/u035RG00000471.html

15. 事故対応等

共同研究が採択され、学生が参画する場合は、「学生教育研究災害障害保険」等に必ず加入し、所属機関の助教以上の教員、もしくは、連合小児発達学研究所、各大学の子どものこころの研究センター及び弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの研究センターの教員の監督下にて実験等を実施してください。

16. 前年度採択者の再申請

前年度に本事業での共同研究に対する支援を受けている場合にも、次年度に改めて共同

研究申請を行うことができます。他の申請と同様に、厳正な審査を行い、再度採択された場合には、次年度にも継続して共同研究支援を受けることができます。

17. 問い合わせ先

大阪大学大学院連合小児発達学研究科

共同研究推進・国際ハブ化部会担当：橘 雅弥（大阪大学，特任准教授）

拠点化基盤推進部会担当：土屋賢治（浜松医科大学，特任教授）

E-mail：kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

電話 06-6879-3863

住所 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2

Information and Call for Collaborative Research Partners for FY2021
With the Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders
Under MEXT Policy Initiative

The Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders is a unique initiative among national universities in Japan. It is an education research network set up by several national universities that have come together to promote mental health in children, with a scientific focus. This is a project initiative of the Japanese Government's Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). Participating universities and centers are Osaka University United Graduate School of Child Development, Osaka University, Kanazawa University, Hamamatsu University School of Medicine, Chiba University and University of Fukui ("UGSCD"), Molecular Research Center for Children's Mental Development, United Graduate School of Child Development, Osaka University, Research Center for Child Mental Development, Kanazawa University, Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine, Research Center for Child Mental Development, Chiba University, Research Center for Child Mental Development, University of Fukui, and Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine.

The project goes beyond the bounds of the six academic institutions named above. The Network is to play a key role as a hub for collaborative research aimed at promoting the mental health of children, with participation from other Japanese and non-Japanese institutions, international researchers and research centers around the globe. The Network aims to respond to the requests and needs of Japanese as well as international researchers.

To this end, the Network is calling for research partners who will work in collaborative research with the five universities that comprise UGSCD and the Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine. The collaboration will utilize the resources and facilities that have been acquired and created at these centers and research support and funding will be made available. Potential research partners from far and wide are invited to apply to undertake collaborative research.

General Information for Applicants

1. Research Topic

The research topic for application should be relevant to clinical/ interventional/ basic researches on child mental development conducted at UGSCD, the research centers of Network member institutions (The center at Osaka University will be Molecular Research Center for Children's

Mental Development, United Graduate School of Child Development, Osaka University, and the center at Chiba University will be Research Center for Child Mental Development, Chiba University), and the Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine.

(1) Planned collaborative project

Collaborative projects which will utilize the resources and facilities that have been acquired and created at Osaka University UGSCD and 6 centers of the participating universities in Japan. The collaborative research theme and the collaborator(s) from the 6 universities in the Network in 2021 will be selected from the list below. For the details of each research topic and researcher, please refer to the websites of UGSCD and 6 centers.

List of research topics

<i>Theme 1 Brain and behavioral phenotypes in children and adolescents</i>
(Topics) Neurogenesis; Molecular mechanisms of mental development/disorders; Genomics / epigenomics / other omics studies; Neuropathology; Neuropharmacology; Phenotypes and symptomatology of normal/abnormal mental development, etc.
(Collaborative researchers from the Network in 2021) SATO Makoto (Professor, Osaka U), KATAYAMA Taiichi (Professor, Osaka U), YOKOYAMA Shigeru (Professor, Kanazawa U), MATSUZAKI Hideo (Professor, Fukui U), NAKAMURA Kazuhiko (Professor, Hirosaki U), TACHIBANA Masaya (Assoc. Professor, Osaka U), OKA Yuichiro (Assoc. Professor, Osaka U), YOSHIMURA Takeshi (Assoc. Professor, Osaka U), XIE Min-Jue (Assist. Professor, U Fukui), MIYOSHI Ko (Assist. Professor, Osaka U), HAYATA-TAKANO Atsuko (Assist. Professor, Osaka U), XIE Min-Jue (Assist. Professor, U Fukui)
<i>Theme 2 Mental development and support for development</i>
(Topics) Parenting support and interventions; Regional childcare / school support; Child abuse; Birth cohort study; Cognitive behavioral therapy; Language and communication, etc.
(Collaborative researchers from the Network in 2021) TOMODA Akemi (Professor, U Fukui), SHIMIZU Eiji (Professor, Chiba U), MOHRI Ikuko (Assoc. Professor, Osaka U), FUJINO Haruo (Assoc. Professor, Osaka U), TAKAHASHI Michio (Assoc. Professor, Hirosaki U), ADACHI Masaki (Assoc. Professor, Hirosaki U), NISHIMURA Tomoko (Lecturer, Hamamatsu U Sch Med), URAO Yuko (Lecture, Chiba U), YAMAMOTO Tomoka (Assist. Professor, Osaka U), YOSHIZAKI Arika (Assist. Professor, Osaka U), ISHII Atsuko (Assist. Professor, Osaka U), TANAKA Sanae (Assist. Professor, Osaka U), KUNO Masaru (Assist. Professor, Chiba U)
<i>Theme 3 Measurement of brain and mind in children and adolescents</i>
(Topics) Brain studies using imaging techniques (e.g. MRI, MEG); Sleep studies; Eye gaze studies, Biomarkers of neurodevelopment and neurodevelopmental disorders; Psychometric studies; Artificial intelligence; ELSI (ethical, legal and social issues) in researches of child mental development, etc.
(Collaborative researchers from the Network in 2021)

TANIIKE Masako (Professor, Osaka U), TSUCHIYA Kenji (Professor, Hamamatsu U Sch Med), HIRANO Yoshiyuki (Professor, Chiba U), KAGITANI-SHIMONO Kuriko (Assoc. Professor, Osaka U), YOSHIMURA Yuko (Assoc. Professor, Kanazawa U), JUNG Minyoung (Assoc. Professor, U Fukui), IKEDA Takashi (Assist. Professor, Kanazawa U)

(2) General Collaborative Project

General Collaborative Project themes will be proposed freely by researchers outside the Network of Japan. The proposal should include at least one researcher (Prof / Assoc. prof. Asst. prof.) of UGSCD or the 6 universities participating the Network.

Please refer to the following websites for the research being undertaken at each institution and the belonging researchers.

Osaka University UGSCD

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/>

Molecular Research Center for Children's Mental Development, United Graduate School of Child Development, Osaka University

<http://www.med.osaka-u.ac.jp/pub/kokoro/>

Research Center for Child Mental Development, Kanazawa University

<http://kodomokokoro.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine

<http://www.rccmd.org/>

Research Center for Child Mental Development, Chiba University

<http://www.m.chiba-u.ac.jp/class/rccmd/>

Research Center for Child Mental Development, University of Fukui

<http://www.med.u-fukui.ac.jp/CDRC/welcome.html>

Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine

<http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~kodomono/>

2. Eligibility

Teaching staff, researchers, graduate school students, physicians and co-medical professionals of universities and research institutions or healthcare institutions in Japan and other countries

3. Research Timeframe

From the date of approval until March 31, 2022 (Possible extension into the following fiscal year upon reapplication)

4. Application Procedure

Use the application form available from the websites of Osaka University UGSCD and the research centers listed above or the project webpage below.

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/index.html>

Applicants for this research support and funding should first liaise with the relevant prospective academic collaborator belonging to the respective Network member research institution, and discuss the theme, plan, and research expenses beforehand.

Please refer to the following webpage or the websites listed above for information on the research domain, faculty/staff members and details of ongoing research.

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/en/>

If the applicant has difficulties in finding relevant collaborator at the research institution of choice, or wishes to discuss the collaboration with the prospective academic collaborator, please e-mail the Application Contact given in Section 6.

Submit the completed application form by e-mail or by post to the Application Contact given in Section 6.

5. Application Deadline

No later than 17:00 hrs (JST) on Friday, May 14, 2021.

6. Application Contact

Committee of Collaborative Research Promotion / Globalization

(Chair: TACHIBANA Masaya, Osaka Univ., Assoc. Professor) or

Committee of Joint Resource Promotion

(Chair: TSUCHIYA Kenji, Hamamatsu Univ. School of Med., Professor)

Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders

United Graduate School of Child Development, Osaka University

E-mail: kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

Phone: +81-6-6879-3863

Address: 2-2, Yamadaoka, Suita-shi, Osaka 565-0871, Japan

7. Review of Research Proposal

Research proposals submitted will be reviewed under the criteria listed below. The successful application shall:

(ア) Further drive forward and enhance the developmental research undertaken at UGSCD and the six member university research centers.

(イ) Be highly practicable and have a clearly defined role to play in the ongoing work at the

relevant research center.

- (ウ) Have a global perspective and scope of application
- (エ) Be pioneering or have the potential of benefiting/contributing to society at large
- (オ) Fulfil the purpose and mission of the project initiative
- (カ) Be ethically acceptable

*Please refer to the webpage below for the purpose and mission of the project initiative.

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crmacdd/index.html>

8. Successful Applications

Adoption of roughly five applications in total is planned. Adoptive decisions will be made upon deliberation by the executive committee of the Network after reviewed by Collaborative Research Promotion/Globalization Subcommittee and Joint Resource Promotion Subcommittee. The successful applicants will be contacted directly by the Network.

9. Expenses

Research expenses required for the collaborative research shall be paid for with project funding from the Network up to a maximum of 150,000 JPY per adopted project. The items which will be paid are travel expenses and purchase of materials for which the Network agree to pay beforehand.

10. Research Using Genome-Editing Techniques / Animals / Human Samples, Research with Intervention to Human and Analysis of Human Genome / Genes

If the adopted research plan includes genome-editing, animal experiments, use of human derived samples, intervention to human subjects, and human genome analysis at institute within the Network, review and approval from the relevant committee (IRB, IACUC, etc) of the Network institute are necessary. The recipient of this funding and the collaborator inside the network shall submit necessary application for approval to the relevant committee of the institutes where the network collaborator belongs, before the recipient starts applicable experiments or research.

11. Presentation at Research Liaison Conference

The successful recipient of the research collaboration funding shall report on the progress and results of the research to the research liaison conference of the research centers for child development which is held every end-January. Detailed information will be given after application approval.

12. Collaborative Research Report

The principal investigator shall submit a summary of the research results for FY 2021. This shall be a report covering 2 to 3 pages of A4 paper. The report should be submitted by April 30, 2022 to the UGSCD contact given in Section 6 above.

The copyright of the report, including the right of public transmission, shall be the property of the research centers of each university undertaking the project belonging to the Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders (namely, Molecular Research Center for Children's Mental Development, United Graduate School of Child Development, Osaka University, Research Center for Child Mental Development, Kanazawa University, Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine, Research Center for Child Mental Development, Chiba University, Research Center for Child Mental Development, University of Fukui, and Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine).

*Format and other instructions on compiling the report will be made available at a later date.

13. Publication of Research Paper

If the findings of this collaborative research are to be published, the paper should carry the following sentence as acknowledgement: "This study was supported by the Collaborative Research Program of the Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders: MEXT Policy Initiative FY2021, under joint research conducted through the initiative." Please submit a printed copy of the paper to the contact address given in Section 6.

14. Intellectual Property Rights

Regulations on Collaborative Research at Osaka University will apply to the handling of intellectual property rights.

http://www.osaka-u.ac.jp/jp/about/kitei/reiki_honbun/u035RG00000471.html

15. Health and Safety Provision

After approval of the research project, if students are recruited to participate in the research, insurance must be taken out (e.g. Accidents and Disasters Insurance for Students in Education and Research). Experiments must be conducted under the supervision either of a member of the institution concerned who is of assistant professor position or higher, or a faculty member of UGSCD, research centers of member universities or the Research Center for Child Mental Development, Hirosaki University Graduate School of Medicine.

16. Reapplication for Research Funding

Even if funding has been received for collaborative research in one fiscal year, application can be made for collaborative research funding in the following fiscal year. The application will be considered carefully alongside other applications. If your application is successful, funding for the collaborative research will continue for the new fiscal year.

17. Contact Us

Committee of Collaborative Research Promotion / Globalization

(Chair: TACHIBANA Masaya, Osaka Univ.. Assoc. Professor) or

Committee of Joint Resource Promotion

(Chair: TSUCHIYA Kenji, Hamamatsu Univ. School of Med., Professor)

Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders

United Graduate School of Child Development, Osaka University

E-mail: kyodokenkyu@ugscd.osaka-u.ac.jp

Phone: +81-6-6879-3863

Address: 2-2, Yamadaoka, Suita-shi, Osaka 565-0871, Japan

社会実装支援部会

部会長 清水 栄司

令和2年度 社会実装支援部会では、2回のZoom会議（6月1日、2月16日）と1回のメール会議（1月8日）を行い、以下のような活動を行った。

（1）国際的な社会実装

千葉校では、国際的な社会実装支援という観点から、国立台湾師範大学の田秀蘭教授と毎月1回webミーティングを開催し、台湾国内にて倫理審査申請し、倫理審査委員会の承認を得た後、台湾国内の小学校にて不安対処認知行動療法プログラム「勇者の旅」のパイロットスタディ開始を予定している。

社会実装支援部会の予算20万円については、台湾で使う繁体字版の不安対処「勇者の旅」プログラムの指導者用テキストの作成費用にあてた。

（2）子どもみんなプロジェクト

千葉校では、大阪校を中心とした子どもみんなプロジェクト第一期の取組をもとに、子どもみんなプロジェクト第2期を立ち上げ、2か月に1回程度のZoom会議を行った。子どもみんなプロジェクトは、子どものこころの発達に関する今日的な問題を踏まえ、研究者と教育関係者による連携体制（プラットフォーム）を構築するとともに両者の協働による研究・教育実践活動を行うことを通じ、研究者、教師だけではなく、すべての子どもに関わる人が集まり、すべての子どもの健全な発達に資することを目指した事業を推進することを目的としている。大阪大学、武庫川女子大学、金沢大学、浜松医科大学、千葉大学、福井大学、弘前大学、中京大学、鳥取大学、兵庫教育大学の10大学コンソーシアムと連携する教育委員会（青森県、千葉県、千葉市、柏市、館山市、静岡県、浜松市、磐田市、大府市、石川県、福井県、大阪府、池田市、兵庫県、西宮市、鳥取県）により、引き続き、推進された。

（3）各校のKPIの評価項目4．先端的知見の社会還元実績（市民公開シンポジウム、報道数、専門家研修、教材作成）についての令和2年度の年間の実績を調査、収集
以下のようにまとめた。

大阪校

市民公開シンポジウム 2件、報道数 7件、専門家研修 18件、教材 0件

金沢校

市民公開シンポジウム等 7件, 報道数 7件, 専門家研修 4件, 教材作成 3件

浜松校

市民公開シンポジウム 1件, 報道数 7件, 専門家研修 8件, 教材作成 0件

千葉校

市民公開シンポジウム 8件, 報道数 7件, 専門家研修 13件, 教材作成 6件

弘前大学

市民公開シンポジウム 2件, 報道数 36件, 専門家研修 14件, 教材作成 1件

以上

若手人材育成部会

部会長 谷池 雅子

当部会は、将来国際共同研究の担い手になる若手育成を支援することを目的とする。ここでいう若手とは、40歳未満の教員・大学院生とし、女性で分娩育児でキャリアの中断があった場合にはその年限を足して上限とする。前後期に分け半額ずつを予算として公募し、応募多数の際には共同研究（とりわけ国際共同研究）を優先するというポリシーにて選考する。初年度は50万円の予算を用いて、若手の国際学会発表（筆頭著者に限る）や海外打ち合わせの渡航支援を行ったが、令和2年度は、コロナ禍出来のため、変則的な支援を行った。

1 令和2年度の活動について

令和2年度前期は、新型コロナウイルス感染症パンデミックのために国際学会は中止が相次ぎ、また海外渡航も不可能となったため、5月15日に令和2年度第1回部会をメール審議にて行った結果、前後期合わせて40万円の予算で後期に公募を行うこととなった【資料1】。10月15日に令和2年度第2回部会を開催し、令和2年度の当部会への配分40万円の部会経費の使用計画について協議し、遠隔で開催される国際学会参加はもとよりワークショップへの参加、論文投稿支援まで範囲を広げて公募することを決定し、次回の部会までに委員が各々公募内容を採点することとした【資料2】。11月12日に開催された令和2年度第3回部会にて、ゼロ評価とされた申請についての協議が行われ、疑義照会に対応して公募書類を修正していただくこととし【資料3】、メール審議にてこの申請にも支援を行うこととした。

以上の審議の結果、以下の7名に支援をすることに決定した。

- 1 金沢大学 Maria Gerasimenko
- 2 金沢大学 南香奈
- 3 弘前大学 坂本由唯
- 4 弘前大学 照井藍
- 5 弘前大学 森裕幸
- 6 弘前大学 廣田智也
- 7 福井大学 平岡大樹

個々の支援内容と被支援者からの報告書は【資料4】の通りである。

2 令和2年度の予算と決算について

部会経費予算額：400,000円

支援額 ：187,437円

残 212,563円（中央経費に返却とする）

以 上

【資料1】

令和2年度第1回 若手人材育成部会 (メール審議)

以下の内容について、メール審議(2020年5月15日)を実施し、全委員から賛成を得た。

=====

若手人材育成委員会委員 各位

若手人材育成委員会
委員長 谷池 雅子

記

<審議議題>

1. 若手人材育成委員会の予算配分案について

令和元年度に、①予算(当時50万円)を前期・後期の2期で半分ずつ執行すること、
②それに合わせて、各期の初めに若手の渡航支援についての応募を行い、各期の初めに開催される委員会にて支援する若手を決定すること、という大枠について承認をいただいた。
しかしながら、コロナ関係で海外渡航が不可能である現在、予算40万円(令和2年度)を全て後期に使用したい。

2. 若手人材育成委員会の開催について

第2回目の開催予定は10月初めとし、予め応募があった中から支援する若手を選考する。

以上

ご回答 御氏名

1. 承認する ・ 承認できない (理由)
2. 承認する ・ 承認できない (理由)

=====

【資料2】

第4回（令和2年度第2回） 共共拠点形成・若手人材育成部会議事要旨

日 時：令和2年10月15日（木）14:00～14:13

場 所：各校にてWeb会議（Zoom）により開催

出席者：大阪校 部長 谷池先生

金沢校 辻先生

浜松校 土屋先生

千葉校 中川先生

福井校 松崎先生

弘前大学 新川先生

陪席者：大阪校 段家（事務局）

議 題

1. 令和2年度の若手人材育成部会の経費使用について

部会長の谷池先生から、若手人材育成部会の経費使用に関して、コロナの影響があり、海外渡航が難しい中、どのように予算を使用していくか、どのように若手支援をしているか、予算返却もひとつだが、若手育成のためにできるだけ使っていききたいという説明があり、様々な意見交換が行われた。

以下、各先生方からの意見

- ・ONLINEの国際学会に参加する若手を支援するのはどうか。
- ・ワークショップに参加する若手を支援するのはどうか。ワークショップは今後まだ多く開催される。
- ・論文の投稿支援まで広げてはどうか。投稿料、校閲料など。この場合、3月までに投稿が完了するものでないといけない。
- ・コロナの影響で帰国できず、契約延長して国際共同研究に従事してもらっている留学生を支援するために使えないか。

意見交換の結果、ワークショップ参加等にまで支援枠を広げて、参加希望者がいるかどうか周知してみる。10月末を期限とし、優先順位をつけて、どれを支援していくか決める。

以 上

【資料3】

第5回（令和2年度第3回） 共共拠点形成・若手人材育成部会 議事要旨

日 時：令和2年11月12日（木）16：00～16：22

場 所：各校にてWeb会議（Zoom）により開催

構成員：（大阪校） 部会長 谷池 雅子 教授

（金沢校） 辻 知陽 准教授

（浜松校） 土屋 賢治 教授

（千葉校） 中川 彰子 教授

（福井校） 松崎 秀夫 教授

（弘前大学） 斉藤 まなぶ 准教授

陪 席：（大阪校） 段家（事務局）

議 題：

令和2年度若手育成支援 助成申請の決定 【資料2】

谷池部会長より、全7件の申請額合計が40万円程度になるので、大枠として、全ての申請を採択するという方向で進めたいとの意見がだされ、委員より了承された。そのうえで、具体的な支援額、内容について以下のとおり、意見交換、協議がなされた。

1. 同じ学会出張者の支援について

谷池部会長より、同じ学会に出席する弘前大学の4名は金額を統一するべきではないかという意見が出されたが、斎藤委員より、金額の違いは登録方法が異なったため（2名はEarly Bird 学生登録、2名はNon-memberで登録）であると説明があった。登録変更は不可能であり、領収書の提出を条件に、4名とも申請額で支援することが決定した。

2. ゼロ評価があった案件の支援について

松崎委員より申請内容、申請者について等の説明があった。各委員より委員を通さず提出してくるのは問題があるのではないかと、他校とのバランスを考え一律支給はどうか、論文化する上で本来なら必要金額は全員が同じであるはず、等の意見交換がなされたが、平岡研究員ご本人に申請資格があるので、若手支援の主旨を理解していただき、根拠に基づいた上で、平岡研究員ご本人の名前で申請書を再提出していただき、また申請額については他校の申請内容、申請額を考慮し、上限5万円とし、支援するという方向性で合意した。提出期限は

来週末とする。

再提出された申請書についてはメール審議を行い、余った予算については1月まで若手人材育成部会にて保持するが、その後共共本部へ返納する旨、谷池部会長より説明があり、了承された。

以上

=====

共共拠点形成・若手人材育成部会
部会委員各位

共共拠点形成・若手人材育成部会 部会長 谷池 雅子

若手人材育成部会（持ち回り）審議について（審議結果）

下記議題につきまして、持ち回りにより審議・ご回答いただいたところ、全委員より、審議事項1につきましては「支援可」、審議事項2, 3につきましては「承認」のご回答を頂きましたので、確定とさせていただきます。

記

【審議事項】

1. 福井校・平岡研究員による若手支援申請について

2. 支援申請書の提出方法について

「令和3年度からは各校からの申請については、必ず委員を通して提出されるものとする。申請についての照会も直接委員長ではなく委員を通すこととする。」

3. 令和3年度の支援申請書フォーマットについて

「令和3年度からは令和元年度の申請書（添付参照）を使用し、学会のabstractや共同研究のinvitation letter, 英語校正見積り, 投稿料など支援の根拠となる資料とともに、公正な討議が可能なように、詳細な情報の提供を求める。」

以上

=====

【資料 4】

令和2年度 若手人材育成部会 「若手人材育成・研究支援」

	名前	所属	職位・学年	研究概要・支援希望内容
1	Maria Gerasimenko	金沢	非常勤技術補佐員	オキシトシンと自閉スペクトラム症に関連した研究の論文掲載料
2	南 香奈	金沢	博士課程 2 年	論文の英文校正費用
3	坂本 由唯	弘前	大学院4年	5歳児OTと発達障害との関連について発表。IACAPAP 2020 Singapore Virtual Congress参加費用
4	照井 藍	弘前	大学院2年	5歳児のASD児の睡眠問題の併存率と特徴について発表。IACAPAP 2020 Singapore Virtual Congress参加費用
5	森 裕幸	弘前	大学院2年	小中学生におけるソーシャルキャピタルとQOL, 抑うつ関連について発表。IACAPAP 2020 Singapore Virtual Congress参加費用
6	廣田 智也	弘前	大学院2年	5歳児健診調査と思春期の精神病理についての疫学調査発表。IACAPAP 2020 Singapore Virtual Congress参加費用
7	平岡 大樹	福井	特別研究員	COVID19下の親の育児ストレスについて国際比較調査を実施。その成果論文の英文校閲費

若手人材育成部会・研究支援報告書

氏名	Maria Gerasimenko
所属大学名	金沢大学
職位または学年(学生の場合)	D3
連絡先メールアドレス	Maria Gerasimenko <mgera_08@mail.ru>
申請内容 (参加学会、ワークショップ等)	投稿用論文の校正費用
内容報告	<p>申請者は、RAGE ノックアウトマウスマウスの母親が出産後第3日で、第2のストレスを加えると、子育てをしなくなることを観察し、産後うつなどの発症にRAGE 依存的なオキシシンの脳内移行が重要な役目をしていることを見出した。この件は、英文校正の後、下記の論文として、公表された。Receptor for Advanced Glycation End-Products (RAGE) Plays a Critical Role in Retrieval Behavior of Mother Mice at Early Postpartum.</p> <p>Gerasimenko M, Lopatina O, Munesue S, Harashima A, Yokoyama S, Yamamoto Y, Higashida H. <i>Physiol Behav.</i> 2021 Mar 20:113395. doi: 10.1016/j.physbeh.2021.113395.</p>
備考	

若手人材育成部会・研究支援報告書

氏名	南香奈
所属大学名	金沢大学
職位または学年(学生の場合)	D2
連絡先メールアドレス	minami-k@staff.kanazawa-u.ac.jp
支援申請内容 (参加学会、ワークショップ等)	投稿用論文の校正費用
内容報告	<p>オキシトシン(以下、OT)は、産後うつ病との関連が示唆されており、妊娠中や分娩直後にOT濃度が低下している女性は発症しやすい事が明らかとなっている。また、母乳分泌が不良な母親は産後うつ病の罹患率が高まるとされており、授乳時のOT濃度が低値であると症状が悪化するという報告もある。</p> <p>この事から、周産期のOT濃度が産後うつ病を予測するツールになる可能性に着目した。周産期の母親は生涯で最もOT濃度の変化が顕著な時期であると言われていたが、生理学的な詳細は明らかとなっておらず、検証の余地があると考えた。そこで、産後1年までの母親のOT濃度変化を唾液・血液を用いて検証した。</p> <p>結果: 1. 妊娠に伴い唾液・血清OT濃度が上昇した 2. 分娩期: 唾液・血清OT濃度ともに、分娩の進行に伴って上昇した。 3. 授乳: 唾液・血清OTともに授乳中に有意な上昇を認めた。 4. また、母子相互作用中には、子どもとの触れ合い時に唾液OTが有意な上昇を認めたのに対し、血清OTは、有意な濃度変化を認めなかった。</p> <p>このような結果から、分娩時の子宮収縮、授乳時の射乳など末梢臓器で生理作用が生じている状況では、血清OTの上昇を認めたのに対し、子どもとの触れ合いでは、濃度変化を認めなかった。一方で唾液OTの上昇が認められたことから、血液中のOTと唾液中のOTでは、OTの分泌、代謝機序が異なる可能性が示唆された。以上の結果をまとめ、英語にて投稿論文を書き、校正にだした。</p>
備考	

若手人材育成部会・研究支援報告書

氏名	坂本 由唯
所属大学名	弘前大学
職位または学年(学生の場合)	大学院4年
連絡先メールアドレス	skmt0531@hirosaki-u.ac.jp
申請内容 (参加学会、ワークショップ等)	IACAPAP 2020参加費
内容報告	<p>令和2年12月2日～同年12月4日開催されたIACAPAP 2020, Singapore, Virtual Congressに参加した。ポスター発表で、5歳児における血漿オキシトシン(OT)値と発達障害との関連について報告した。近年、自閉スペクトラム症(ASD)や注意欠如多動症(ADHD)とOTとの関連が報告されているが、これまで特定の年齢層を対象とした報告はほぼない。そこで我々は、2013年から2018年の間に5歳児健診を受診しOT値を測定した439人を、ASD群 117人、ADHD群 94人、その他の発達障害群 82人、定型発達群 146人の4群に分けて調査した。その結果、4群のOT値に有意差は認められなかった。ADHD群では女兒の方が男児より優位にOT値が高かった($p < 0.05$)。独立変数をConners3スコア、従属変数をOT値とした重回帰分析の結果、各群においてAQスコアの高さはOT値の低さと関連した($R^2 = .105$, $\beta = -.328$, $p < 0.05$)。さらに、ADHD群において、Conners3における行為障害に関するスコアの高さはOT値の高さと関連した。以上より、5歳児において、AQで評価されるASD特性が強いほどOT値が低値であることが示された。ADHD群においてはOT値の男女差が認められたことから、OT値に関しては年齢や性別を考慮する必要があるといえる。また、ADHD群においてはOT値の高さと行為障害の関連が示唆されたが、今後サンプル数を増やし追加調査が必要である。その他、うつ病や不安障害、発達障害など児童青年期の精神障害に関する講演を聴講し、最新の知見を学んだ。また、アジア諸国からのポスター発表から近年の研究のトピックスを学んだ。</p>
備考	特記事項なし。

若手人材育成部会・研究支援報告書

氏名	照井 藍
所属大学名	弘前大学
職位または学年(学生の場合)	大学院2年
連絡先メールアドレス	ai_05@hotmail.co.jp
申請内容 (参加学会、ワークショップ等)	IACAPAP 2020, Singapore, Virtual Congress への参加
内容報告	<p>本学会では、日本人の5歳のASD児の睡眠問題の併存率と特徴について発表した。ASD児は睡眠の問題を併発しやすく、4歳から18歳までのASD児の約41%が睡眠の問題を抱えていることが報告されている。この研究の目的は、日本のASD児が、TD、ADHD、またはその他のDDと比較して、睡眠障害と感情的・行動的問題の併存率が高いかどうかを調査することである。対象は弘前市で5歳児発達健診に参加した766人である。二次健診の対象者328人はDSM-5基準に従って診断され、68人がASD、63人がADHD、および72人が他DD、94人がTDであった。二次健診非対象者およびTD診断者計532名をTDと定義した。二次健診未受診者31名は除外した。養育者はJSQPとSDQに回答し、診断群間の多重比較、重回帰分析、および診断に関するロジスティック回帰分析が行われた。睡眠障害が疑われる児の割合は、TDで12.8%、ASDで45.6%、ADHDで12.8%であり、ASD児は、TD児よりもOSAS、不眠症/リズム障害、朝の症状、および日中の眠気スコアが有意に高くなった。また、重回帰分析の結果、不眠症/リズム障害、OSAS、朝の症状、および日中の過度の眠気を持つ児は、行動上の問題と有意に関連していることが分かった。OSASおよび不眠症/リズム障害のスコアが高いほどASDと診断される可能性が高くなるが、OSAS、朝の症状、および日中の過度の眠気スコアが高いほど、ADHDと診断される可能性が高くなった。多くの子どもが睡眠の問題を抱えており、それが彼らの感情や行動に影響を及ぼし、将来的に健康上の問題を引き起こす可能性があることに、注意を払う必要がある。</p>
備考	

若手人材育成部会・研究支援報告書

氏名	廣田智也（ひろたともや）
所属大学名	弘前大学
職位または学年(学生の場合)	大学院2年
連絡先メールアドレス	tomoya.hirota123@gmail.com
申請内容 (参加学会、ワークショップ等)	シンガポール（国際児童思春期青年医学会IACAPAP 2020 Virtual Congress)でのシンポジウム発表
内容報告	<p>シンポジウムタイトルTowards a better understanding of early childhood neurodevelopmental profiles and their association with psychopathology in adolescence: findings from a longitudinal epidemiological study in Japan</p> <p>60分間の上記シンポジウムにて、報告者は15分の発表を行った。発表は、事前に録画し、当日は60分間の質疑応答時間が割り当てられ、シンポジウムをオンラインで聴講した学会参加者からの質問に対応した。報告者は、弘前大の所有する5歳児健診の二次検査、また学校調査、さらに今後予定する思春期調査により得られる縦断データを用いた疫学研究のデザインを中心に発表した。また、発表スライドにはこれまで弘前大の横断データを用いたから得られた知見も発表し、各国からの参加者と科学的知見を共有した。また、報告者は、当シンポジウムのChair(座長)も兼ねたため、他の3人の発表者とそれぞれのテーマ（発達協調運動障害のある児の経時的な行動・感情問題の変化、抑うつとインターネット依存、生活の質の3つの変数の経時的関係、小学生・中学生における抑うつを経時的変化）の要点を紹介し、他の発表者が円滑に発表できるよう補佐する役割も担った。</p>
備考	

若手人材育成部会・研究支援報告書

氏名	森 裕幸
所属大学名	弘前大学
職位または学年(学生の場合)	大学院 2年
連絡先メールアドレス	baggio0125@gmail.com
申請内容 (参加学会、ワークショップ等)	IACAPAP 2020, Singapore, Virtual Congressの参加に関する報告
内容報告	<p>本国際学会にて、私は弘前大学子どものこころの発達研究センターが行っている学校コホート調査から得られた研究成果の一部を報告した。内容は、小中学生におけるソーシャルキャピタルとQOL,抑うつとの関連であった。本研究は、子どものソーシャルキャピタルとして重要だと考えられている学校のソーシャルキャピタルを含んだ尺度social capital questionnaire for adolescent students(SCQ-AS)を用いて、ソーシャルキャピタルとQOL、抑うつとの関連について調査したものである。調査結果から、ソーシャルキャピタルが高いほど、QOLが高く、抑うつが低い傾向にあることがわかった。中でも、学校のソーシャルキャピタルが相対的に関連が強いことがわかった。さらに、小中学生、男女において、ソーシャルキャピタルとQOL,抑うつとの関連に違いが見られることが明らかになった。このことから、子どものメンタルヘルスにおいて、ソーシャルキャピタルが重要な役割を果たすことが示唆された。また、教育段階及び男女によってソーシャルキャピタルとメンタルヘルスの関連に違いが見られたことは、我々の知る限りでは新しい知見だと言える。世界的に思春期のメンタルヘルスや自殺に関心が高まっている中で、介入すべきポイントについて重要な示唆を与える知見であると思われる。</p>
備考	特記事項なし

若手人材育成部会・研究支援報告書

氏名	平岡大樹
所属大学名	福井大学
職位または学年(学生の場合)	特別研究員
連絡先メールアドレス	dhiraoka@u-fukui.ac.jp
申請内容 (参加学会、ワークショップ等)	英文校正費
内容報告	<p>COVID-19の感染拡大状況下における育児ストレス増加について、日本・アメリカ・インド・マレーシアの4カ国からデータを収集し、育児ストレスの背後に幼少期の逆境経験やCOVID-19への不安が存在することを明らかにした。その結果を国際誌に報告することを目的とし、論文の作成を行った。それにあたり、英文校閲費を必要とし、今回の支援を用いて英文校正を依頼した。考察部分はまだ共同研究者と議論する余地が残されているが、問題・方法・結果に関してはこの校正によって確定とし、考察が完成次第論文投稿を行う予定である。</p>
備考	

③ 広報委員会

委員長 友田 明美

1 令和2年度の活動について

前年度に制作した事業ウェブサイトについて、コンテンツの拡充を行った。1つ目は、事業のコンセプトや内容を研究者や教育関係者だけでなく一般の方にも幅広く認知してもらうことを目的として、事業ロゴの制作を行った。2つ目は、子どものこころの研究に関するアジア諸国のハブ拠点となることを目的としている本事業の内容に沿うべく、ウェブサイトの多言語化を行った。3つ目は、ウェブサイトによる共同研究支援の公募や研究成果についての情報発信の整理と拡充を行った。以上の点について検討するために、令和2年度に6月11日（木）に第2回部会を開催し、共共拠点形成における今年度の広報活動の戦略と併せて種々意見交換を行った。

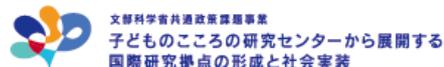
2 事業ロゴ制作に向けての議論

4月10日（金）に連合小児発達学研究科のロゴ制作にも携わった大阪大学・クリエイティブユニット（CU）に制作依頼のための打合せを行った。CU側より事業の概要やコンセプトに関してヒアリングがなされ、ヒアリング内容に基づきロゴ案を複数制作することで了解を得た。6月11日（木）に開催された第2回部会において、CU側から提案された5つのロゴ候補に関する説明があり、これらの候補案について、各校教員から①どの候補が適切か、②それぞれのデザインに関する意見、に関して意見集約を行った。その後、CU側および広報委員会内により協議を重ねた結果（7/2, 8/24）、9月18日（金）に事業ロゴ制作およびデザインガイドラインの策定を完了した（図1）。

【英語表記 - ヨコ】



【日本語表記 - ヨコ】



【英語表記 - タテ】



【日本語表記 - タテ】



図1. 事業ロゴ

また、ロゴ制作の完了に伴い、事業ウェブサイトのホームページ上部のタイトルおよびナビコンを完成したロゴに差し替えた。



図 2. 事業ウェブサイトホームページ

3 ホームページの多言語化開設に向けての情報収集およびページ設計

事業共共拠点ウェブサイトの多言語化にあたり、多くの学術ウェブサイトで採用されている日本語と英語に中国語と韓国語を加えた、四か国語に対応すべく協議を行った。その結果、既に制作している英語版ウェブサイトを基に、中国語版と韓国語版を制作する方針が決定し、中国語版は大阪拠点、韓国語版は金沢拠点の翻訳可能な人材に依頼することとなった。翻訳されたコンテンツについて福井拠点によりダブルチェックを行い、令和 2 年 8 月に以下のリンクにてホームページの開設を行った（図 2A, 図 2B）。

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/ch/index.html>（中国語版）

<http://www.ugscd.osaka-u.ac.jp/crnacdd/kr/index.html>（韓国語版）



図 2A 事業ウェブサイト（中国語版ホームページ）

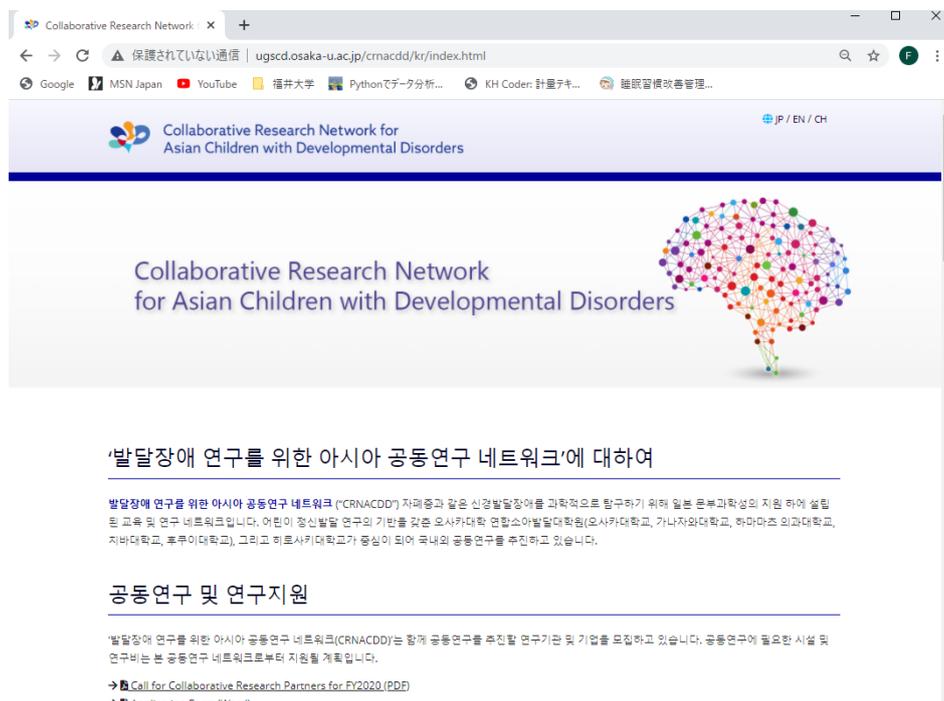


図 2B 事業ウェブサイト（韓国語版ホームページ）

- 4 ウェブサイトによる共同研究支援の公募や研究成果についての情報発信の整理と拡充
 共同研究推進・国際ハブ化推進部会による「令和2年度共同研究支援の公募」について、ウェブサイト上に公募要領と申請書を掲載した。また、これまでの研究支援採択課

題に関する概要（申請者，所属，題目）と，支援が終了した課題については研究成果についての報告書をウェブサイトに掲載した。

また，研究成果について，今年度は各拠点より 10 件の成果について掲載依頼があり，事業の活動成果として掲載している。研究成果報告についてコンテンツとしての体裁を保つために，成果報告用の文書テンプレート作成し，広報委員会経由で各拠点と共有した。また，ウェブサイト上の活動成果の更新方法について，テンプレートを用いて委員長ならびに事務局宛に随時受け付けることとなった。

5. 国際シンポジウム（CRNACDD 2021）に関する情報発信

2021 年 1 月 22 日（金）11:00～14:00 大阪大学銀杏会館阪急電鉄・三和銀行ホールにて，マラヤ大学（マレーシア），フィリピン子ども医療センター（フィリピン），マヒドン大学（タイ），インドネシア大学（インドネシア）と共同で第 2 回国際シンポジウム"CRNACDD 2021"を開催し，本シンポジウムの内容をウェブサイトにて情報発信した。



6. 共共拠点広報活動の他の手段（SNS・動画）について

事業ウェブサイトによる事業内容やコンセプトの積極的かつ効果的な情報発信のために，SNS や動画などの他の手段の利用可能性についても協議を継続している。

以 上

④ アドバイザリーボード

委員は 139 頁に示した。関連する規定は 140 頁～142 頁に示した。

⑤ 外部評価委員会

委員は 139 頁に示した。

<各校を拠点とする活動実績・KPI>

● 既存リソースの共通化・国際的共通臨床データベースの構築

令和2年度も、各校を拠点とする活動を引き続き活発に実施した。さらに、研究のより活性化と各校の壁を越えての協働を促進すべく、既存リソースの共通化、さらには本事業の基盤となる国際共通臨床データベースの構築に向けての活動も行った。KPI と合わせ、以下に記載する。

【大阪校】

大阪校では、2020 年度より附属子どものこころの分子統御機構研究センターにブレインバンク・バイオリソース部門を設置し、ヒトバイオリソースの管理・共通化に向けた体制強化を行った。大阪大学が保有している臨床情報と紐づいた発達障がい児 DNA, RNA, リンパ芽球, 血漿サンプルに関して、共同利用を視野に入れた DNA の全エクソーム解析を進めた。また、理化学研究所吉川研究室より、自閉スペクトラム症患者のリンパ芽球検体約 1300 検体を受け入れ、バイオリソースを拡充した。

また、発達障がい国際的共通臨床レジストリの構築に関して、6 大学の倫理審査を大阪大学で一括して行い、承認を得た。大阪大学サイバーメディアセンター内にデータを格納する形でのレジストリフォーマット作成を行い、2020 年度に完成させた。レジストリには、上記バイオリソースの取得の有無についての情報を含め、バイオリソースや画像情報などとリンクして活用可能な形にした。

さらに、大阪大学未来医療開発部の協力により、電子カルテよりレジストリに必要情報をエクスポート可能な CDCS システムの構築および、他の 5 大学でもレジストリへのデータ入力を容易にするシステムの構築を、各大学担当者と連携して行った。

【金沢校】

金沢校では、既存リソースの共通化を目指し、発達障がいモデルマウス作製と、ウェアラブルセンサーを用いた児童の生活に関するデータの収集を行った。発達障がいモデルマウスとして、オキシトシン関連分子のノックアウトマウス 2 系統を CRISPR-Cas9 法によって作製し、社会性障害を示すデータを得た。

ウェアラブルセンサーに関しては、大学間でのデータ共有を容易にするため、倫理申請を行っている。

また、金沢校の特色の一つである脳磁計 (MEG: magnetoencephalography), 特に幼児研究用にカスタマイズされた MEG を国際共同研究へと展開させるために取り組んでいる。同型

の幼児用 MEG を所有しているマッコーリー大学（オーストラリア）に 2 名の研究員を派遣中であり、連携のための基盤を強化している。

【浜松校】

浜松校では、6 大学および国際共同研究の基盤となる浜松母と子の出生コホート研究（HBC Study: Takagai et al., 2016）の運営を継続し、ヒト発達データ、発達障がいにかかる臨床データの縦断的・経時的収集をおこなった。HBC Study では、計測データの利用の仕方を国際的に標準的な手法にそろえる作業を進めている。この作業の成果を生かして、6 大学ならびに国内他機関との共同解析に着手した。発達障がいとナルコレプシーの遺伝学的背景の共通性に関する報告に特筆すべき成果があった（Takahashi et al., 2020）。このほか、3 本の英文論文を上梓した（Matsumoto et al., 2020; Sagawa et al., 2020; Ibara et al., 2020）。

大阪校を中心に立ち上げられたアジア共同臨床レジストリ（Asian Neurodevelopmental Disorder Registry; ANDy）の共用を開始し、試験データの登録を開始した。次年度以降の本格的な供用への移行を目指している。

【千葉校】

「勇者の旅」プログラムの効果研究に参加した小中学校の、プログラム実施学級・非実施学級在籍児童生徒から収集された質問紙調査データ（SCAS 等）の共通化を図っている。2020 年度は、小学校 4 年生から中学校 2 年生まで約 2000 名分の SCAS データが新たに収集されている。小中学校の PC やタブレット端末から、質問紙調査に直接回答・提出できるよう、千葉大学「こころの e-learning」内にデータベースを構築し、2019 年度に運用を開始している。2020 年度は、「勇者の旅」プログラムの効果研究に参加した小中学生のうち、約 1000 名分の SCAS データがオンラインにて収集されている。

【福井校】

大阪大学主導の下、6 大学共同でアジア小児発達障がいレジストリを構築し、データ登録を開始した。脳画像はレジストリに紐づけることで、研究データの蓄積を行う。・ねんねナビ社会実装のため大阪校との共同研究で福井県永平寺町への展開を開始した。

この実施に関わるクロスアポイントメントによる人材交流により、COVID-19 が母子の睡眠習慣に及ぼす影響に関する大規模調査について論文化した。

また、子どものこころオンライン診療の開発研究を開始した。

【弘前大学】

国際臨床レジストリの構築に向けて、弘前大学において倫理申請を遂行した。現在、利用可能なデータの精査と、共通のフォーマットに電子カルテ情報を変換するための作業を進めている最中である。既にレポジトリへの登録に関する同意を数例から取得しており、来年

度以降も登録者数の増加が見込まれる

● 評価項目 1 6大学内での共同研究数、人材交流実績

6大学内での共同研究数、人材交流実績について、以下の表に示す。

6大学での共同研究数、人材交流実績		大阪校	金沢校	浜松校	千葉校	福井校	弘前大学	件数
1	乳幼児の睡眠改善のための睡眠アプリの多施設共同実証研究（大阪・金沢・福井・弘前）	○	○			○	○	1
2	MRI画像研究（福井・大阪・千葉）	○			○	○		1
3	視線計測装置GazeFinderの臨床治験（浜松・大阪・金沢・千葉・福井・弘前）	○	○	○	○	○	○	1
4	自閉スペクトラム症早期療育プログラム日本版の効果実証研究（弘前・大阪・金沢）	○	○				○	1
5	共通質問紙によるCOVID-19下の支援ニーズ研究（大阪・金沢+マラヤ大学）	○	○					1
6	6大学の共通臨床レジストリの構築（大阪・金沢・浜松・千葉・福井・弘前+マラヤ大学・フィリピン小児医療センター・マヒドン大学・インドネシア国立大学）	○	○	○	○	○	○	1
7	学童・思春期のこころの客観的指標と連携システムに関する研究（大阪・浜松・弘前）	○		○			○	1
8	福井大学との間で1名をクロスアポイントメントで派遣、2名の福井大学教員を受け入れ。（大阪、福井）	○				○		1
9	経頭蓋直流電流刺激（tDCS: transcranial direct current stimulation）が認知機能に与える影響と、その神経生理学的根拠を調べる研究（金沢・浜松）		○	○				1
10	自閉スペクトラム症児の末梢血清にみられる脂質濃度の異常調査、研究（浜松、大阪）	○		○				1
11	子どもの発達と教育についての基礎研究と実践活動を進める、子どもみんなプロジェクト（千葉・大阪・金沢・浜松・福井・弘前）	○	○	○	○	○	○	1
12	AMED成育疾患克服等総合研究事業—BIRTHDAY「学童・思春期の心身の健全育成を支援する医療との連携システムの開発（千葉・弘前）				○		○	1
13~20	国際ハブ化推進部会・拠点化基盤推進部会 共同研究支援（8件）							8
								20

● 評価項目 2 国際共同研究論文の数、およびその増加

国際共同研究論文等については、12頁～26頁に示す。国際共同研究論文については*印にて示している。

千葉校の補足を以下に示す。

千葉校：12,700人の自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、強迫症、双極性障害、うつ病、統合失調症患者と15,600人の健常対照者のデータを解析し、皮質厚と遺伝子発現のプロファイルが海馬CA1錐体細胞等で一致することを発見した。これにより、出生前の神経発達プロセスに関する遺伝子発現と、出生後のシナプス活動と可塑性の根底にあるプロセスに

関連する、これらの疾患の皮質厚プロファイルの共通性の存在が明らかになった。本研究成果は 2020 年 8 月に国際学術誌「JAMA Psychiatry」にオンライン公開された。

併存率の高い神経発達障がいである自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、強迫症の脳構造を年齢層別に比較し、児童・青年期の注意欠如・多動症は強迫症よりも海馬体積が小さく、成人の自閉スペクトラム症は、注意欠如・多動症と強迫症よりも、前頭皮質が厚いことを明らかにした。このことは、神経発達障がいの病態メカニズムの解明に貢献する。本研究成果は 2020 年 6 月に国際学術誌「American Journal of Psychiatry」にオンライン公開された。

児童思春期の自閉スペクトラム症者児・者および保護者に対して自閉スペクトラム症とは何かを理解させ、自身の自閉スペクトラム症に対し機能的に対処を行うことで社会適応を向上させることを狙いとした、CBT を用いた自閉スペクトラム症の心理教育プログラム「ASD に気づいてケアするプログラム (Aware and Care for my AS traits; ACAT)」を開発した。ACAT は千葉大学と福島大学において無作為化比較試験として実施した。本研究に関するプロトコル論文は 2020 年 9 月に Trials に掲載された。

● 評価項目 3 アジア・日本の地域特性に適した診断、治療、介入法の提唱

各校が協働して実施した内容については、部会報告に記した。ここでは、各校が独自実施している内容について記す。

【大阪校】

日本の子どもの睡眠習慣に則して作成した、日本版子ども眠りの質問票の東南アジア版（マレーシア語、タイ語、インドネシア語、フィリピン語、中国語）を作成し、マレーシア・タイ・インドネシア・フィリピンの連携施設に各国語版での妥当性の検証を依頼し、共同研究として進めた。また、睡眠アプリの子育て支援アプリとしてのブラッシュアップと全国的な普及および地域での自律した活用を可能にするため、AI を活用した自動応答システムの開発、地域の保健師等の睡眠専門家を育成するためのプログラム開発と教材作成を行った。また、日本の状況にあった形での自閉スペクトラム症への早期療育モデル (ESDM) プログラムを考案し、その効果検証研究についての準備を進めた。さらに学校での教師による発達障がい児支援プログラムとして、日本版ティーチャートレーニングプログラムの作成と検証を行い、論文として発表した。

さらに、緊急事態時の発達障がい児と家族支援の政策提言を目指した COVID-19 下の実態調査を大阪大学・金沢大学・マラヤ大学（マレーシア）の共同研究として開始し、データ収集とその解析をおこなった。

KPI (2 件) に対し 5 件と、2020 年度の実績は KPI を大きく上回った。

【金沢校】

大阪大学と共同で進めている睡眠介入研究について、加賀市との協力体制を確立した（評価項目 4 に関連プレスリリース情報あり）。金沢市および枚方市との PEERS プログラムの実証研究に向けて準備を開始した。

また、東京藝術大学との共同研究によって、自閉スペクトラム症児を対象としたアートワークショップの効果として唾液中オキシトシン濃度が上昇することを示し、新たな介入法についての知見を得た。

【浜松校】

わが国の妊婦は「やせ」型が多く、結果として低出生体重児の割合が増加を続けている。その一因として喫煙、および産科医が妊婦の指導に用いるガイドラインの不適切さが指摘されている。そこで、わが国固有のデータと発信を行うことを目的に、東北大学メディカル・メガバンク機構（栗山進一教授）を中心とする研究事業（厚生労働科学研究 BIRTHDAY）を通して共同解析（メタアナリシス）を進めている。

【千葉校】

第三世代の認知行動療法と呼ばれる新しい精神療法であるスキーマ療法を用いて、成人の自閉スペクトラム症者 10 名に対し、心理的支援を行い、2018 年に終了した。そのデータを統計解析にかけ、2019 年 3 月に英文誌に投稿し、現在まで審査中である。なお、2017 年から本年度まで、児童思春期の自閉スペクトラム症者・者および保護者に対して自閉スペクトラム症とは何かを理解させ、自身の自閉スペクトラム症に対し機能的に対処を行うことで社会適応を向上させることを狙いとした、CBT を用いた自閉スペクトラム症の心理教育プログラム「ASD に気づいてケアするプログラム（Aware and Care for my AS traits; ACAT）」を、開発した。ACAT は千葉大学と福島大学において無作為化比較試験として実施した。本研究に関するプロトコル論文は 2020 年 9 月に *Trials* に掲載された。本研究は 2020 年 8 月に終了し、2020 年 12 月にデータロックし、現在まで論文化の最中である。

学校現場における不安の予防教育プログラムとして開発した「勇者の旅」は、小学校高学年を対象に実施した予備的研究において有効性が示されたことから、2017 年度より文部科学省委託事業「子どもみんなプロジェクト」に参画し、学校現場における大規模な効果検証研究に取り組んできた。2020 年度は「子どもみんなプロジェクト」第 2 期がスタートし、引き続き千葉県、千葉市、埼玉県吉川市、京都府井手町、福岡県八女市の各教育委員会と連携しつつ、授業実践の希望があった公立小学中校 26 校にて、「勇者の旅」プログラムが実施された。プログラムの実施前後およびフォローアップの計 3 回、SCAS（スペインス児童不安尺度）の質問紙調査を依頼しており、データが揃い次第解析予定である。

通院が困難な子どもの強迫症に対する遠隔認知行動療法の実用可能性と有効性の検証について、児童の強迫症では、10～17 歳の児童強迫症患者を、1 回 50 分のセッションを 16 回行う遠隔認知行動療法群と、通常治療群に無作為に割り付け、治療効果を検証するランダム

化比較試験を行なっている。2021年3月17日現在までに16名がエントリーし、試験を実施している。来年度も引き続き試験を継続し、データ解析を行う予定である。

パニック症のオンライン認知行動療法として、プライマリーケアでの薬物療法に十分な効果を示さないパニック症患者に対してオンラインでの認知行動療法の効果検証をランダム化比較試験で行った。30名のエントリーが得られ16週間の介入を行った結果、主要評価項目であるPDSS(Panic Disorder Severity Scale)で、通常診療に認知行動療法を加えた群は通常診療単独群に比して有意に効果があることを明らかにできた。

過食症に対する遠隔認知行動療法のランダム化比較試験による安全性と有効性の検証として、精神疾患の中でも摂食障害は、COVID-19の流行の影響を大きく受け、世界的に受診数も増加した。感染のリスクを防止するために、倫理審査委員会の承認を得て、オンラインで臨床試験に参加が可能となるよう体制を整備した。2020年度は10名登録があり、現在までに14名登録が登録している。

【福井校】

コロンビア大学、UCLAとの国際共同研究で、アジア人種としての日本人の被虐待児(14検体)、一般対象児(20検体)の便検体を解析のために共同研究先へ発送済で、まもなく16S rRNA 遺伝子を用いたアンプリコンシーケンスによるマイクロバイオームの国際比較解析の結果を得る。

アジア人のための脳末梢組織メチル化相関データベース作成のためのサンプリングを継続的に行っている。現在、脳外科手術を行った14例の同一人物から脳、血液、唾液、頬粘膜試料を得、メチル化のマイクロアレイ解析、mQTLを考慮してのSNPアレイ、脳と血液に限ってはRNAseqによる全トランスクリプトーム解析を行い、遺伝子多型、メチル化、発現量と、マルチオミクス型のデータベースを作成予定である。

COVID-19流行による休校措置、活動自粛による育児ストレスへの影響をいち早く国内で発表した後、インド、マレーシア、日本という、南アジア、東南アジア、東アジアを代表する各国で、また、米国をリファレンス国と位置づけ、同様な調査を行い、アジアを網羅し、COVID-19流行による休校措置、活動自粛による育児ストレスへの影響について地域の特性を踏まえた国際比較研究を行った。また、この過程で、マレーシア・マラヤ大学のチームを含めた国際共同研究を実施した。

【弘前大学】

弘前市と協働して実施している5歳児発達健診で集積されたデータをもとに、日本の就学前児における神経発達障がいのある有病率を推定した論文がMolecular Autismに掲載された。同じく5歳児発達健診で得られた睡眠習慣に関するデータについて、上海交通大学で得られた中国のデータと比較し、アジア地域に特徴的な睡眠習慣を明らかにした論文がBehavioral Sleep Medicineに掲載された。

弘前市の1歳半健診においては、睡眠改善アプリのリクルート手続きに関する協力を得て、応募のあった親子を対象としてアプリの地域特性に応じた有用性の検証を行った。各自治体教育委員会と協働して実施している、小中学校および高校生を対象とした心のサポートアンケートのデータに関して、児童・青年の抑うつ症状を簡便にスクリーニングする尺度である PHQ-A の得点分布パターンを報告した論文が *Psychiatry and Clinical Neurosciences* に掲載された。

新型コロナウイルス感染対策として行われた臨時休校後には、福島県の教育委員会と協働してアンケート調査を実施し、新型コロナウイルス感染恐怖尺度 (FCV-19S) の日本語版を標準化した論文が *International Journal of Mental Health and Addiction* に掲載された。

● 評価項目 4 先端的知見の社会還元実績

各校が協働して実施した内容については、部会報告に記した。ここでは、各校が独自実施している内容について記す。

【大阪校】

上記睡眠アプリに関連した睡眠専門家育成教材を作成し、加賀市をはじめとした保健所にて研修会を3回開催、また、市民公開シンポジウム2件にて講演を行い、13件の報道があった。このほか、市民公開講座での講演2件、発達に関する専門家研修30件、一般小児科医を対象としたセミナー2件・発達に関する市民公開シンポジウム4件・かおTVに関する専門家研修とシンポジウム3件、報道1件があり、講演会等8件というKPIを上回る実績があった。

【金沢校】

金沢校の教員と発達障がいの当事者やその親族との交流を起点とし、社会へ知見を還元するために取り組んできた自閉症サイエンスカフェを、年度初頭に隔月で6回開催する計画を立案した。令和2年5月に予定されていた回は新型コロナウイルス感染症の拡大を防ぐためやむなく中止したが、発達障がいの当事者・その親族・支援者など年間延べ60名が参加し、闊達な議論が交わされた。この取り組みが令和3年3月6日のMRO北陸放送のテレビ番組「発達障害を理解しよう」にて紹介された。

令和2年4月2日に「世界自閉症啓発デー・ブルーライトアップ at 金沢」を「みんなでブルーライトアップ実行委員会」とweb上で共催した。

令和2年8月18日に大阪大学・加賀市と共同で実施する睡眠研究にかかわる記者会見を行った。また、吉村優子准教授は令和2年9月・令和3年2月にも出版された論文に関するプレスリリースを行っている。

令和3年3月6・7日付け北國新聞に「丈夫がいいね」のコーナーにて、菊知充教授のイ

ンタビュー記事が掲載された。

また、専門家研修を積極的にサポートし、「令和2年度カウンセラー教員養成研修講座(石川県教育研修センター)」・「石川県教育支援センター連絡協議会(石川県教育支援センター)」・「発達障害のある児童・生徒への友達づくりのSST実践に向けて(金沢市教育研修センター)」を共催した。

【浜松校】

前年度に引きつづき、浜松市からの委託を受けて、子育て支援・発達障がい児者支援のひとつである「ペアレント・プログラム」を実施し、また「ペアレント・プログラム」リーダー養成講座を浜松市および静岡県下で計3回実施した。

研究成果を地域の市民に向けて発信することを目的に、市民公開講座「子どものこころの発達研究講演会 with ルピロ」を、自閉症啓発デーにあわせて開催の準備を行った(ただし、コロナ感染の広がりを受けて、中止となった)。

また、ゲーム依存に関する市民向け公開講座にシンポジストとして特任講師西村が参加・講演を行った。

これまでと同様、浜松市における自閉スペクトラム症早期発見事業(「発達支援広場事業」)における直接支援および支援者支援を年間24回行った。

【千葉校】

うつ、不安症、強迫症、摂食障害等の子どもの罹患しやすい精神疾患、あるいは自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症等に伴う問題に対する有効性が国際的に実証されている心理療法である認知行動療法(Cognitive Behavioral Therapy; CBT)を実施できる治療者を養成する千葉認知行動療法士トレーニングコースを2010年度より設けている。このコースは、CBT治療者の絶対的な不足の解消に貢献する全国でも稀なものである。今年度は看護師、臨床心理士10名と、KPIを上回る治療者養成した。

「勇者の旅」プログラムに先立ち、学校認知行動療法指導者養成研修会をオンラインにて計3回(8月に2回・12月に1回)開催し、約120名と、KPIを上回る指導者を新たに養成した。

ACATの研修会を3回施行した。さらに、ACATプログラムのプロトコルおよびガイドブックを執筆した。

【福井校】

研究成果定着のためのRISTEX社会実装事業「エビデンスに基づくマルチリートメント予防モデル構築」は3年間の大阪2都市での社会実装を終え、母子保健、児童福祉、精神保健などの養育者に関わる多分野の支援者が共有し活用できる、子ども虐待の低減に向けた養育者を支援する研修・啓発資材研修・啓発資材を、大阪府こころの健康総合センター、豊

中市、枚方市と福井大学が協働して開発した。社会実装プロトタイプを完了し、プレスリリースを行った。

地域住民も子育て家族を支援する「とも育て（きょうどう子育て）」が「マルトリ予防」につながることを提案し、「マルトリ予防 web サイト marutori.jp（マルトリドットジェイピー）」を開設して子ども虐待の予防につながるような連携の全国への普及を展開中である。

さらには、「虐待などのマルトリートメント予防モデル構築のための研究」で令和2年度文部科学大臣表彰において科学技術賞（研究部門）を受賞した。

市民公開型の web 講演会「子どものこころを守るために～生徒指導の科学的アプローチ～」を実施した。

市民や専門家に向けて、報道（2-9件）や研修（44件）を通じた、研究知見の社会還元を図った。

【弘前大学】

福島市において、帝京大学の黒田美保先生を招致し、市民公開シンポジウム「ハイリスクへの子どもへの関わり方」を開催した。

世界自閉症啓発デーに予定されていたシンポジウムは、新型コロナウイルス感染対策のため中止されたが、市役所に ASD 当事者である Konomi（岡田好美）さんの作品をビデオ展示した。

論文のプレスリリースを4件公開し、それに付随した32件の新聞報道がなされた。

その他、各種研修会として、共共拠点活動の一環として得られた研究をベースに、校内研修会4回、ペアレントプログラム4回、保育士等キャリアアップ研修会2回、弘前市との情報交換会における講演2回、発達健診に関する研修会1回、Vineland-II 研修会1回を行い、さらに福島県で取り組んでいる「こころの授業」の資料を刊行した。

● 評価項目5 若手研究者育成実績

事業としては若手人材育成部会により、若手研究者の育成を図っている（104頁～117頁）。併せて、各校独自に若手育成に熱心に取り組んだ。その成果を記す。

【大阪校】

2020年度はCOVID-19流行の影響により、若手研究者の国内外への派遣が制限されたが、大学院生による海外学会での発表が1件あった。また、発達障がい診療ができる若手小児科医の育成と裾野の拡大を目的に、小児科専攻医を対象とした発達障がい研修会を2回開催した。

【金沢校】

令和2年1月より長谷川千秋博士研究員をマッコーリー大学（オーストラリア）に派遣しているが、令和3年度日本学術振興会海外特別研究員に採択されたことにより、令和5年度まで同大学での共同研究に従事することとなった。

同じくマッコーリー大学には令和2年8月より山田真平協力研究員を派遣している。

アン・キョンミン特任助教は当初バーミンガム大学とフィラデルフィア小児病院へ共同研究のため渡航する予定であったが、コロナ禍による計画変更があり、現在韓国標準科学研究院との共同研究に従事している。

博士課程在学中のアセップ・サエフロが第38回日本生化学会北陸支部大会において発表奨励賞を受賞した。

アン・キョンミン特任助教が Korean Society for Human Brain Mapping 2020 にて優秀発表賞を受賞した。

【千葉校】

学振特別研究員（PD）1名をスウェーデンの Linköping University へ派遣した（2020/10-2021年度末予定）。

若手研究者2名の演題が国際学会で受理され、1名はオンラインで発表（RSNA 2020 106th Scientific Assembly and Annual Meeting）し、1名は学会の実施が COVID-19 の流行のためキャンセルとなった（2020 ASHA Convention）

【福井校】

米国・スタンフォード大学医学部（メノン教授）へ海外学振 PD で留学中の、元・本学特命助教が、最先端の脳画像解析の数理処理研究を習得した。

本校に籍を置く学振 PD が、本年度、国際英文査読付き論文3本（第一著者）、査読付き和文1本（第一著者）を発表した。本校での若手研究者育成の成功例として、今後も活躍が期待できる。

本校若手研究者らの米国等、海外大学への積極的な留学を推奨した結果、2名が米国大学へ留学することが決定（日米脳、科研費・国際共同研究強化（A））し、今後、ますます、海外大学との共同研究や国際的な視点を持った人材の育成が期待できる。

AMED-BIRTHDAY 新規採択（代表）により、共同研究先の広島大学（法医学）に若手研究者（特任助教）、福井大学に若手研究者（学術研究員）を雇い、研究事業を通じた人材育成を行うと共に、法医学との連携を強化している。

【弘前大学】

国際自閉症学会（INSAR）にて大学院生2名がポスター発表（2020年5月、web開催）、国際児童青年精神医学会（IACAPAP）にて大学院生3名がポスター発表、1名がシンポジウムに登壇しており（2020年12月、web開催）、前年度よりも大学院生の発表数が増加した。

また、共共拠点年次報告会にて若手研究者1名が登壇した（2021年1月，web会議）。

● 評価項目6 アジアのハブとしての活動実績

国際ハブ化推進部会の活動（31頁～101頁）と並行して、各校それぞれが拠点となり得るべく、活動を進めた。部会の活動はすでに記したため、以下には、各校の活動にフォーカスを当て、各校での活動について述べる。

なお、本事業においては、4頁の図に示したように1. 脳イメージング，2. バースコHORTデータ，3. 生体材料等の特殊マテリアルの3つが拠点化基盤の大きな柱である。

【大阪校】

アジアとの共同研究の拠点として、COVID-19による活動の制限はあったが、国際共通レジストリの構築、COVID-19下の発達障がい児と家族のニーズ調査、睡眠質問票のアジアでの妥当性検証といった研究を推進した。また、2021年1月22日には、第2回 Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders 国際シンポジウムを大阪大学で開催した。さらに、マラヤ大学との MoU 締結に向けての協議を行い、2021年度には締結の予定である。このほかフィリピン小児医療センターとも academic MoU の締結に向け準備を進めている。

【金沢校】

広西中医薬大学より修士課程の留学生2名を協力研究員として令和2年10月まで受け入れ、薬物誘発性発達障がいモデルマウスを用いた漢方の効果を検証する共同研究を行った。「日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム」のオンラインシンポジウムを企画し、令和2年9月29日に開催した。

共同研究のためクラスノヤルスク医科大学からの研究者の招聘はコロナ禍のため実現しなかったが、web ミーティングを密に行うことで連携を強化した。

コロナ禍における支援ニーズを明らかにするため、大阪大学・マラヤ大学との共同研究をスタートさせ、発達障がいのある子どもの保護者に対し大阪、金沢とマレーシアにてアンケート調査を実施した。

【浜松校】

当初予定されていた Birth Cohort Consortium in Asia (BiCCA)への年次ミーティングには参加がかなわなかったが、同コンソーシアムの Scientific Committee に引き続き関与し、BiCCAにおける共同研究のプロトコル審査を行った。

バングラデシュにおけるあらたな国際共同コホートの立ち上げ準備を、Mohammed Shafiu Rahman 特任助教を中心として開始した。評価項目3で取り上げた妊婦の健康と子どもの予

後との関連について、わが国のデータと比較を行うことを目指している。

【千葉校】

「勇者の旅」プログラム英語版・中国語版の作成（台湾師範大学との共同研究）をすすめた。国立台湾師範大学の田秀蘭教授と毎月 1 回 web ミーティングを開催。両国内において所属機関の倫理審査委員会の承認を得た後、2021 年度より台湾国内の小学校にて「勇者の旅」プログラムのパイロットスタディ開始予定である。

【福井校】

韓国の国立研究機関である Korean Brain Research Institute の Dr. Minyoung Jung と、自閉スペクトラム症 (ASD) 児のエピジェネティクスについて、国際共同研究、交流を開始した。

前述のマレーシア・マラヤ大学のチームとの国際共同研究も始め、論文投稿の準備を行った。

【弘前大学】

国際児童青年精神医学会 (IACAPAP, 開催国シンガポール) において、幼児期の神経発達症に関する自主企画シンポジウムを企画・開催し (UCSF と共同)、弘前市と連携して取り組んでいる 5 歳児発達健診のデータを報告し、活発な議論がなされた。

● 評価項目 7 国内・国際共同研究マネジメント数

【大阪校】

共同研究では国際共通レジストリをはじめとした国際共同研究 3 件、睡眠アプリ研究をはじめとした国内共同研究 3 件を主導し、年度当初の KPI を達成した。

【金沢校】

国内・国際共同研究マネジメントは、当初国内 12 件・国際 7 件を目指していたが、予想以上の成果を得ることができた。

国内共同研究は 15 件（大阪大学・浜松医科大学・福井大学・弘前大学・東京芸術大学・金城大学・北海道大学・秋田大学・聖路加国際病院・関西医科大学・国立精神・神経医療研究センター・魚津神経サナトリウム・株式会社リコー・株式会社スカイシーファーマ・株式会社国際電気通信基礎技術研究）、国際共同研究は 11 件（クラスノヤルスク医科大学・広西中医薬大学・マッコリー大学・アイオワ大学・バヴィア大学・トレント大学・モンペリエ研究所・イースタン大学・グラスゴー大学・バーミンガム大学・韓国標準科学研究院）を達成した。次年度も既存の共同研究を深化させるとともに、新規共同研究の開拓を進める。

【浜松校】

国内では共同拠点5大学との共同研究をはじめ、名古屋大学、鳥取大学、佐賀大学、東北大学、東北医科薬科大学、東京大学、北海道大学、東京医科歯科大学、豊橋科学技術大学、岩手医科大学、獨協医科大学、慶應大学、国立成育医療センター、株式会社 JVC ケンウッド、株式会社 SBI ファーマ、島津テクノロジー株式会社との、計9件の共同研究を開始し、あるいは継続した。

海外では、ニューヨーク市立大学、マウントサイナイ医科大学、カリフォルニア大学サンフランシスコ校との、計2件の共同研究を継続した。次年度も既存の共同研究を深化させるとともに、新規共同研究の開拓を進める。

【千葉校】

国内共同研究を5件（福井大学、大阪大学、浜松医科大学、弘前大学、NCNP、広島大学）実施し、さらに国際共同研究を2件（Amsterdam UMC, Karolinska Institute）実施した。

【福井校】

国内共同研究8件、及び国際共同研究7件のマネジメントを行った。

【弘前大学】

国内においては共同拠点の連合大学院5校を含む18大学との共同研究（7件）をマネジメントしている（連合6校、北海道大、北海学園大、東北大、医療創生大、東京大、北里大、中京大、長野大、愛知東邦大、九州大、NCNP、JVCKW）。

海外においてはUCSF、上海交通大学との共同研究（4件）をマネジメントしており、いずれも共著論文として上梓されている。

令和2年度

【 資料 】

<委員会等構成員一覽>

拠点形成・推進委員会

氏名	所属
◎ 佐藤 真	連合小児発達学研究科長（大阪校）
片山 泰一	連合小児発達学研究科副研究科長（大阪校）
横山 茂	連合小児発達学研究科副研究科長（金沢校）
土屋 賢治	連合小児発達学研究科副研究科長（浜松校）
平野 好幸	連合小児発達学研究科副研究科長（千葉校）
松崎 秀夫	連合小児発達学研究科副研究科長（福井校）
中村 和彦	弘前大学大学院医学研究科教授

◎ 委員長

実行委員会

氏名	所属
◎ 佐藤 真	連合小児発達学研究科教授（大阪校）
谷池 雅子	連合小児発達学研究科教授（大阪校）
片山 泰一	連合小児発達学研究科教授（大阪校）
橘 雅弥	連合小児発達学研究科特任准教授（大阪校）
横山 茂	連合小児発達学研究科教授（金沢校）
土屋 賢治	連合小児発達学研究科教授（浜松校）
平野 好幸	連合小児発達学研究科教授（千葉校）
清水 栄司	連合小児発達学研究科教授（千葉校）
高橋 純平	連合小児発達学研究科特任助教（千葉校）
友田 明美	連合小児発達学研究科教授（福井校）
藤澤 隆史	連合小児発達学研究科准教授（福井校）
中村 和彦	弘前大学大学院医学研究科教授

◎ 委員長

共同研究推進・国際ハブ化推進部会

氏名	所属
◎ 橘 雅弥	連合小児発達学研究科特任准教授（大阪校）
菱谷 好洋	連合小児発達学研究科特任助教（大阪校）
辻 知陽	連合小児発達学研究科准教授（金沢校）
池田 尊司	連合小児発達学研究科助教（金沢校）
西村 倫子	連合小児発達学研究科講師（浜松校）
原田 妙子	連合小児発達学研究科助教（浜松校）
久能 勝	連合小児発達学研究科特任助教（千葉校）
謝 敏かく	連合小児発達学研究科助教（福井校）
西谷 正太	連合小児発達学研究科特命助教（福井校）
高橋 芳雄	弘前大学大学院保健学研究科准教授

◎ 部会長

拠点化基盤推進部会

氏名	所属
◎ 土屋 賢治	連合小児発達学研究科教授（浜松校）
吉村 武	連合小児発達学研究科講師（大阪校）
An Kyung-Min	連合小児発達学研究科助教（金沢校）
矢追 健	連合小児発達学研究科助教（金沢校）
関 陽一	連合小児発達学研究科助教（千葉校）
藤澤 隆史	連合小児発達学研究科准教授（福井校）
謝 敏かく	連合小児発達学研究科助教（福井校）
齊藤 まなぶ	弘前大学大学院医学研究科准教授

◎ 部会長

社会実装支援部会

氏名	所属
◎ 清水 栄司	連合小児発達学研究科教授（千葉校）
奥野 裕子	連合小児発達学研究科准教授（大阪校）
田中 早苗	連合小児発達学研究科助教（金沢校）
岩淵 俊樹	連合小児発達学研究科助教（浜松校）
浦尾 悠子	連合小児発達学研究科講師（千葉校）
松崎 秀夫	連合小児発達学研究科教授（福井校）
島田 浩二	連合小児発達学研究科助教（福井校）
新川 広樹	弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター特任助手

◎ 部会長

若手人材育成部会

氏名	所属
◎ 谷池 雅子	連合小児発達学研究科教授（大阪校）
辻 知陽	連合小児発達学研究科准教授（金沢校）
土屋 賢治	連合小児発達学研究科教授（浜松校）
中川 彰子	連合小児発達学研究科教授（千葉校）
松崎 秀夫	連合小児発達学研究科教授（福井校）
齊藤 まなぶ	弘前大学大学院医学研究科准教授

◎ 部会長

広報委員会

氏名	所属
◎ 友田 明美	連合小児発達学研究科教授（福井校）
片山 泰一	連合小児発達学研究科教授（大阪校）
毛利 育子	連合小児発達学研究科准教授（大阪校）
横山 茂	連合小児発達学研究科教授（金沢校）
土屋 賢治	連合小児発達学研究科教授（浜松校）
西村 倫子	連合小児発達学研究科講師（浜松校）
中川 彰子	連合小児発達学研究科教授（千葉校）
沼田 法子	連合小児発達学研究科助教（千葉校）
藤澤 隆史	連合小児発達学研究科准教授（福井校）
齊藤 まなぶ	弘前大学大学院医学研究科准教授
新川 広樹	弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター特任助手

◎ 委員長

外部評価委員会

氏 名	所 属
吉川 武男	理化学研究所脳神経科学研究センター分子精神遺伝研究チーム チームリーダー
松本 英夫	東海大学医学部専門診療学系精神科学 教授
丹野 義彦	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 広域科学専攻生命環境科学系 教授
眞弓 光文	前福井大学長
三邊 義雄	厚生連 高岡病院 精神科診療部長

アドバイザーボード

氏 名	所 属
田中 敏宏	大阪大学理事・副学長
山崎 光悦	金沢大学長
北川 雅敏	浜松医科大学副学長（研究担当）
竹内 比呂也	千葉大学副学長
上田 孝典	福井大学長
若林 孝一	弘前大学副学長
森 則夫	静岡県医療法人社団木野記念会福田西病院 病院長

(順不同)

<関連規程一覧>

○大阪大学 新たな共同利用・共同研究体制の充実「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業拠点形成・推進委員会等に関する規程

(設置)

第1条 大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所（以下「連合小児発達学研究所」という。）附属子どものこころの分子統御機構研究センターに、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業実施のため、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業拠点形成・推進委員会（以下「拠点形成・推進委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 拠点形成・推進委員会は、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業を、円滑に、かつ共創的視点のもと社会に還元しうる高い水準で実施することを目的とする。

(事業実施体制)

第3条 前条の目的を達成するため、拠点形成・推進委員会の下に、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業実行委員会（以下「実行委員会」という。）、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業広報委員会（以下「広報委員会」という。）及び「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業アドバイザーボード（以下「アドバイザーボード」という。）を置く。

(拠点形成・推進委員会)

第4条 拠点形成・推進委員会は、事業実施方針を策定し、事業内容を立案・計画する。

2 拠点形成・推進委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 連合小児発達学研究所長
- (2) 連合小児発達学研究所副研究所長
- (3) 第2条の目的に関連する弘前大学大学院医学研究科教授1名
- (4) その他委員長が必要と認めた者

3 前項第3号及び第4号の委員の任期は、1年を超えない範囲内で委員長がその都度定める。ただし、任期は令和4年3月31日を超えないものとする。

- 4 委員は、再任を妨げない。
- 5 拠点形成・推進委員会に委員長を置き、連合小児発達学研究科長をもって充てる。
- 6 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 7 委員長に支障のあるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。
- 8 拠点形成・推進委員会は、委員の過半数の出席をもって成立するものとする。
- 9 拠点形成・推進委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 10 拠点形成・推進委員会では、委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。
- 11 この規程に定めるもののほか、拠点形成・推進委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(実行委員会)

第5条 実行委員会委員長は、拠点形成・推進委員会委員長が指名する。

- 2 実行委員会委員長の任期は、3年を越えない範囲で拠点形成・推進委員会委員長がその都度定める。
- 3 この規程に定めるもののほか、実行委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(広報委員会)

第6条 広報委員会委員長は、拠点形成・推進委員会委員長が指名する。

- 2 広報委員会は、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業の広報に関する事項を審議し、実行する。
- 3 広報委員長は、各大学から若干名の広報委員を指名して組織する。
- 4 広報委員の任期は、拠点形成・推進委員会委員長が定める。

(アドバイザーボード)

第7条 拠点形成・推進委員会委員長は、共創的視点を有し子どものこころに関し広くかつ高い見識を有する者をアドバイザーボード委員として委嘱する。

- 2 前項の委員は、本事業の推進、計画、実施内容などについて、その専門性に基づき、拠点形成・推進委員会委員長の求めに応じ、助言を行うものとする。
- 3 アドバイザーボード委員の任期は、拠点形成・推進委員会委員長が定める。

(事務)

第8条 拠点形成・推進委員会等に関する事務は、大阪大学医学系研究科事務部で行う。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、拠点形成・推進委員会及び関連する委員会等に関し必要な事項は別に定める。

附 則

この規程は、平成31年4月4日から施行し、平成31年4月1日から適用する。

附 則

この改正は、令和元年8月26日から施行し、令和元年8月8日から適用する。

○大阪大学 新たな共同利用・共同研究体制の充実「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業実行委員会規程

(趣旨)

第1条 この規程は、大阪大学 新たな共同利用・共同研究体制の充実「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業拠点形成・推進委員会等に関する規程第5条第3項に基づき、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業実行委員会（以下「委員会」という。）に関し必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業（以下「本事業」という。）の運営と実行に関すること。
- (2) 本事業の予算執行計画，決算に関すること。
- (3) 本事業の予算要求に関すること。
- (4) その他本事業の運営に関する必要な事項

(組織)

第3条 委員会は次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 委員長
 - (2) 参加大学における，子どものこころの研究センター長もしくは相当する組織の長，または子どものこころの研究センター長から指名を受けた者
 - (3) 共同研究推進部会，国際ハブ化推進部会，拠点化基盤推進部会，社会実装支援部会，若手人材育成部会の部会長
 - (4) その他 委員長が必要と認めた者
- 2 前項（4）の委員は3年を超えない範囲で委員長がその都度定める。

(委員長)

第4条 委員長は，委員会を招集し，その議長となる。

- 2 委員長に支障のあるときは，あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。

(部会)

第5条 委員会に以下の部会を置く。

- (1) 共同研究推進部会
- (2) 国際ハブ化推進部会
- (3) 拠点化基盤推進部会
- (4) 社会実装支援部会
- (5) 若手人材育成部会

(事務)

第6条 委員会に関する事務は，大阪大学医学系研究科事務部で行う。

(雑則)

第7条 この規程に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は別に定める。

附 則

1. この規程は、令和元年8月8日から施行する。
2. 当分の間、共同研究推進部会と国際ハブ化推進部会は、共同研究推進・国際ハブ化推進部会として活動する。

○大阪大学 新たな共同利用・共同研究体制の充実「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業広報委員会規程

(趣旨)

第1条 この規程は、大阪大学 新たな共同利用・共同研究体制の充実「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業拠点形成・推進委員会等に関する規程第6条第3項に基づき、「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業広報委員会（以下「委員会」という。）に関し必要な事項を定めるものとする。

(活動内容)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項を審議し実行する。

- (1) 「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業（以下「本事業」という。）の事業内容、成果などの広報に関すること。
- (2) 本事業のホームページの作成、運営に関すること。
- (3) その他広報を通じて円滑な運営及び活動に資すること。

(組織)

第3条 委員会は次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 委員長
- (2) 参加大学における委員長から指名を受けた者
- (3) その他 委員長が必要と認めた者

2 前項第3号の委員の任期は3年を超えない範囲で委員長がその都度定める。

(委員長)

第4条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長に支障のあるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。

(事務)

第5条 委員会に関する事務は、大阪大学医学系研究科事務部で行う。

(雑則)

第6条 この規程に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は別に定める。

附 則

この規程は、令和2年4月1日から施行する。

○大阪大学 新たな共同利用・共同研究体制の充実「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業に関する各部会内規

(趣旨)

第1条 大阪大学 新たな共同利用・共同研究体制の充実「子どものこころの研究センターから展開する国際研究拠点の形成と社会実装」事業（以下「本事業」という。）実行委員会規程第7条に基づき、本事業の部会に関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 本事業部会は、本事業を円滑に実施することを目的とする。

(共同研究推進部会の業務内容)

第3条 共同研究推進部会の部会長は実行委員長が指名し、部会長が各大学から若干名の部会委員を指名して組織する。

2 共同研究推進部会は次の各号に掲げる事項を審議、実行する。

- (1) アジアコンソーシアムのハブ拠点化推進に関すること。
- (2) 国内共同研究・交流の推進に関すること。
- (3) 国際共同研究・交流の推進に関すること。
- (4) その他部会に関すること。

(国際ハブ化推進部会の業務内容)

第4条 国際ハブ化推進部会の部会長は実行委員長が指名し、部会長が各大学から若干名の部会委員を指名して組織する。

2 国際ハブ化部会は次の各号に掲げる事項を審議、実行する。

- (1) 本事業の国際ハブ化の推進に関すること。
- (2) その他部会に関すること。

(拠点化基盤推進部会の業務内容)

第5条 拠点化基盤推進部会の部会長は実行委員長が指名し、部会長が各大学から若干名の部会委員を指名して組織する。

2 拠点化基盤推進部会は次の各号に掲げる事項を審議、実行する。

- (1) 本事業の拠点化基盤強化にかかる先端的研究の推進に関すること。
- (2) その他部会に関すること。

(社会実装支援部会の業務内容)

第6条 社会実装支援部会の部会長は実行委員長が指名し、部会長が各大学から若干名の部会委員を指名して組織する。

2 社会実装支援部会は次の各号に掲げる事項を審議、実行する。

- (1) 自治体等と連携した社会実装の支援に関すること。
- (2) 社会実装の国際展開支援に関すること。
- (3) その他部会に関すること。

(若手人材育成部会の業務内容)

第7条 若手人材育成部会の部会長は実行委員長が指名し、部会長が各大学から若干名の

部会委員を指名して組織する。

2 若手人材育成部会は次の各号に掲げる事項を審議，実行する。

(1) 若手人材育成に関すること。

(2) その他部会に関すること。

(事務)

第8条 部会に関する事務は，大阪大学医学系研究科事務部で行う。

(雑則)

第9条 この内規に定めるもののほか，部会に関し必要な事項は別に定める。

附 則

1. この内規は，令和元年8月8日から施行する。

2. 当分の間，共同研究推進部会と国際ハブ化推進部会は，共同研究推進・国際ハブ化推進部会として活動する。

<委員会議事要旨>

① 共同利用・共同研究拠点形成・推進委員会 議事要旨

第7回（令和2年度第1回）共同利用・共同研究拠点形成・推進委員会議事要旨

日 時：令和2年5月8日（金）13：00～

場 所：各校講義室にて遠隔講義システムにより開催, 一部 Zoom にて参加。

弘前大学, 千葉校は Zoom により参加

事務 片桐補佐, 瀬戸専門職員は Zoom により陪席

構成員：大阪校 佐藤 真 研究科長（委員長）, 片山泰一 副研究科長

金沢校 横山 茂 副研究科長

浜松校 土屋賢治 副研究科長

千葉校 平野好幸 副研究科長

福井校 松崎秀夫 副研究科長

弘前大学 中村和彦 教授

・佐藤委員長から資料1（前回議事要旨）はすでに承認済みであるが、問題があれば連絡してほしい旨の説明があった。

議 題：協議事項

1 令和2年度の活動計画について【資料2-1, 2-2, 資料3】

・佐藤委員長より, 本事業は3年計画であり, 来年の継続申請については本年度の活動実績が重要であること, そのために本年度の活動に全力を尽くす必要があること, そのために, 拠点としてふさわしいかどうか, アジアのハブとして役割を果たすことができるかにおいて, 各校が積み上げてきた成果をしっかりと示すことが重要である旨説明があった。

・【資料2-1】各校の令和2年度の活動計画について各校副研究科長から説明があった。

[大阪校] 各評価項目にそって説明。コロナの影響により具体的な年度進行についての見通しが立たないため, 確定的ではない予定が多い。

[金沢校] 通年として記載のものは, ほぼ既に活動中である。今年度はじまるものは5月以降に記述。KPIについても昨年度よりは数字を上げてゆく予定。

[浜松校] 项目的には活動が均等ではない。昨年度より継続している事業についてもコロナウイルスの影響があるので最終的な成果は2021年度になる見込み。現在, 海外への派遣予定はないが, 海外からの交流による若手育成を計画。

[千葉校] 計画表に記述しきれないが, 何名か研究員を派遣する予定がある（デンマーク）。また, 昨年行うことができなかった台湾でのシンポジウム開催も考えている。

[福井校] 昨年度からの継続案件が多い。本年度は広島大学から新スタッフを迎える。コロナウイルスの影響で海外との連絡が難しくなっていることが気になり。

[弘前大学] 国際的には上海交通大学との共同研究を中心に進める。メンタルヘルス関連では地域の特色を出してゆきたい。国際学会への参加を目標としているが5月の学会が中止となり, 秋以降も不透明なため, 確実な予定が立てられない。

- ・佐藤委員長より、各校で KPI についての記述がないところが多く、各校の強みや特色について内容を深めた記述としていただきたい旨要望があった。会議後に各校で追記していただき、1 週間をめぐりに再度提出を依頼した。また、実行委員会が未開催であるため、5 月 13 日（水）の開催後に各部会の活動計画について情報共有する旨説明があった。
- ・福井校から質問：KPI の記述について
 KPI の記述は全体ではなく、各校単位のものでよいのか。全体の、一体的な記述が必要なのではないか。
 [佐藤委員長より回答]
 これは報告書として文部科学省に提出する内容ではないため問題ない。また、各校の特色をはっきりとさせ、結果として各校が協力して活動している形を見せることもできるので、各校として記述いただきたい。
- ・【資料 2-2】佐藤委員長より、広報委員会の活動計画について、以下の説明があった。
 - 1) 先月から共共拠点事業のロゴについて、藤澤先生を中心にクリエイティブユニットとの打合せを開始した。クリエイティブユニットの方でロゴの候補案をいくつか作成していただき、そのあと広報委員会で選定に入る予定である。
 - 2) 共共拠点事業の HP のドラフトを作成済みであり、今後様々な HP へリンクを張ってゆく必要がある。紹介ページの英語版、中国語版などの作成を鋭意進めていく予定である。
- ・【資料 3】佐藤委員長より、実行委員会の活動計画について、活動計画案として各部会の説明を行った。
 - ・共同研究推進・国際ハブ化推進部会：
 今年度は REDCap の導入がある。活動を前倒しして行くと評価が高くなるため、当初予定より早めの動きとなっている。
 - ・拠点化基盤推進部会：共同研究推進・国際ハブ化推進部会と協力しあってゆく。
 - ・社会実装支援部会：子どもみんなプロジェクトを中心に活動。
 - ・若手人材育成部会：活動実態を年度後半に集中させる。
- 2 令和元年度の報告書作成について
 - ・佐藤委員長より、現在各部会別に報告書を提出いただいているが、やはり各校の評価項目にのっとった報告も行う必要があると考えるため、各校に評価項目 1-7 にのっとり、また各拠点としての特徴的な強みを記述いただき、全体としての報告書としてまとめた旨説明があった。
 - ・弘前大学から質問（確認）：
 文章として、昨年度の活動の報告書をまとめるということか。
 [佐藤委員長から回答]
 その通り。昨年度の活動を Word や PDF として送っていただきたい。資料も併せていただきたい。
 - ・改めて事務局から参考資料とともに案内をするので、今月中に提出をお願いする。

- 1 令和元年度の教員の雇用について【資料4】
 - ・弘前大学の中村委員より、教員の雇用について説明があった。
- 2 令和2年度の委員名簿について【資料5】
 - ・委員の変更についてはハイライトをつけているが、その他の項目について訂正などがあればご連絡いただきたい旨依頼があった。

以 上

第8回（令和2年度第2回） 共同利用・共同研究拠点形成・推進委員会 議事要旨

日 時：令和2年11月12日（木）11：00～11：28

場 所：各校にて Web 会議（Zoom）により開催

構成員：大阪校 佐藤 真 研究科長（委員長）

片山 泰一 副研究科長

金沢校 横山 茂 副研究科長

浜松校 土屋賢治 副研究科長

千葉校 平野好幸 副研究科長

福井校 松崎秀夫 副研究科長

弘前大学 中村和彦 教授

陪席：大阪校 片桐、瀬戸、段家（事務局）

委員長から資料1（前回議事要旨）は問題があれば、会議中に指摘してほしい旨の説明があったが、特段の意見は出されず、了承された。

議 題： <協議事項>

1. 外部評価委員、アドバイザリーボード委員からの評価について 【資料2】

・委員長より、アドバイザリーボード委員の先生方には来年度の概要のご説明を含め、本年度中（来年1月、2月頃）にアドバイスをいただくのはどうか、また外部評価委員の先生方には、最終事業評価という観点から、次年度に評価いただくというのはいかがでしょうかと提案があった。反対意見は出なかったため、外部評価委員、アドバイザリーボード委員ともに、上記スケジュールにて実施することで了承された。

・評価方法として、書面による方法、Zoom など Web 会議にてアドバイスいただく方法などが検討されたが、必要に応じ、Zoom なども用い、委員長と各校担当者にてそれぞれアドバイザリーボードの先生に説明しアドバイスを受ける方法をとることとなった。

・評価内容については、改めてフォーマットを作るなど、今後詳細をつめることとなった。

2. 令和3年度概算要求について 【資料3】

・委員長より、令和3年度の概算要求額について以下のとおり説明があった。

令和3年度は共共事業3か年の最終年となる。最終的に本年度配分額と同額で申請し、財務省にも同額で書類が発出されている。おそらく10%のシーリングがかかるのではないかと予想している。その場合、人件費などを各校にどう配分し、事業を行っていくかを検討していく必要がある。各校の人件費を10%削減して配分、または業績・成果に応じて配分など、対応を検討していかなければならない。

その後、意見交換が行われ、本年度はCOVID-19の影響もあり活動に制限がある中、業績を評価するのは難しい、各校均等イーブン配当でよいのではないかと、始まったばかりの事業であり現段階で厳しく査定するのはどうか、各部会の活動がこの事業の活動になっているので、各部会への予算配分については考えていきたいなどの意見が出された。

結論として、大きなアクセントはつけないが、令和4年度（次々年度）の予算申請の際にはそのあたりの工夫をしながら申請要求していく、令和3年度配分額については予算額が確定した際に改めて議論するという事で合意した。同時に、部会の活動が本事業の肝でもあり、その活動に資す経費の確保を優先したいとの説明が委員長よりあり、特段の異議はでなかった。

3. 令和4年度概算要求事業計画について 【資料4】

・委員長より令和4年度の概算要求事業計画案について以下のとおり説明があった。継続事業であり、金額については令和3年度と同額にすべきという意見もあったが、ルール上は仕切り直しの年なので、今後のさらなるシーリングも見据えて増額し、案として作成している。実際の申請は来年度ではあるが、大阪大学内では内部調整している。内容としては令

和 3 年度までと大きく変わりはないが、「事業の必要性」の部分において、COVID-19 の取り組みと、今までの実績、またその取り組み内容が前倒しで進んでいることを明記している。まだ完成途中なので、委員の先生方には内容をご確認頂き、追記事項などがあれば 1 週間以内にお知らせいただきたい。ポンチ絵等についてもこの内容を元に作成していく。協議の結果、事業の方向性、予算を増額して申請することの是非が確認されたが、反対意見が出なかったため、了承された。また、今後も文科省とのやり取りが想定されるので、委員の先生方にもご協力いただきたい旨、委員長から委員に依頼があった。

4. その他

・弘前大学・中村委員より「ブレインバンク・バイオリソース部門」についての内容質問があり、佐藤委員長、片山委員より回答があった。

以 上

第9回（令和2年度第3回） 共同利用・共同研究拠点形成・推進委員会 議事要旨

日 時：令和3年2月12日（金）14：00～14：35

場 所：各校にてWeb会議（Zoom）により開催

構成員：大阪校 佐藤 真 研究科長（委員長）

片山 泰一 副研究科長

金沢校 横山 茂 副研究科長

浜松校 土屋賢治 副研究科長

千葉校 平野好幸 副研究科長

福井校 松崎秀夫 副研究科長

弘前大学 中村和彦 教授

陪席： 大阪校 片桐、瀬戸、段家（事務局）

議事：

◇ 議事に先立ち、委員長から前回開催（11月12日）の議事要旨の確認があった。【資料1】

<協議事項>

1. アドバイザリーボードの先生方へご助言の依頼について 【資料2-1, 2-2】
 - ・委員長より、配布資料に基づき、アドバイザリーボードの先生方への助言の依頼について説明があり、協議の結果、依頼及び日程調整は各校の委員から行い、その時期は、3月末か4月初旬に行うことで、承認された。
2. 令和2年度の予算執行状況と令和3年度の予算案について 【資料3】
 - ・委員長より、配布資料に基づき、令和2年度の予算執行状況及び今後の執行について説明があり、意見交換の結果、承認された。
 - ・委員長より、配布資料に基づき、令和3年度の予算については令和2年度比96.4%であり、前回委員会で決議された内容を基に配分案を作成した旨説明があり、意見交換の結果、承認された。
3. 令和4年度事業申請について 【資料4-1, 4-2, 4-3, 4-4】
 - ・委員長より、配布資料に基づき、令和4年度事業の申請内容、申請額について説明があった。

<報告事項>

1. 第2回国際シンポジウムについて 【資料5】
 - ・委員長より、配布資料に基づき、報告があった。

以 上

② 共同利用・共同研究拠点・実行委員会 議事要旨

第 5 回（令和 2 年度第 1 回）共同利用・共同研究拠点形成・実行委員会議事要旨

日時：令和 2 年 5 月 13 日（水）13：00～13：38

場所：各校講義室にて遠隔講義システムにより、一部 Zoom により開催

出席者：大阪校 佐藤 真（委員長）

谷池雅子 委員（Zoom により参加）

片山泰一 委員

金沢校 横山 茂 委員

浜松校 土屋賢治 委員

千葉校 平野好幸 委員

清水栄司 委員

福井校 友田明美 委員（Zoom により参加）

藤澤隆史 委員

弘前大学 中村和彦 委員

欠席者：大阪校 橘 雅弥 委員

千葉校 高橋純平 委員

議題：

1. 実行委員の追加,各部会委員の変更について【資料 1-1,1-2,1-3】

・佐藤委員長より、【資料 1-2】第 3 条（4）に基づき、【資料 1-1】のように片山委員を実行委員会委員として追加する提案があり、認められた。

・【資料 1-3】橘委員より要望があり、部会内規の修正について審議した。各部会のもとに当該部会長の判断により、ワーキンググループを設置することが可能となる文言の追加について審議し、認められた。

2. 令和 2 年度の活動予定について【資料 2-1,2-2-1,2-2-2,2-2-3,2-2-4,2-2-5,2-2-6,2-2-7】

・【資料 2-1】実行委員会全体としては 5 月、10 月、1 月及び 3 月に委員会を開催し、1 月にシンポジウムの開催する事が認められた。

・【資料 2-1】各部会長より活動予定の概要を説明した。共同研究推進・国際ハブ化推進部会は佐藤委員長より説明した。

・共同研究推進・国際ハブ化推進部会：①5 月の活動として「国際臨床レジストリ倫理申請」とあるが、REDCap で作成するレジストリについて、倫理委員会に申請予定である。申請時に共同研究施設の責任者として各大学 1 名以上の先生の名前をあげることに依頼があった。必ず臨床に当たっている先生であること。5 月 20 日までに実行委員長、または各大学の国際ハブ化部会員を通じて国際ハ

ブ化部会長まで提出する旨、依頼した。審査は大阪大学で一括して行う旨、説明した。

②学内および学外からの共同研究公募について準備中である旨説明があった。この中で、【資料 2-2-3】 p.1 の「計画共同研究」のテーマについて【資料 2-2-7】に挙げた項目について議論した結果、当初 4 項目となっていた共同研究テーマを 3 項目にまとめる事で合意した。募集は 6 月末までとし、審査は部会で行うこととした。

・土屋部会長より、テーマについて当初は 6 大学の個別の強みを生かしたものとする案もあったが、それぞれのテーマに縛られず 6 大学で共同し重なり合うように、新しいテーマとしてつながることをきたしてこのような形となった旨、説明があった。

〔中村委員より質問〕テーマについては、この中から選択していくという理解で良いのか。→最終的には橋部会長の方から先生方をご指名してお願いするイメージになるかと思う。

・拠点化基盤推進部会：6 大学の先端に立ち、拠点を拠点たらしめる基盤整備を行う。具体的な作業内容は共同研究推進・国際ハブ化推進部会と不可分で密接なものとなるため、橋部会長とともに協力して進めていくこととなる。特に、倫理的検討の問題において、現在はゲノムデータなどの扱いはないものの、今後はレギュレーションの考えに偏らず、これらのデータを生かす方向でいくべきと考える。また、REDCap に載らない画像などの大きなデータの扱いを今後検討していく。

・社会実装支援部会：「子どもみんなプロジェクト」を、今年度から千葉校で引き継ぐこととなり、どのような形で進めてゆくのか相談中である。6 月には Web 会議「先端的知見の社会還元実績の調査 依頼」を行い、シンポジウム、報道、研修などそれぞれの回数を、KPI の数値を意識しながら活動をすすめ、2 月に取りまとめを行う。教育委員会と連携する社会実装について「子どもみんなプロジェクト」の第 2 期としても、可能であれば国際的な視点での成果も上げていきたい。

・若手人材育成部会：今年度は COVID-19 の影響で活動の目途が立たず、40 万円の予算を全て年度後半に集中させることとし、それについて現在第 1 回部会をメール審議している。10 月に第 2 回部会を同じくメール審議で行い、支援対象者を決定する予定である。

・佐藤委員長より、各部会に配分できる予算が少なく申し訳ない事であるが、各

校におかれてもさらに研究予算の獲得に一層のご尽力を賜りたい旨、依頼があった。

・佐藤委員長より、資料 2-1 について、さらに KPI などの追記を、1 週間をめぐりに依頼があった。また、これらの記述は活動を制限するものではない旨、改めて確認した。

3. 令和 2 年度の予算執行計画について【資料 3】

・各部長より予算計画の概要を説明した。共同研究推進・国際ハブ化推進部会は土屋部会長および佐藤委員長より説明した。

・共同研究推進・国際ハブ化推進部会・拠点化基盤部会：土屋部会長より、主に①共同研究支援 ②倫理審査 ③シンポジウムに予算を執行する予定である旨、説明があった。COVID-19 の影響により予算残や遅れが発生した場合は、共同研究支援により多くの資金を配分することもありうるとの意見があった。

・佐藤委員長より、シンポジウムは実行委員会全体で行う考えである旨、説明があった。また、今回海外公募にあたり、専門的に英訳版を作成したことで予算を執行している旨、説明した。

・社会実装支援部会：清水部会長より、国際展開に向けて活動が活発化するのであれば、そちらに重点的に配分いただいてもよい旨、意見があった。現在も台湾師範大学との交流を行っている旨、報告があった。

・若手人材育成部会：世界的に厳しい状況下のため、本年度の活動には困難が伴うことを心配しているとのコメントがあった。

4. 令和 2 年度国際シンポジウムについて

・佐藤委員長より、昨年度のシンポジウムは大変な好評を博したので、本年度も連絡会と合同で同日、またはその前後に日程を調整して開催したい、またこれは実行委員会として開催する予定であるためご協力頂きたい旨、依頼があった。

5. その他・佐藤委員長より、全体を通じて各委員に意見を求めた。

[谷池委員より] COVID-19 の影響で活動が引き続き制限される見込みであるが、次回の継続申請では付度いただけるのであろうか、何らかのロビー活動が必要ではないか。→自分も大変心配している。特にアジアとの連携については、インドネシアなど感染拡大が続き連携先研究者との連絡も困難である。しかし、一方で台湾などは改善が見られるため、出来るところから「見える化」を進めていきたい。

〔友田委員より〕同じく、COVID-19 の影響が長引いた場合に研究交流が予定よりもかなり先になる事を危惧している。→逆に、「COVID-19 の影響下でも、これだけのことができた」という成果を見せたい。

〔横山委員より質問〕共同研究募集を国内外で 5・6 件、としているが、念のために各校として何件ずつ考えておけばよいか。また、REDCap に掛かる倫理委員会のために上げる研究者の条件についてもう一度ご説明いただきたい。→目安として 1・2 件になるかと思うが、件数にこだわらず部会で全体として検討して決定したい。推薦いただく先生方については、臨床の先生であること、各校で責任者となっていただけの事が必要条件となる旨、再度確認した。

以上

第6回（令和2年度第2回）共同利用・共同研究拠点形成・実行委員会議事要旨

日 時：令和2年8月6日（木）9：30～10：07

場 所：各校にてWeb会議（Zoom）により開催

出席者：大阪校 佐藤 真 実行委員長、谷池雅子委員、片山泰一委員、橘 雅弥委員
金沢校 横山 茂 委員
浜松校 土屋賢治 委員
千葉校 平野好幸 委員、清水栄司 委員、高橋純平 委員
福井校 友田明美 委員、藤澤隆史 委員
弘前大学 中村和彦 委員
事務局 段家恭子

議題：

- ・佐藤実行委員長より前回議事要旨【資料1】についての内容確認。意見、問題等があれば連絡してほしい旨の説明があった。

1. 令和2年度事業計画の進捗状況と今後の活動について【資料2-1, 2-2】

- ・佐藤実行委員長より、COVID-19の影響があるが、その中でも事業を進めているという実績が重要である、今後の具体的に何ができるのかを協議し、今後の方向性について改めて確認していきたいという主旨説明があった。
- ・橘委員より【資料2-1】についての説明があった。2019年当初の計画案に、現在の進捗状況を記している。一部項目については前倒しで進行しているが、進行中のものをできるだけ「達成済」に、また準備中のものをできるだけ「進行中」もしくは「達成済」にもっていく必要がある。

各部会より進捗状況報告

[共同研究推進・国際ハブ化推進部会]（橘委員より報告）

- ・「共同研究における倫理審査の課題の分析と対策」については、発達障がい共通レジストリ作成についての倫理審査を、大阪大学で6大学一括申請できるように進めている。今後の共同研究については、一括申請することで費用・時間の短縮、事務作業の削減が期待できる。
- ・「アジア・コンソーシアム形成に向けたネットワーク形成・連携の推進」については、COVID-19の影響下においても具体的連携を図っていく必要があると考える。千葉校-台湾、浜松校-バングラデシュの事例などについては、事業としての連携を考えていきたい。またすでに連携をすすめている4ヶ国とは、共同研究、共通レジストリについてZoom会議を開催していきたい。
→[佐藤委員長より]Zoom会議については積極的に行っていくこと、秋口までに開催してほしいこと、その際には委員全員にその情報を流すよう依頼があった。
- ・共同研究の具体的内容については、共通レジストリ、COVID-19関連の共同調査、勇者の旅のアジアでの業務拡大、睡眠質問票のアジアでの標準化などは、実際に現地でも倫理委員会に申請中である。
→[佐藤委員長より]これについても、委員全員に情報共有をお願いしたい。
- ・「アジアの国際ハブとして国際共同研究の推進」については、国際共通レジストリの準備を進めており、各大学の臨床の先生方とWGを立ち上げ、一括申請のための

書類作成を各校に依頼中。8月中には申請までもっていききたい。阪大病院未来医療開発部からも必要であればサポートをいただけることになっている。

[社会実装支援部会] (清水委員より報告)

- ・ 「子どもみんなプロジェクト」について、引き続き6大学の協力、支援をお願いしたい。

[若手人材育成部会] (谷池委員より報告)

- ・ 年度の前半後半で若手海外渡航支援を行う予定であったが、COVID-19により前半期の支援は不可能であった。後半期は現在検討中。現在も海外渡航が見通せないの
で、難しいかもしれない。メール審議にて協議していく。
- ・ 佐藤委員長より事業全体の進捗状況について説明があった。文科省には予算申請書類を提出済である。また令和元年度の事業報告書を作成中であり、来週中には各校先生方に最終チェックをしていただき、印刷、発刊していく。事業計画については、事業を前倒しで進めていることを示すことで、2022年度以降の事業延長を獲得していきたいと考える。
- ・ 佐藤委員長より各校別の進捗状況の確認。【資料 2-2】各校での活動目安として参考にしていただきたい旨と、変更、追加などあれば大阪校に連絡していただきたい旨の説明があった。

2. COVID-19 を見据えた研究支援について 【資料 3-1, 3-2】

- ・ 佐藤委員長より、予算について、COVID-19 向けの予算獲得していく工夫、対処が必要であり、これを踏まえた研究支援を行っていく必要がある旨の説明があった。これについて、最初に推進委員会に説明、依頼をし【資料 3-1】、候補としてあがってきた研究課題が【資料 3-2】である。この中から実行委員会で協議し、支援研究を決定していきたい。支援予算については、国際ハブ化推進部会から30万円を捻出し、1件あたり15万円程度になる。またトップダウンでの支援ということも考慮すると、成果に応じた配分支援ということも考えられる。佐藤委員長より各研究課題についての説明が求められた。

各研究課題説明【資料 3-2】

- ① 弘前大学・中村委員より、この研究課題については、科研の国際共同研究として申請しているとの説明があった。現在進行中ではなく、今後進めていく研究であり、現地での活動費用が大半を占めるので、現地(台湾)に行かないといけない。
→[佐藤委員長より]研究が進んだときに支援検討していきたいと考える。
- ② 金沢校・辻先生の研究課題について、横山委員より説明があった。ONLINEで介入する研究であり、もともとのASDにコロナ感染症を付け加えた形である。外国展開はまだ先になるのではないかと考える。
→[佐藤委員長より]辻先生については共同研究のほうでご支援をしている。またこちらにも実際に海外展開が始まれば、支援検討できるのではないかと考える。
- ③ 大阪校・山本先生の研究課題について。新川先生、金沢校の田中先生、福井大学(クロスアポイントメント)、マラヤ大学との共同研究であり、すでにやり取りが始まっていると聞いている。
→[谷池委員より]大阪校だけではなく、連合の枠組みを使って広く研究を行うよう指示はしている。

→[橘委員より]この研究については先に4ヶ国の大学に投げかけをし、マラヤ大学が手を挙げた。実際に山本先生とマラヤ大学の先生の間で、調査項目については内容がほぼ固まり、倫理審査に入る状況と聞いている。

- それぞれの課題説明を踏まえ、佐藤委員長より、実際にすでに研究が動き始めている③の研究について、今回はトップダウンで支援していきたいと旨の意見が出された。予算金額は15万円。残りの15万円については、①②の研究の進捗状況に応じて、支援検討していきたいと意見が述べられ、他の委員の考えを求めた。
- 福井校・友田委員より、③の研究に賛同意見が出された。また福井校では、COVID-19感染拡大によるロックダウン（休校措置）に伴う養育者の育児ストレスについてのWeb調査研究に関しては、すでに本年6月に英文論文を出している。COVID-19が拡大していく中、再び休校やロックダウンがあり得るので、アジア諸国限定で海外での養育者の育児ストレスにもフォーカスしていくべきと考え、すでに出している論文を発展させていく形になればと考える。WHOからの報告にもあるように、DVや虐待が増えており、アジアでも憂慮されている。賛同していただけるのであれば、国内だけでなくアジア全体の親のストレスの調査、研究をすすめたい。
- 佐藤委員長より、今回は③の研究を支援するという方針について、改めて確認があり、反対意見はでなかった。①②については委員長一任ということで支援検討することとなった。佐藤委員長より推進委員会に報告されるということで協議がまとまった。

報告事項：

1. 共同研究推進・国際ハブ化推進部会、拠点化基盤推進部会からの報告 【資料4】

- 橘委員より【資料4】に基づき、本年度の採択課題についての説明があった。国際ハブ化推進部会と拠点化基盤推進部会との合同審査により採択を行った。6大学からの国際化共同研究支援は6件の申請があり、4件を採択。学外については4件中4件全てが採択された。それぞれの支援額は15万円である。

以 上

第7回（令和2年度第3回）共同利用・共同研究拠点形成・実行委員会 議事要旨

日 時：令和2年11月19日（木）9：00～10：17

場 所：各校にてWeb会議（Zoom）により開催

構成員：大阪校 佐藤 真 委員長、谷池雅子 委員、橘 雅弥 委員
金沢校 横山 茂 委員
浜松校 土屋賢治 委員
千葉校 平野好幸 委員、清水栄司 委員、高橋純平 委員
福井校 友田明美 委員、藤澤隆史 委員
弘前大学 中村和彦 委員

欠席者：大阪校 片山泰一 委員

陪 席：大阪校 段家（事務局）

委員長から【資料1】（前回議事要旨）について、内容の再確認があり、特段の意見は出されず、了承された。

議題：

1. 各部長より、事業の進捗状況について

① 広報委員長より【資料2-1】に基づき、広報委員会の進捗状況の説明があった。本年度はWebサイトのコンテンツ拡充、共共事業ロゴ制作、Webサイトの多言語化などに取り組んだ。ロゴについては広報委員会の先生だけでなく、様々な先生方のご意見、ご協力をいただいた結果、よいロゴが完成した。実行委員長より、今後もロゴを積極的に活用していくよう依頼があった。

②共同研究推進・国際ハブ化部長より事業進捗状況について以下のとおり説明があった。【資料2-2】

1) アジアコンソーシアムのネットワーク形成・連携については、コロナ禍の影響を受けているが、すでに事業連携している4ヶ国とは阪大を中心に共同研究を遂行している。本年度の国際シンポジウムの開催については、Web開催で考えている。

2) 多施設共同研究における倫理委員会の一括審査については、国内臨床研究に関して倫理指針が新しく一つにまとめられる予定であり、多施設共同研究に関しては原則一括審査、一研究につき一審査という方向で進んでいる。レジストリ構築についても、阪大で一括審査を行い承認された。6大学は全て認定を受けているので、今後は共同研究を進める上で中心となる大学で一括申請ができるので利用していただきたい。また阪大もサポートしていきたい。

3) 国際共同研究の推進、アジア共通レジストリの構築については、阪大で審査承認されたので、既存データを入れていくことになる。海外についてはプロトコルの英訳中で、その後IRB申請となる。この課題については、大阪大学附属病院・未来医療開発部から追加支援を頂けることになった。支援額はCOVID-19関連調査と合わせて500万円程度になり、この支援を活用して前にすすめていきたい。委員長より、こちらは本年度限りの予算であり、使用については指定されている部分もある。また未来医療開発部で管理している予算であるということが補足された。

4) 子どもの眠りの質問票については、アジア版を作成し、海外での使用をすすめている。

5) COVID-19関連調査については、阪大、金沢、マラヤ、インドネシアの共同研究である。阪大にて、国内の一括倫理審査は承認され、マレーシアでも審査が終わり、データ収集をはじめている。こちらも未来医療開発部からの支援はこの事業も含んでいる。

6) 国内共同研究の推進、ねんねアプリの介入効果検証については、計4大学で実際に介入効果検証をすすめている。ESDMについても弘前を中心に共同研究としてすすめている。

7) 令和元年度支援課題の研究成果発表会について。共同研究として経費支援した課題について、本年度中に成果発表会を開催したいと考えている。Web開催の見込み。

8) 2020年度の国際シンポジウムについては、1月22日にWebでの開催を考えている。

③拠点化基盤推進部会長より進捗状況について説明があった。拠点化基盤推進部会の業務として、ハード基盤の整備、倫理的課題の構築があげられる。ハード基盤の整備については、レジストリの構築を補完する形でデータストレージを考えてきたが、レジストリの構築が進んできており、その必要性を再考できるのではないかと考える。また、倫理的課題においても同様に急ぐ必要がなくなったと考える。レジストリの構築が本格的に動き出すことを考え、今後は予算を獲得していくことで研究の下支えをするということが重要になると考える。

④社会実装部会長より進捗状況について説明があり、共共事業において今後も「子どもみんなプロジェクト」を支援いただきたいとの依頼があった。事務局会議は毎月開催されている。第1回協議会の開催が12月10日に予定されており、10大学がZoom会議により、規約の整備、また教育委員会と今後の取り組みなど協議し、文科省の先生にも出席いただき、講評をいただく予定である。共同利用・共同研究ということでは、「学校と医療の連携」を考えている。学校でのメンタルヘルスの問題を医療現場でどう取り扱うか、e-learningを通して学校医に学んでいただく場を提供したいと考える。

⑤若手人材育成部会長より進捗状況について説明があった。海外・国内共同研究をすすめる若手の海外渡航を支援するというのが本来だが、新型コロナの影響により海外渡航が難しいため、本年度は拡大解釈をし、ONLINEの国際学会参加費、共同研究に関する論文投稿支援等を行うことが承認された。7件の応募があり、予算が余る場合には1月末に本部へ返納する予定である。

実行委員長より、各部会において、円滑な予算執行について依頼があった。また、阪大附属病院・未来開発医療部からの支援については、国際ハブ化部会においてルールに基づきその使用方法を決議するよう指示があった。予算については、国際シンポジウム費等で渡航等のために使用予定であった経費を合算すると50万円から100万円程度余る予定であり、これについては均等配分するのではなく、各部会長から実行委員長に要望書を提出していただき（要望書の提出期限は12月末）、それに応じて、再配分するという方法を探りたいという提案が出され、異議は出されず、了承された。また、令和4年度の概算要求にあたり、国際化をうたう事業として、COVID-19の影響を受けてどのような工夫をしたのか、代わりに何をやったのか等、具体的な説明を求められることが予想されるので、先生方へ積極的な工夫および実行したことの記録などの依頼があった。

谷池委員より、海外渡航が難しい中、Zoomを活用し、海外の講師に講演をしていただくのはいかがでしょうかと提案が出され、意見交換がなされ、今後も検討していくこととなった。

2. 各校より、事業の進捗状況について 【資料3】

①福井校・友田委員より以下の報告があった。

コロナ禍の中でも進んだこととして特筆すべきは2つあげられる。社会貢献、社会実装につながる「先端的知見の社会還元実績」事業において、大阪府下豊中市・枚方市における社会実装プロトタイプを完了した。日本全国展開も目指していくとい

う方向の中、marutori.jp (マルトリ ドット ジェイピー) というマルトリ予防啓発サイトを立ち上げた。地域住民も子育て家族を支援する「とも育て(きょうどう子育て)」が「マルトリートメント予防」に寄与することを提案し、これらの理解を広げることで、子ども虐待の予防につながるような連携の全国への普及を目指していくものである。もうひとつは、COVID-19の中、養育者の育児ストレス、心のケアの必要性について、インド、マレーシア、アメリカと国際比較研究を開始しており、その調査結果を論文第一報として執筆中である。また、オキシトシン遺伝子プロモーター領域メチル化の母親の共感性への関連についても論文出版している。

②金沢校・横山委員より以下の報告があった。

睡眠研究を阪大と継続中。

評価項目2 国際共同研究 オーストラリア・マコーリ大学に1名渡航し、研究開始。

評価項目3 ペアーズプログラム。枚方市・金沢市の教育委員会と連絡をとりカリキュラムの調整中。実施は来年度で調整中。

評価項目4 自閉症サイエンスカフェを7月から再開、継続

評価項目5 オーストラリア・マコーリ大学に2名渡航。アンキョンミン特任助教が韓国に渡航、その後バーミング大学に渡航予定

評価項目6 中国から学生2名を協力研究員を受け入れていたが、いったん帰国された。研究自体は継続中。

実行委員長よりアンキョンミン特任助教の渡航について、留学期間、研究内容について確認があった。

③浜松校・土屋委員より、評価項目1～6まで引き続き継続している、評価5は該当者なしと、説明があった。

④千葉校・平野委員より以下の報告があった。コロナ禍の中、計画に遅れがあるものの、完全に止まった活動はない。各種研究会などはオンラインで参加している。評価項目3、6 台湾師範大学との共同研究を継続中。SCAS台湾版開発と「勇者の旅」の効果検証研究の研究計画書を作成開始。

評価項目3 スウェーデンで進めている強迫症のインターネットCBTの研究に参加するため、教材を日本語への翻訳を開始する予定。

評価項目5 学振特別研究員(PD)1名をスウェーデンに派遣(11月下旬に延期)。

⑤弘前大学・中村委員より以下の報告があった

評価項目1 学校コホート研究、すいみんアプリを各校と研究継続中。

評価項目2 上海交通大との国際共同研究を継続。論文採択が3編、登録準備中が3編。

評価項目3 上海交通大との研究が国際誌に採用された。

評価項目4 コロナの影響によりセミナー、イベントは中止となっているが、市等と情報交換はしている。新聞掲載11件、プレスリリース3回、テレビ取材3回

評価項目5 ONLINEで学会参加している。

評価項目6 上海交通大学との共同研究を継続し、国際シンポジウムを計画していたが中止になり、論文執筆をすすめている。

⑥大阪校からの事業進捗状況については、共同研究推進・国際ハブ化部会長による部会進捗状況報告と同内容であることが確認された。

実行委員長より、今年度の各校への予算配分については、運営費交付金であり、その使用を各校にゆだねている。共共事業の主旨を理解いただき、有用に使っていただければよいと考えており、制限を加えるものではないと考えている、次年度についても、推進委員会で各

校に配分するという方向になっているが、共共事業における活動を行う経費ということで自由度をつけて配分するか、ある程度制限をかけていくかは推進委員会で協議することになる旨、説明があった。

以上

第8回（令和2年度第4回）共同利用・共同研究拠点形成・実行委員会 議事要旨

日 時：令和3年3月18日（木） 11：00～11：37

場 所：各校にてWeb会議（Zoom）により開催

構成員：大阪校 佐藤 真 委員長、谷池雅子 委員、片山泰一 委員

橘 雅弥 委員

金沢校 横山 茂 委員

浜松校 土屋賢治 委員

千葉校 平野好幸 委員、清水栄司 委員、高橋純平 委員

福井校 友田明美 委員、藤澤隆史 委員

弘前大学 中村和彦 委員

陪 席：大阪校 段家（事務局）

委員長から【資料1】（前回議事要旨）について、内容の再確認があり、特段の意見は出されず、了承された。

議題：

1. 各校及び弘前大学より令和2年度の活動報告【資料2】

各委員より以下のとおり、報告があった。

1) 大阪校

既存リソースの共通化について、理研・吉川研究室より ASD 患者の細胞受け入れ、管理、運営を進めている。将来的に、各校との共同研究の基盤としていきたい。評価項目6（アジアのハブとしての活動実績）としては、国際レジストリの構築、COVID-19 下の共同研究、睡眠質問票の共同研究、国際シンポジウム開催があげられる。

2) 金沢校

目標に挙げていた KPI 数値はほぼ達成でき、前年度とほぼ同様のレベルが保てた。共同研究としては、大阪大学、マラヤ大学との睡眠研究、弘前大学との共同研究準備が進んでいる。

3) 浜松校

評価項目1（6大学内での共同研究、人材交流）については、6大学全てが参画中の GazeFinder の自閉スペクトラム症診断研究の治験が進行中、来年には終了予定である。評価項目3では、浜松市全市で学校調査を行い、教育関係において大きな取り組みとなった。

4) 千葉校

既存リソースの共通化については、e-learning のサーバーを学内に設置し、運用を開始している。評価項目3（アジア・日本の地域特性に適した診断、治療、介入法の提唱）については、ACD 心理教育の RCT、勇者の旅プログラムを引き続き実施した。評価項目4（先端的知見の社会還元実績）として、認知行動療法士と学校認知行動療法指導者について、KPI を超えて指導、養成することができた。評価項目5（若手研究者育成実績）としてはコロナ禍の中、学振特別研究員や若手研究者を海外に派遣できた。評価項目6として、勇者の旅プログラムの中国語版が完成した。台湾国内でのパイロットスタディは3月でなく来年度初めにスタートする予定である。

5) 福井校

既存リソースの共通化については、約190名の脳MRIデータベースの登録を検討している。研究の貴重なリソースとなる。評価項目1については、金沢、弘前、大阪大学とともにねんねナビの遂行、人材交流を実施し、共同論文としても成果発表し

た。評価項目4としては、マルチ・ドット・ジェイピー関連において、市民公開シンポジウム1件、報道29件、専門家研修44件、教材作成6件など、実施した。評価項目5として、若手研究者2名の海外派遣が決まっている。評価項目6として、韓国の研究所と自閉スペクトラム症児の脳画像データベースをつくっていくことで合意した。

6) 弘前大学

評価項目1として、小中学生、高校生のメンタルヘルス調査を継続して実施している。うつの尺度について各校と共同で新しいスクリーニング法を開発中である。睡眠改善アプリについても引き続き共同研究を実施。評価項目2については、UCSFや上海交通大学と共同研究論文を作成している。評価項目4については、地域におけるシンポジウムを継続して実施している。評価項目6として、国際児童青年精神医学会において、幼児期の神経発達症に関するシンポジウムを企画、開催をした。

2. 広報委員会より令和2年度の活動報告【資料3】

広報委員長より、以下のとおり報告があった。前年度制作した事業ウェブサイトについてのコンテンツの拡充を行った。事業ロゴ制作に向けてとりくみ、関係者の協力を得て、ロゴの制作、デザインガイドラインの策定を完了した。また、HPの多言語化開設に向けて情報収集、ページ設計を行い、中国語版、韓国語版が完成した。また、ウェブサイトにおいて、共同研究支援の公募、研究成果、国際シンポジウムに関する情報発信などを行った。

3. 各部会より令和2年度の活動報告

1) 共同研究推進・国際ハブ化推進部会・拠点化基盤推進部会【資料4-1~4-4】

・国際ハブ化推進部会長より以下のとおり報告があった。

昨年に引き続き、学内および学外からの共同研究支援を実施し、学内4件、学外4件を採択し、支援を行った。審査については、拠点化基盤推進部会と合同で行った。令和元年度に支援した研究課題について報告会を3月29日15時から実施予定である。アジアコンソーシアム形成・連携の推進については、COVID-19の影響により新たな連携を作ることはできなかったが、すでに連携のある4施設とは連携を強めている。国際シンポジウムも実施し、海外からは大学院生も多く参加した。国際共同研究の推進については、ワーキンググループを立ち上げ、各大学の先生方にご尽力いただきながらレジストリの構築、データ入力準備を進めている。このレジストリ構築には大阪大学医学部附属病院が参画するAMED「国際共同臨床研究実施推進事業」より資金援助があり、システム構築費用に充てた。子どもの眠りの質問票の共同研究については、連携4か国全てで進行中である。「新型コロナウイルス感染拡大下における発達障がいをもつ子どもの状況と発達支援ニーズに関する調査」についても、マラヤ大学、金沢大学と引き続き共同研究を行っている。別途、福井大学とマラヤ大学との間でも共同研究が進行中である。また、バイオリソースの整備については、理化学研究所から大阪大学に検体を受け入れ、阪大が既存でもっていたバイオリソースの共同利用に向けて、整備を進めている。

・拠点化基盤推進部会長より、以下の報告があった。

拠点化基盤推進部会については、ほとんどの項目において、国際ハブ化推進部会と合同で活動した。来年度の学内・学外からの共同研究支援について募集要項を準備している。本年度は5月末には募集締め切り、採択決定し、6月には支援実施していけるよう準備を整えていきたい。

2) 社会実装支援部会【資料5-1~5-6】

部会長より、資料については、各校の委員にKPIに関し取りまとめをしていただき、提出していただいたものである。また、国際的な社会実装としては、千葉校が台湾師範大学と共同研究にて「勇者の旅」を台湾への普及している。予算については、台湾での教員用のワークブック作成費用として使用したと報告があった。

3) 若手人材育成部会【資料6-1,6-2】

部会長より、若手人材育成部会では、当初は前期・後期に分けて、若手の海外渡航を支援する予定であったが、COVID-19の影響で前期の渡航は不可能であり、予算を全て後期に回した。しかし、後期も COVID-19の影響が続いたため、使用をより広く認め、ONLINEでの学会参加費、論文英文校正費などの面で支援を実施した、と報告があった。

4. 令和2年度の予算執行状況について 【資料7】

委員長より資料に基づき、予算執行状況について説明があった。前回部会において承認された予算再配分については、国際ハブ化部会から依頼があり予算再配分を実施した。当初予算額に加え、大阪大学にて「国際シンポジウム支援経費支援」を別途獲得できたため、国際シンポジウム開催にかかった費用はこの支援から支出することができた。また阪大医学部附属病院・未来医療開発部からも支援を頂けた。当初予算の残高については、理研からの細胞移動費等に充当するなど、大阪大学にて使用させていただけないかと説明があり、了承された。

5. 令和3年度の予算計画について 【資料8】

委員長より資料に基づき、令和3年度の予算計画について説明があり、部会の活動は維持していきたいので、部会で使用できる予算総額に変更はせず、部会ごとの配分額についても本年度と同額の配分案が提案され、了承された。

6. その他

委員長より、令和2年度報告書の作成にあたり、各校の発行論文（PDF）を大阪大学に送るよう協力依頼があった。

以上

<部会議事要旨>

共同研究推進・国際ハブ化推進部会議事要旨

第7回（令和2年度第1回）

共共拠点形成・共同研究推進・国際ハブ化推進部会議事要旨

日 時：令和2年5月27日（水）15：30～16：00

場 所：Zoomにより開催

出席者：大阪校 橋部会長、菱谷委員

金沢校 辻委員、池田委員

浜松校 西村委員、原田委員

千葉校 久能委員

福井校 謝委員、西谷委員

弘前大学 高橋委員

陪席者：平野推進委員

議 題

1. 本年度の委員名簿について【資料1-1】

橋部会長から資料1-1に基づき本年度の各部会および実行委員会の委員の変更について説明があった。本年度より新たに部会に加わった菱谷委員、西村委員、謝委員の紹介があった。

2. 第5回実行委員会（5/13）の報告【使用1-2,1-3】

橋部会長より、5/13に開催された実行委員会での議事内容に関して説明があり、部会員との情報共有がなされた。本年度実行計画について資料1-2に基づいて説明があり、共同研究推進・国際ハブ化部会では昨年度に引き続きアジア地域のネットワークの拡大強化に努めること、学内外の共同研究支援を行うこと、共通臨床データベースの倫理申請および年度中に運用を開始すること、1月のこころのセンター連絡会に合わせて昨年同様国際シンポジウムを開催する予定であることについて説明があった。また、橋部会長より資料1-3に基づいて、本年度の事業予算について説明があった。

3. 学外からの共同研究公募について【資料2-1,2-2,2-3,2-4】

橋部会長より、資料2-1に基づいて、既にメール審議で同意を得ていた学外からの共同研究公募に関して、実行委員長の提案で、拠点化基盤を活用していることがアピールできるように、募集テーマを設定した計画共同研究と、昨年同様に自由なテーマで募集をする一般共同研究とを設定した経緯についての説明があった。また、計画共同研究の各テーマの受入れ教員として実行委員会および部会メールにて依頼していた、各大学2名程度の受入れ教員について各大学からの返答が求められた。

事前に返答があった、大阪大学（佐藤教授、下野准教授、橋特任准教授）、浜松医科

大学（土屋教授、西村講師）に加え、金沢大学からは横山教授（テーマ1）と池田助教（テーマ3）、弘前大学からは高橋准教授と足立准教授（テーマ2）、千葉大学から平野教授（テーマ3）が受け入れ教員となることがそれぞれ報告された。橘部会長より、千葉大学のテーマ2の受入れ教員および福井大学の受入れ教員については、早急に決定し部会長に報告するよう依頼があった。

また今回の募集は国内・国外両方の研究者を対象とすること、海外の共同研究者にも案内してほしい旨、部会長より説明、依頼があった。

4. 学内の共同研究支援について 【資料 3-1,3-2】

橘部会長から資料 3-1,3-2 に基づき、昨年同様、学内研究者を対象に海外に向けた共同研究支援の募集を行い、6月中を募集期間とする旨の説明があった。追って募集要項および申請書を各校に送付するので、各校の構成員に通知するよう、部会長から依頼があった。

5. 国際共通臨床レジストリの倫理申請について 【資料 4】

橘部会長より、REDCap システムでの共通臨床レジストリの構築について、近々倫理委員会への申請を行うこと、倫理委員会申請にあたっては、大阪大学での一括審査を考えていること、REDCap ではデータを固定するまでは大阪大学からしか全データを閲覧できないため、データ提供という形で定期的にデータを共有できる形にするためには、各施設に共同研究施設となつていただく必要があること、共同研究施設の分担責任者として各施設での医師の名前を挙げる必要があり、実行委員会及び部会メールにて各校の分担責任医師の決定を依頼していたこと、について資料 4 に基づいて説明があった。池田委員より金沢大学では廣澤徹特任助教が担当となる旨報告があり、6 大学全ての施設での分担責任医師が決定した。橘部会長より、これらの医師で部会の下にレジストリ WG を構成し、具体的にレジストリに含める項目や各施設の分担研究者（IC を取得するもの、論文化時に共著者として名前が載る予定のものは原則全員）について協議を行いたいと考えていること、部会員は可能であれば分担研究者に名前を連ねていただきたい旨の説明があった。

6. その他

担当事務の退職に伴い、共同研究支援の窓口等の事務窓口が橘部会長になる旨が、部会長より報告された

以上

第8回（令和2年度第2回）

共共拠点形成・共同研究推進・国際ハブ化推進部会議事要旨

日 時：令和2年7月9日（木）10:00～11:00

場 所：各校講義室にて遠隔講義システムにより開催

出席者：大阪校 橘部会長、
金沢校 辻委員、池田委員
浜松校 西村委員、
千葉校 久能委員
福井校 謝委員、西谷委員
弘前大学 高橋委員

陪席者：田中教授（大阪大学大学院医学系研究科附属未来医療イメージングセンター）、
段家

議 題

1. 学内より海外へ向けた共同研究支援募集 採択課題の決定【資料1,2】

橘部会長から資料1、資料2に基づき、本年度の申請内容、審査、採択結果について説明があった。審査方法については、申請者の所属大学以外の先生に審査していただいた。申請件数は6件、うち5件は審査して頂いた全先生から採択可の判断をいただいたが、残り1件は採択基準を満たしていなかったため、不採択の判断だった。したがって、本年度の学内支援件数は5件ということで決定する。また、採択にあたってのコメントは、例外を除いて、各申請者にフィードバックするという確認した。

2. 学外よりの共同研究募集 採択課題の決定【資料3,4】

橘部会長から資料3、資料4に基づき、本年度の申請内容、審査、採択結果について説明があった。4件のうち2件は海外（マラヤ、台湾）からの申請。2件は国内からの申請。4件とも採択可との判断をいただいたが、台湾からの申請は千葉大学との共同研究で、両サイドから申請されている、1プロジェクト1申請ということをも明文化していなかったため、台湾側、千葉大学側でそれぞれ支援ということで採択してよいかどうか、橘部会長より相談があった。研究を支援していくということ、同じプロジェクトからは1つととらえるべきでは、報告会・発表会で2度同じ発表をすることになる等の意見があがり、本年度は学内、学外のどちらか一方を採択するという確認した。これについては橘部会長が千葉大学にご説明し、国内・国外どちら側を採択するかご相談することになった。また、来年度の応募要項にはこの件を明文化することも確認。結果として、本年度の採択件数は、国内、国外あわせて、計8件を採択するという確認した。

3. 共通レジストリワーキンググループ(6/22)の報告【資料5】

橘部会長より、資料5に基づいて、一括倫理審査についての流れ、必要書類等についての説明があった。6月22日にZoom会議が開催され、部会長が、責任医師の先生方

にも共共事業の位置づけ、事業内での共通レジストリ作成の意味、阪大での一括審査の手順などをすでに説明している。委員の先生方にもご協力いただきたい旨、部会長より依頼があった。多施設共同研究の場合、認定臨床研究審査委員会の認定を受けていると一括申請できる。今後、共同研究を推進していく上でうまく利用していきたい。今回は早く立ち上げるために迅速審査になる可能性も高い。(海外施設も入っているので通常審査となる場合もある。)各大学でご用意いただきたいのは、「研究倫理審査依頼書」と「研究者等リスト」となる。

4. その他

昨年度の共同研究支援報告書について、学内・学外ともにすでに提出していただいている。今後ホームページに掲載予定。

以上

第9回（令和2年度第3回）

共共拠点形成・共同研究推進・国際ハブ化推進部会議事要旨

日 時：令和2年12月10日（木）14：00～14：43

場 所：各校にて Web 会議（Zoom）により開催

構成員：大阪校 橘 雅弥 部会長、菱谷好洋 委員

金沢校 辻 知陽 委員、池田尊司 委員

浜松校 西村倫子 委員

千葉校 久能 勝 委員

福井校 謝敏かく 委員、西谷正太 委員

弘前大学 高橋芳雄 委員

欠席者：浜松校 原田妙子 委員

陪席：大阪校 段家（事務局）

議題：

1. 第7回実行委員会（11月19日開催）の報告【資料1】

議事要旨に基づき、部会長より議事内容の報告があり、情報を共有した。

2. アジアコンソーシアムのネットワーク形成・連携の推進について

部会長より、進捗状況の説明があった。今年度は COVID-19 の影響があり、すでに協定を結んでいる 4 ヶ国以外へ連携を広げることができなかったが、4 ヶ国とは共同研究を順調に遂行しており、また新たな研究計画も進んでいると説明があった。

3. 多施設共同研究における倫理委員会の一括審査について

部会長より、以下のとおり説明があった。共通レジストリに関しては、すでに阪大にて 6 大学一括申請をし、承認を得られた。国内臨床研究に関しては、今後倫理指針が新しく作られる予定であり、多施設共同研究に関しては、1 研究につき 1 審査という方向で進んでいる。6 大学は全て一括審査ができる認定を受けているので、共同研究を進める上で、今後はメインの大学で一括申請していくことが望ましい、積極的に制度を活用していただきたい。手続き上、問題があれば、必要に応じて部会でもサポートしていきたい。

4. 国内・国際共同研究の推進について

部会長より、国内共同研究、国際共同研究について、以下のとおり説明があった。国際共同研究については、共通レジストリ構築に関しては審査承認されたので、実際にデータを入れるプログラムを作成していくことになる。研究計画書やプロトコルの英訳版を現地に送っており、現地の倫理委員会にすでに申請中等前向きに動いていただ

いている。これについては、阪大附属病院・未来医療開発部より AMED 予算から 500 万円の支援を頂けることになった。海外での倫理審査費用、各大学でのデータ入力、レジストリ入力の人件費、プログラム開発の外注費などに充てたいと考えている。予算を活用して、前に進めていきたい。他には、阪大では「子どもの眠りの質問票」の取り組み、大阪校・金沢校・マラヤとの共同研究（COVID-19 影響の合同調査）、福井校・インド・マレーシアの共同研究などが進んでいる。

国内共同研究については、「子どもみんなプロジェクト」、「すいみんアプリ」など、共同研究を進めている。また、大阪校・連合小児発達学研究所附属子どものこころの分子統御機構研究センターに、本年度よりバイオリソースブレインバンク部門をたちあげた。日本のブレインバンクネットワークを作られた村山先生が来られ、自閉スペクトラム症のブレインバンクとして動き始めている。今後、リソースとして共有で使用していきたいと考えている。また、弘前大学・中村先生から、理研の吉川先生ご退任に際し、吉川先生が集めてこられたアスペルデルドの会の細胞検体保存の依頼があり、大阪大学・連合小児で管理していくこととなった。iPS 化することも含め、こちらも共同利用できるリソースとして活用していきたいと考えている。

5. 令和元年度支援課題の研究成果発表会について

部会長より、これまで支援してきた研究課題について、研究成果を発表していただく必要があると説明があった。発表会は連絡会とは切り離して実施、また今年度は令和元年度に支援した研究課題の発表をしていただき、形態は Web での開催を予定している。日程は 2 月か 3 月初旬あたりで検討する。発表会の実際の運営や準備は国際ハブ化部会が担当するので、委員の先生方に運営等協力の依頼があった。

6. 2020 年度 CRNACDD (Collaborative Research Network for Asian Children with Developmental Disorders) 国際シンポジウムについて【資料 3-1, 3-2】

部会長より、日程については、1 月 22 日（金）午前を予定している。午後はこころのセンター連絡会を予定。昨年度は“キックオフシンポジウム”として開催されたが、今年度は Web 開催を予定している。内容については、共同研究の報告、ディスカッションなどが中心になる。シンポジウムについては、大阪大学「大阪大学創立 90 周年・大阪外国語大学創立 100 周年記念事業」から開催に際し、別途 20 万円の予算がついたので、この予算を使って開催していきたい、と説明があった。また、部会長から委員に対し、シンポジウムの準備と、連絡会を含めた当日の Web 参加の依頼があった。シンポジウムで使用するパネル背景については、金沢校・池田先生に事業ロゴを入れたものを作成していただくよう依頼があった。

7. 本年度の予算の執行について【資料 2】

部会長より、COVID-19 の影響により、人の移動が滞ったため、予算が余っている。余った予算については、共通レジストリ構築のプログラム開発、プログラム外注に使用

したいと相談があった。これについて、特段異論は出なかった。

8. 来年度の再申請に向けて

部会長より、再申請の準備をしていると説明があり、申請が通れば、その後7年間まで継続となるが、毎年、一律10%のシーリングがかかることが予想される。その場合、新しい内容を入れた新規申請も考えておく必要がある。その場合は、内容等について、改めて先生方にご相談したいと説明があった。

以上

第10回（令和2年度第4回）

共同研究推進・国際ハブ化推進部会、拠点化基盤推進部会 合同部会議事要旨

日時：令和3年2月18日（木）11：00～11：42

場所：各校にてWeb会議（Zoom）により開催

構成員（国際ハブ化推進部会）：

大阪校 橘 雅弥 部会長、菱谷好洋 委員

金沢校 辻 知陽 委員、池田尊司 委員

浜松校 西村倫子 委員、

千葉校 久能 勝 委員

福井校 謝敏かく 委員、西谷正太 委員

（拠点化基盤推進部会）

浜松校 土屋賢治 部会長

大阪校 吉村 武 委員

金沢校 矢追 健 委員

千葉校 関 陽一 委員

福井校 謝敏かく 委員、藤沢隆史 委員

欠席者：浜松校 原田妙子 委員、金沢校 An Kyung-Min 委員、

弘前大学 高橋芳雄 委員、斎藤まなぶ 委員

陪席：大阪校 段家（事務局）

議題：

1. 令和2年度の予算執行状況と令和3年度予算について【資料1】

橘部会長より、本年度の予算執行状況について、資料に基づき、以下のとおり説明があった。COVID-19の影響により、当初予算の一部が未執行となったこと、また大阪大学医学部附属病院・未来医療開発部・国際医療センターから、レジストリ関連と国際研究に関して支援を頂けることになったこと、大阪大学内の国際シンポジウム支援経費を獲得したことなどにより、当初より予算に余裕が出た。また、他部会において未執行となっている予算が本部会に再配分されたので、それらを合わせ、細胞リソース移設・管理費（理研より患者の細胞リソースをご提供）と阪大が保有している ASD トリオ DNA の、全エクソーム解析高速シーケンスライブラリ作成費（バイオリソースの拠点化基盤強化。共有のデータベースとして共々として今後活用、整備をすすめていく）などに充てた。令和3年度の予算については、本年度と同様、2部会合同で、本年度と同額の前算計上があると聞いている。来年度についても、共同研究支援、国際シンポジウムの実施、国際連携をさらに広げていきたい。

レジストリに対して大阪大学未来医療開発部より配分していただいた追加予算については、今年度中の執行が必要であり、現在菱谷委員を中心に WG の先生方に動いていただいているが、ご多忙な中もあり進行が遅延している部分もある。部会員の先生方

にも WG の先生方のお手伝いをお願いしたい。

ライブラリの検体数、サンプル内容については、質疑応答があり、またゲノム解析データはデータベース化を図り 6 大学で共同利用できることが確認された。

2. 令和 3 年 1 月 22 日 CRNACDD 国際シンポジウムについて【資料 2】

橘部会長より資料にもとづいて以下のとおり説明、報告があった。オンラインでの参加者は 60 名強、対面での参加者は 15 名、学生の参加も多かった。シンポジウム後、各国先生方と打ち合わせをし、データシェアリングについては同意書を交わし、3 月には動き始めるということで合意を得た。データシェアリングだけでなく、施設間の交流等についても合意をし、フィリピンとの MOU 締結準備など進めている。来年度についても、本年度同様、入試の時期に合わせて開催したいと考えている。

3. 令和 3 年度 共同研究募集要項案について【資料 3-1~3-6】

土屋部会長より資料にもとづき以下のとおり説明があった。募集要項に掲載している受け入れ担当の先生方には、受け入れのお力添えをお願いしたい。また拠点化基盤の先生方にはその仲介役となっただき、審査にもご協力いただきたい。

4. 令和元年度・2 年度支援の共同研究の報告会について【資料 4】

橘部会長より、報告会の準備を辻委員、高橋委員、原田委員、久能委員からなる準備小委員会で行っている旨説明があり、辻委員より報告会開催について、現在の進捗状況について説明があった。協議の結果、令和元年度支援の研究については、本年度中（3 月半ばから下旬）に報告会を開催する、また 2 年連続で継続している研究については、本年度もしくは来年度のどちらかで発表していただくことが確認された。

その他：

・土屋部会長より、令和 3 年度の拠点化基盤推進部会の活動の方向性について、現在共同研究推進・国際ハブ化部会で進めている国際レジストリの構築の支援を中心に、外部資金獲得に向けて活動していく旨、説明があった。

・令和 3 年度共同研究募集要項と国際シンポジウムプログラム、写真を HP に掲載する。

以上

社会実装支援部会議事要旨

令和2年度第1回 社会実装支援部会 議事要旨

6/1（月）10：00-11：00 @連合小児の遠隔講義システム

出席者（敬称略）：清水、奥野、岩淵、松崎・嶋田、新川、浦尾（書記）

議題

（1）昨年度の活動報告につきまして（資料1-1, 1-2, 1-3）

1-1：子どもみんなプロジェクトと「勇者の旅」を中国語にさせていただきました。

1-2：各校から提出いただいた内容をExcelの表をまとめたもの。今年度も各校に同様の作業をお願いする予定。

1-3：社会実装支援部会だけでなく全体での昨年度の活動報告。

実績、KPI、自己評価、改善点とある。今年度は部会として、KPIを意識した活動をしていければと考えている。

（2）今年度の活動計画とKPIのデータ収集につきまして（資料2）

資料2は、全体の委員会で提出を促されたもの。今回、仮のものとして本部に提出した。千葉校で、「子どもみんなプロジェクト」の第2期を引き受けることになった。事務局は昨年度の人に継続していただき、月1回Web会議をしているのでそれを記載。6月には今日の会議を記載している。2月にももう一度、この部会を開催したいと考えている。その頃に今年度の活動報告書を取りまとめることになっている。報告書作成にあたって、Web会議（今日の部会）で先進的知見の社会還元実績の調査を、各校の先生方に依頼させていただきたい。社会実装に関するKPIとして、【市民公開シンポ、報道数、専門家研修、教材作成】これらについて、今年度は数を意識して、社会実装部会で取りまとめて、報告したいと考えている。

表の右側に、実績、KPI、自己評価、改善点とある。最終的にここで1～7の段階評価をすることになっている。自己評価ABC、改善点を書く。その下に薄いブルーの色がついているところに、共々の申請書に書いてある7項目が書かれている。一部この評価は重複すると思うが、部会を見ていくと、評価項目4なのではないかと考えられる。他に2や7など、どこの部会とは言いつらいところもあるが、4を少なくとも我々の部会で、KPIの数字を集めるのが良いのではないかと考えている。他の評価項目は他の部会が中心的にやられるのではないかと考えられる。4について各大学の取り組みをカウントしていただき、報告書にまとめたいと考えているが、ご意見を伺いたい。

奥野）活動報告でまとめている「ねんねアプリ」「睡眠資料作成」などが、今年も上がってくると思うが、これについて、評価項目4に照らしたものをカウントして、表に載せるという作業をするということ間違いはないか？

清水) それも OK。それ以外の活動も加えていただいても構わない。昨年度のファイルに載せていないものも幅広く、例えば科研費で行っている活動なども、文科省以外の省や企業、自治体等とのコラボなども、それはそれでカウントしていただいて良いと考えている。予算はどこから？と言われたときに、示していただければ良い。

岩淵) 例えば昨年度、市と共同での調査を入れさせてもらったなど、まだ公開されていないものはどのようにカウントしていけば良いか？

清水) なるべく色々な活動を書いた方が良いので、報道はされていないがこういうコラボをしている、というように書いていただければと思う。カウントしにくいものも含めて、幅広く各校の活動を記載していただければと思う。6 大学で頑張っている成果を示していく必要があると考えている。

松崎・嶋田) 評価項目 4 について、各大学の取り込みを数えるということで承知した。

清水) 昨年度のものも含めて、まとめておいていただくと良いと思う。

新川) 去年は公開シンポジウムを月 1 ペースでやってきたが、今年度はコロナの影響で、定期的にはできないだろう。HP 上での情報公開なども、記載できれば良いかと考えている。

清水) Web での情報更新、アップデートなども、ぜひ記載をお願いしたい。

奥野) 期日は 2 月の会議までか？

清水) そのつもりでいる。今後、途中で資料を出さなければいけなくなる可能性もあるが、その場合には、昨年度のエクセルに書き加える形で良いかと考えている。数の報告については、年度末で良いかと考えている。

【子どもみんなプロジェクトの事務局会議について】

これまでは大阪校の片山先生、和久田先生を中心に 5 年間やっていたものを、千葉校へバトンタッチとなった。現在考えているのは、共共拠点の研究助成金募集が始まっているが、子どもみんなプロジェクトも同じような形で、6 大学+4 大学の 10 大学で、共同利用・共同研究して下さる方に、研究費を出させてもらおうと考えている。これまでは教育委員会の先生方と連携しながらということが中心だったが、他にもいろいろな地方自治体、医師会とのコラボなど、国内での社会実装を、第 2 期で行っていきたいと考えている。また次の事務局会議で各大学の先生方からご意見をいただいた上で、各校の教授の先生方をお願いする方向である。

(3) 予算につきまして (資料なし)

清水) 今年度も部会への予算を 20 万円いただいている。佐藤真先生からは、「できれば、国際共同研究に使っていただきたい」旨、話が来ている。ぜひ各大学の先生から「社会実装に関する国際共同研究で予算を使いたい」という希望があれば、アイデアをいただいて、「国際的な社会実装研究をしたい、している、そのために使いたい」という案があれば、いただきたい。全大学でやれるような取り組みであればなおよいが。

奥野) 個人的には、手を挙げられた大学で良いのかなと思う。今はコロナの影響で、支援系

の研究は現実的にできない。医療機関にかかるだけでもハードルが高い状況。

岩淵) 具体的な案はないが、国際共同研究もコロナ関係で難しい面が多くなっているので、どこかの校で具体的に希望されるところがあれば、そこから手を挙げていただき、会議で検討できれば良いのではないかと思います。

松崎・嶋田) 希望される方が使ってくださいと思います。

新川) こちらも今、具体的に提案できることはない。他校から提案があればぜひご助力いただきたい。

清水) 年度予算のため、各校で他の先生方にも尋ねていただき、1か月以内に「こんなものに使いたい」という希望があれば、いただきたい。

以上

令和2年度 第2回 社会実装支援部会（メール審議）

期 間 メール送信日～令和3年1月8日（金）までのご回答のお願い

方 法 メール審議

議 題 1. 社会実装支援部会の予算の使用方法について

社会実装支援部会の予算20万円については、国際的な社会実装支援という観点から、台湾師範大学で使う繁体字版の不安対処「勇者の旅」プログラムの指導者用テキストの作成費用を第一候補案にしたいと思いますが、各大学から、予算使用のご希望がございましたら、あらためて、お申し出いただければ、幸いです。お申し出をいただきました場合は、本議題は、継続審議とさせていただきます。特に、予算使用のご希望がない場合は、原案で可とさせていただきます。

可（原案を承認する）、

否（原案以外の使用目的を具体的にご記載ください）

（予算の使用希望案 _____ ）

その他：

ご依頼（1） 2月後半の社会実装支援部会のzoom会議の日程調整のお願い

以下のうちの50分程度での開催を予定しておりますので、○、X、△（都合の良い時間、悪い時間を加筆）

でご回答をいただければ、幸いです。

2月15日 月曜日の9時から12時まで、

2月15日 月曜日の13時から15時まで

2月16日 火曜日の13時から14時まで

2月17日 木曜日の12時30分以降

2月19日 金曜日の16時以降

2月24日 水曜日の9時以降（終日）

ご依頼（2）. 評価項目4. 先端的知見の社会還元実績（市民公開シンポジウム、報道数、専門家研修、教材作成）について年間の実績を調査するご準備のお願い

2月後半のzoom会議時に、おおよその各大学の社会還元実績（市民公開シンポジウム、報道数、専門家研修、教材作成）の数、内容などをお教えいただけますれば、幸いです。3月末の報告書作成に向けての準備ですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

以上

令和2年度 第3回 社会実装支援部会 議事要旨

日 時：令和3年2月16日（火）13：00～13：32

場 所：各校にて Web 会議（Zoom）により開催

構成員：千葉校 清水栄司 委員長
大阪校 奥野裕子 委員
金沢校 田中早苗 委員
浜松校 岩淵俊樹 委員
千葉校 浦尾悠子 委員
福井校 松崎秀夫 委員、島田浩二 委員
弘前大学 新川広樹 委員

◇委員長より、第2回メール審議内容について確認があり、予算使用については「勇者の旅」プログラムの指導者用テキスト翻訳費として使用することが改めて説明された。

協議事項：

1. 先端的知見の社会還元実績

各校より、市民公開シンポジウム、報道数、専門家研修、教材作成などについて、現在までの実績数、内容等の説明があった。

最終的に、報告書へ掲載する内容（推進委員会へ報告する内容）については、その報告内容、時期などを、委員長より推進委員会委員長に改めて確認し、それを委員に通知することで了承された。報告内容等によっては、フォーマットの統一を検討する。

2. その他

大阪校・奥野委員より、3月末でご退任されるとのご報告があった。

以 上

若手人材育成部会議事要旨

令和 2 年度第 1 回 若手人材育成部会 (メール審議)

以下の内容について、メール審議(2020年5月15日)を実施し、全委員から賛成を得た。

=====

若手人材育成委員会委員 各位
若手人材育成委員会
委員長 谷池 雅子

記

<審議議題>

1. 若手人材育成委員会の予算配分案について

令和元年度に、①予算(当時 50 万円)を前期・後期の 2 期で半分ずつ執行すること、
②それに合わせて、各期の初めに若手の渡航支援についての応募を行い、各期の初めに開催される委員会にて支援する若手を決定すること、という大枠について承認をいただいた。
しかしながら、コロナ関係で海外渡航が不可能である現在、予算 40 万円(令和 2 年度)を全て後期に使用したい。

2. 若手人材育成委員会の開催について

第 2 回目の開催予定は 10 月初めとし、予め応募があった中から支援する若手を選考する。

ご回答 御氏名

1. 承認する ・ 承認できない (理由)
2. 承認する ・ 承認できない (理由)

以上

令和2年度第2回 共共拠点形成・若手人材育成部会 議事要旨

日 時：令和2年10月15日（木）14:00～14:13

場 所：各校にてWeb会議（Zoom）により開催

出席者：大阪校 谷池雅子 部会長

金沢校 辻 知陽 委員

浜松校 土屋賢治 委員

千葉校 中川彰子 委員

福井校 松崎秀夫 委員

弘前大学 新川広樹 委員

陪席者：段家（事務局）

議 題

1. 令和2年度の若手人材育成部会の経費使用について

谷池部会長から、若手人材育成部会の経費使用に関して、コロナの影響があり、海外渡航が難しい中、どのように予算を使用していくか、どのように若手支援をしていけるか、予算返却もひとつだが、若手育成のためにできるだけ使っていきたいという説明があり、様々な意見交換が行われた。

以下、各委員からの意見

- ・ONLINEの国際学会に参加する若手を支援するのはどうか。
- ・ワークショップに参加する若手を支援するのはどうか。ワークショップは今後まだ多く開催される。
- ・論文の投稿支援まで広げてはどうか。投稿料、校閲料など。この場合、3月までに投稿が完了するものでないといけない。
- ・コロナの影響で帰国できず、契約延長して国際共同研究に従事してもらっている留学生を支援するために使えないか。

意見交換の結果、ワークショップ参加等にまで支援枠を広げて、参加希望者がいるかどうか周知してみる。10月末を期限とし、優先順位をつけて、どれを支援していくか決める。

以 上

令和2年度第3回 共共拠点形成・若手人材育成部会 議事要旨

日 時：令和2年11月12日（木）16：00～16：22

場 所：各校にてWeb会議（Zoom）により開催

構成員：大阪校 谷池雅子 部会長

金沢校 辻 知陽 委員

浜松校 土屋賢治 委員

千葉校 中川彰子 委員

福井校 松崎秀夫 委員

弘前大学 齊藤まなぶ 委員

陪 席：大阪校 段家（事務局）

議 題：

令和2年度若手育成支援 助成申請の決定 【資料2】

谷池部会長より、全7件の申請額合計が40万円程度になるので、大枠として、全ての申請を採択するという方向で進めたいとの意見がだされ、委員より了承された。そのうえで、具体的な支援額、内容について以下のとおり、意見交換、協議がなされた。

1. 同じ学会出張者の支援について

谷池部会長より、同じ学会に出席する弘前大学の4名は金額を統一するべきではないかという意見が出されたが、齋藤委員より、金額の違いは登録方法が異なったため（2名はEarly Bird学生登録、2名はNon-memberで登録）であると説明があった。登録変更は不可能であり、領収書の提出を条件に、4名とも申請額で支援することが決定した。

2. ゼロ評価があった案件の支援について

松崎委員より申請内容、申請者について等の説明があった。各委員より委員を通さず提出してくるのは問題があるのではないかと、他校とのバランスを考え一律支給はどうか、論文化する上で本来なら必要金額は全員が同じであるはず、等の意見交換がなされたが、平岡研究員ご本人に申請資格があるので、若手支援の主旨を理解していただき、根拠に基づいた上で、平岡研究員ご本人の名前で申請書を再提出していただく、また申請額については他校の申請内容、申請額を考慮し、上限5万円とし、支援するという方向性で合意した。提出期限は来週末とする。

再提出された申請書についてはメール審議を行い、余った予算については1月まで若手人材育成部会にて保持するが、その後共共本部へ返納する旨、谷池部会長より説明があり、了承された。

以 上

令和2年度第4回 若手人材育成部会 (メール審議)

令和2年11月17日

共共拠点形成・若手人材育成部会

部会委員各位

部会長 谷池 雅子

共共拠点形成・若手人材育成部会 持ち回り (メール) 審議について

下記の議題につきまして、持ち回りによりご審議願います。

つきましては11月20日(金)までに段家宛て返信・回答いただきますよう
よろしくお願い申し上げます。

【審議事項】

1. 福井校・平岡研究員による若手支援申請について

() 支援可

() 支援不可

2. 支援申請書の提出方法について

・「令和3年度からは各校からの申請については、必ず委員を通して提出されるものとする。申請についての照会も直接委員長ではなく委員を通すこととする。」

() 承認

() 承認しない

3. 令和3年度の支援申請書フォーマットについて

・「令和3年度からは令和元年度の申請書(添付参照)を使用し、学会のabstractや共同研究のinvitation letter、英語校正見積り、投稿料など支援の根拠となる資料とともに、公正な討議が可能なように、詳細な情報の提供を求める。」

() 承認

() 承認しない

*支援不可、不承認の場合は、その理由も併せてお知らせ願います。

以 上

③ 広報委員会議事要旨

令和2年度第1回 共同利用・共同研究拠点形成・広報委員会議事要旨

日 時：令和2年6月11日（木）9：00～9：45

場 所：各校にてZoomシステムにより開催

出席者：（大阪校）毛利育子 委員

（金沢校）横山 茂 委員

（浜松校）土屋賢治 委員

（千葉校）中川彰子 委員、沼田法子 委員

（福井校）友田明美 広報委員長、藤澤隆史 委員

（弘前大学）斉藤まなぶ 委員、新川広樹 委員

欠席者：（大阪校）片山泰一 委員

（浜松校）西村倫子 委員

議 題：

1. 共共拠点ロゴの選定について【資料1】

友田委員長より、共共拠点ロゴの制作にあたり、阪大クリエイティブユニットへの依頼とそれに対する提案結果について経緯の説明があった。藤澤委員より、提案された5つのロゴ候補に関する説明があり、これらの候補案について、各校教員から①どの候補が適切か、②それぞれのデザインに関する意見、に関して意見集約を行うこととした。

2. 共共拠点ウェブサイトの多言語化について【資料2】

友田委員長より、共共拠点ウェブサイトの多言語化にあたり、多くの学術ウェブサイトで採用されている日本語と英語に中国語と韓国語を加えた、四ヵ国語に対応したい旨の説明があった。協議の結果、現在制作中の英語版ウェブサイトを元に、中国語版と韓国語版を制作する方針が了承され、中国語版は毛利委員、韓国語版は横山委員から翻訳可能な人材に打診していただくこととなった。

3. 令和2年度共同研究支援の公募開始について

友田委員長より、「令和2年度共同研究支援の公募」の開始について、共共拠点ウェブサイト上に公募要領と申請書が掲載されている旨の説明があり、改めて各校関係者への周知について依頼があった。

4. ウェブサイト活動成果の更新方法について【資料3】

友田委員長より、ウェブサイト上の活動成果の更新方法について、資料3のテンプレートをを用いて委員長ならびに事務局宛に随時受け付ける旨の説明があった。

5. 共共拠点広報活動の他の手段（SNS・動画）について

友田委員長より、共共拠点ウェブサイト上で広報すべき関連プロジェクトのサイト情報があれば、情報提供いただきたい旨の説明があった。また今後の広報活動として、SNS や動画などの他の手段の利用可能性についても協議を継続していくことでした承された。

6. その他

以 上

<その他>

本事業ならびに本報告書についてのご意見、ご質問等は
大阪大学大学院連合小児発達学研究科 共共拠点事業 拠点形成・推進委員会委員長
(〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-2) までお願いいたします。